

---

# Coloring envelopes

閑野 寅歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Coloring envelopes

### 【Zコード】

Z7307K

### 【作者名】

閑野 寅歩

### 【あらすじ】

県立北高一年、虎野寅歩。普通の高校生、というにはあまりにも秘密の多い（たぶん）17歳。中途半端な「超能力者」（一応）である彼は、高校二年になる前の春休み、「上司」であり「育ての親」である立花さんから、淡い桜色の封筒を受け取る。その中身は、彼を「世界を終わらせてしまうかもしれない少女」に関するあらゆる出来事へ放り込むものであった。がしかし、その時の彼はまだ、「普通の日常」を変わらず送れるものだと思っていた……。オリジナルキャラばかりが活躍する、「涼宮ハルヒの憂鬱」の世界を別視

点から描いた形の一次創作小説です。

長期停止しております。

現在作者都合により更新は

オリジナルキャラのみの紹介です。

主人公

・虎野 閑歩 通称・しづくん

県立北高校の一年生。クラスメイトは鶴屋さん・朝比奈みくるなど。完全に日本人の名前だが、実はスウェーデン人。そのため、髪の色は金色。両親の消息は不明であり。幼いころから立花さんとおやつさんに育てられる。ちなみに育ちはフィンランドの山奥。

語学が堪能であり、常用語は日本語（立花さん、おやつさんが育てるとき使つてたから）だが、他に英語・フランス語・ドイツ語などを解する。しかし、それは学校では隠している。

数学も得意で、学校の成績は良好。しかし、化学だけはどうも好きになれないらしい（原因は不明）。

物心つく手前から立花さんに武術（ストレス発散の相手）を叩き込まれ（やらされ）ていた。おかげで、ずいぶん体術に優れ、ナイフの扱いにも長ける（常にベルトの裏に護身用ナイフを隠し持つているのは秘密である）。が、それも学校では隠している。

性格は非常に穏やか、社交的ではないが、閉鎖的な人間関係では決してない。かなり包容力があり、めったに怒らないが、その反面、恩義や義理を重んじ、それを軽んずる相手や行為に対しては、すぐ激昂するところもある。

いろいろ周りに隠しているがゆえに、人と接するのがどこか後ろめたく思つており。あけっぴろげ（？）で誰にでも明るい鶴屋さんにはあこがれている。唯一金髪をまったく気に話しかけてくれたのが彼女だったということもあり、ささやかな恋心を抱いていたりいなか

つたり。

実は中途半端な超能力者であり。涼宮ハルヒの作り出す閉鎖空間に入ることは苦もなくできるが、神人を倒すための能力が中途半端。閉鎖空間内においても、古泉が力マドウマ戦でみせたバレー・ボールくらいの大きさの赤い玉しか出せない。そのため、あらゆる点で古泉に劣等感を感じている。

古泉の「機関」とは敵対的であり。直接対決することはないものの、お互い敵視している。

ただし、超能力的な能力以外の基本スペックはかなり高い。料理・掃除・洗濯の家事全般はもちろんこなし、立花さんの娘・明の育児も担当するほどの家事上手。そこに学校の勉強と「仕事」が加わるわけだが、そんな日常をやりくりする超人高校生。

家事全般をそつなくこなし、育児もやって、髪が女みたいにサラサラで、肌も白いほうなので、鶴屋さんから「女の子?」といわれている。言われてる本人は微妙な心境だとか。かなりの苦労人だが、本人はそこまで苦に思っていない様子。

・立花さん（たちばな）

しづくんの「仕事」上の上司で武術の師範（一応）で名付け親で育ての親。

外見はどう見ても20代、声が40代越えたくらいのおばさんという。いいんだかどうだかわからないギャップを持つ不思議な人。常にでかくてごついサングラスをかけており、屋内屋外かかわらずかけているが、その目的はよくわかつていない。

古泉やしづくんのような超能力者ではなく、正確に言つならば「超人」。

視力が異常に発達しているらしく、本人曰く「見えちゃいけないものさえ見えるのさ」らしい。

正確に測ったデータはないそうだが、動体視力も危ない値らしく、銃弾すらかわすことができる（らしい）。

常識はずれな目を持つだけに、常識はずれな人で。武器を常に持ち歩いたり、突然「出かける」といつて、3カ月かそこいら行方不明であることもししばしば。

明の実の母だが、明の父親のことを明言することはなく、不明。謎が多く、ミステリアスな人だが。その実やさしく、頼りになる。その一方、育ての親としてしづくんに厳しくあたることもある。

「仕事」で世界を飛び回つているようだが、具体的に何をしているのかはまったく不明である。

- ・おやつさん

しづくん・立花さん・吉野の親分的存在。しづくんの育ての親でもある。

立花さんを育てたのがこの人であるらしい。実年齢不明、あごに残る無精ひげとスキンヘッドがトレードマークの、ぱつと見ただのおっさん。

日本で、しづくん・明と共に生活しており。しづくんが学校に行く間の明のお守り役。

家事全般をしづくんに一任しており、本人は一切何もしない。たまにネットやつたり、テレビ見てたり、明に無精ひげいじられたりと、自由人みたいな生活を送っている。

しかし、やることはしつかりやつているらしく。時として、立花さんを動かして色々と画策させているらしい。さらに、暇人のようだが意外と武闘派で、しづくんにはかなわないが、なかなかの体術の使い手。銃器の扱いにも長けるらしい。

立花さんと同じく「超人」であり、聴覚が異常に発達しているらしい。本人曰く「聖徳太子の真似事くらいは軽くできる」といつているが、試したことがあるのかどうかは少し疑問である。

語学に長じているらしく、英語はもちろんのこと、32力国語を完璧に話せるとか言つ。どうやらこれは事実らしい。

立花さんと同じくミステリアスな存在で、実名さえ不明だが、し

しづくんは父親的存在として受け入れており、とくに違和感はない模様。

時として重い発言をする、しづくんたちの親分である。

・吉野 華恋

しづくんと共に、立花さんとおやつさんに育てられた。しづくんと同世代で、感覺的には幼馴染というより兄妹。

しづくんと対照的で、かなり熱い性格で男勝りであり、意外と短気。男の口調でしゃべるため、かなり荒っぽい性格のよう捉えられがちだが、意外と纖細。

れつきとした女だが、家事は壊滅的である。しづくんからは「皿洗いすら任せられない」という評価をもらつほど。

乗り物全般に関して天才的な能力を發揮する。特にバイクに関しては、かなりの運転技能をもつ。他の乗り物に関しても、すぐにプロ並みに乗りこなす。

立花さん・おやつさんと同じく「超人」であり。嗅覚が異常に発達している。本人曰く「犬の1000倍」であるらしいが、犬の嗅覚自体が「人間の1000倍」とかなりあいまいなのでよくわからない。

しづくんをライバル視する一方、尊敬の念を抱いている。しかし、持ち前の男勝りな性格と、包容力がありすぎて（吉野視点からだと）ヘタってるようしか見えないしづくんへのイラつきで、つっけんどんな態度ばかりとつてしまつ。だが、根は純粋な女の子。

くしゃみが持病（？）であり、それを抑えるためか、何かの薬を常用している。

日本に住んではおりず、本拠地であるフィンランドの隠れ家で留守を守っているため。めったにこないが、たまに来たりする。

・立花 明

立花さんの実の娘。しづくんに優しく育てられ、すくすく成長中。

3歳にして、身の丈くらいの長さの美しい髪の毛が生えてきており。おやつさんが「立花と同じだな」といつている。

立花さんが実の母なのだが、留守であることが多いので、しづくんにすぐくなつていてる。

行動のところどころ、何か不思議なことを感じる事もあるが、それ以外は普通の子供。

立花さんの娘だけに、何かを秘めてそうである。

・ 中田 なかた

しづくんたちのクラスの学級委員長。しづくんの親友的な存在である。社交的で、人間関係が広く、それでいていやみや人の悪口などを言わないさっぱりした性格。しづくんの金髪にもそれほど違和感なく接しているので、仲がいい。

話のわかる男で、人が言いたがらないことを掘り下げて聞くことが多い。そこがまたしづくんと仲がいい理由らしい。

最近では珍しく紳士的とも言える人間である。

一応、完全な一般人。

・ 中西 なかにし 唯 ゆい

お嬢さん高校・光陽園高校の一年生。

ふとしたことでしづくんに接触し、自らの正体を明かす。やたらハイテンションな元気娘で、短めの髪をツインテール風にしている髪型がトレードマーク。

「みんなを仲良くなせるのがわたしの役目なのだっ！」が口癖。馬鹿っぽいしゃべり方としぐさだが、頭脳は平均以上。だが、やっぱりどこか抜けている。

その正体は……？

## プロローグ（前書き）

当小説は「涼宮ハルヒの憂鬱」の一次創作小説、というより、世界観引用のただのパクリ小説とすらいえそうなところもあります。さらに、原作に登場するキャラクターたちの出番は圧倒的に少なくなつており。その原作のキャラが主役級であればあるほど、登場頻度は少なくなります。

ハルヒとキヨンのからみや、長門の大活躍などが見たい方には適さない仕様となっています故、「ご了承ください」。

特に序盤にかけて、原作キャラはまったく登場せず。オリジナルキャラしか登場しません。原作キャラの本格的な登場は中盤からとなっていますので。その点もご了承ください。

以上の点を踏まえてお読みください。

この拙作を楽しんでいただければ幸いです。

## プロローグ

俺がその人のことについて覚えていることは、ほとんどない。

なぜならその人はたまにしか帰ってこなかつたし。

自分の子供の世話をえ俺に押し付けるほど多忙な人だつたからだ。だが、俺はその人が何をしていたのか、かなり後になるまで気が付かなかつた。

それに気づくまでの間。俺がその人に持つていた印象というのは

仕事用の封筒ですら、カラフルに色分けする。オシャレな人だつた。とこうことぐらいだろう。

気象予報士がテレビで、桜の開花がどうのこうのといい始めた頃

最初のそれが、桜色の封筒で届けられた。

まるで桜の花で作ったのかと思うほど、色鮮やかな桜色で。

低いなりを上げて飛び立つ飛行機が見えた。

滑走路をすばやく移動し、一瞬、もしかして飛ばなかつたりして、とか思つた刹那、それは金属の巨体を雲一つない青空へと運んでいつた。

飛行機を見るといつも思うのだが、どうもあの金属の巨体が空を飛ぶ、というのが不思議でたまらない。いや、なに、決して原理が分からぬ訳じやない。だが、どうもこうやって見るとどうも信じられないのだ。別に航空力学にけちをつけるつもりじゃないが、目で見てると、どうやってあのどでかい機体を飛ばしているのかまことに不思議だ。あんなのが飛べるんだから、人だつて飛べるだろうとか思えてくる。

まあそんな事は、電子レンジでものが温まるのが信じられないとか、電気はどうして物体を伝導していくのか信じられん。と言つようなものと同程度のどうでもいい事なのだが。

世の中つてもんは案外、訳のわからんもんで回つていたり変わったりするから、こいつアホな疑問も持つていたほうがよかつたりするかもしれない。

なぜそんな事言ひのかつて？なぜなら、俺たちは次の瞬間には180度常識のひっくり返つた世界にいるかもしれないからさ。

一人の少女によつてな。

閑話休題。今はそんなことどうでもいい。

どうもいつも癖で、どうでもいい時にやたらとこひこつことを考えてしまつ。

もちろん、これ自体は、これから「仕事」にかかわることなのだが…。今考える必要はない。

そう思いながら、俺はまたいつも癖で前髪をいじつた。眉を完全に覆いつくすそれを、人差し指に巻きつけ、離す。そしてまたそれは俺の眉を覆い隠す。

目線をすこし上に上げると、薄い黄色のそれが見える。…この国で

は特に異質な、金髪、ブロンドヘアーとこうやつが俺の髪の毛である。

誤解を与えないために言つておぐが、染めて金髪にしているわけでは断じてない。これは地毛なのだ。ホンモノの、髪の根っこから真正銘の金髪だ。この国では金髪の人間は異常に悪い第一印象を与えるから、初対面の人間には特に勘違いされるが、勘弁して欲しい。誤解を解こうにも、一日でこちらを不良とみなされてしまうのだからやりきれない。

そんなことより、だ。

俺は左手に視線を持つていき、安っぽい人工革のベルトを持つ、安っぽく時を刻む腕時計をのぞきこんだ。

時計の針は、そろそろ待ち合わせの15分前をさしていた。  
そろそろ指定の場所に行つたほうがいいと判断した俺は、滑走路を見下ろす空港の屋上から失敬させてもらつべく、建物の入り口へと向かつた。

そんな俺を見送るかのように、背後でまた飛行機が飛び立つた。  
低いうなりが、やたらと腹に響いた気がした。

「えーと。ヘルシンキ発の便は……どこだ？」

15分後、俺は見事なまでに迷子になつていた。

もともと俺は、人の多いところは苦手だ。いくら帰国ラッシュではない時期の国際空港とは言え、それなりに人は多い。

それのせいと言い切れるかどうかはわからんが、だが確實に迷つていることだけは確かだ。

もしかすると、俺つって方向音痴なのか？

だが、俺は雪山とかだと別に迷わないんだ。山道とかもな。そう考えると、やっぱり俺が迷つているのは人が多いせいだ。うん、そうだ、そこに違いない。

そう自分に思い込ませながらも、いつまでも迷つているのも埒があ

かん、とそろそろギブアップしようと決心した俺は。サービスカウンターはどこかと空港のパンフレットを広げ、行くべき方向を決めて顔を上げた。そのとき思わず、「あつ？」と声を上げた。いや、正確には「わつ？」に近かつたかもしれない。

顔を上げたすぐそこに、探していた顔があつた。

正確には、パンフレットをのぞき込む俺の目の前に、腕を組みながら仁王立ちしていた。

その人は、長い黒髪をなびかせ、その髪がよく映える白い肌を持つ、美しい人だ。スタイルもよく、体によくフィットした感じの黄色のハイネックシャツがこれ以上ないくらい魅力的な体のラインを表していて、少し古臭い感じもするジーンズがそのラインを引き継いでいた。

黒くて小型のキャリーバックを引き、どこかのモデルがお忍びで目立たないように旅行に行つたのかとすら思う人がいた。さらに、やたらとごつくてでかいサングラスをかけているのだから、余計そういう風に見える。

「相変わらず、人の多いところはダメかい？」

その人が、俺から空港のパンフレットを取り上げて、言つ。

外見はかなり若いのだが、声はかなりおばさんくさい。

三ヶ月ぶりに見る、変わらない外見のギャップに、俺はなんだが安心する。

が、その人はちょっと機嫌が悪いようで、パンフレットを俺につき返すと、黙つて自分の腕時計（どつかのブランドものの腕時計だ、重厚な感じの）を指差した。

時計の針は、待ち合わせ時間の3分後をさしていた。

こんな時、その人に「たかが3分の遅れじゃないですか」と言ってはいけないということを知っている。

だから素直に謝った。

「遅れてすみません、

立花さん」

俺がそういうと、その人はうなづいた。「満足そうに」「よろしいっ」といった。

そして俺にキャリーバックを押しつけ、一気に身軽になったその人は「じゃあ、行こうか」と言い置いて、タクシー乗り場を目指して歩いていった。俺は無言でついていく。

俺にしてみれば、いつものことである。

小型のキャリーバックにも関らず、やたらと重いのもいつものことである。

だからこの先も、そんな「いつもの事」がずっと続くと思つていた。

そうであつて欲しいとは思わないが、そうだらうなと勝手に思つっていた。

俺はこの先、いやといつまでも思ひ知られるのだ。  
世の中、本当に訳のわからんもんで回つてこる、といふ事を。

「おーい、大丈夫かい?」

声だけ聞けば40代くらい、外見だけはどうみても20代もギャップを持つ不思議な人 立花さんが、黒塗りのタクシーの横に立ち、俺に声をかける。

そのころ俺は、小型なのにやたら重いキャリーバックを相手に悪戦苦闘していた。いくらなんでも重過ぎる。点字ブロックさえ満足に越えられない。ダンベルでも詰まつてゐんじゃないだろうか。  
やむを得ず、力任せに引っ張つて、かなり強引に点字ブロックを越えた。

これだけ苦労して点字ブロックを越えたのは、歴史上俺くらいじゃないか、となんどなく思つてると。

「おやおや、丁重に扱つておくれよ?爆発すつかも知れないんだか

らう?」

と後ろから立花さんに言われた。

俺はその場に凍りついた。

恐ろしく重いキャリーバックの中身が、透けて見えたような気がした。

なるほど、中身が爆弾の類なら、重いのも納得できるな、といやに冷静に感心して俺を発見したころ。

立花さんがぷつと吹き出し、「爆発しないから安心しなよ」と言った。

あなたが言うと冗談に聞こえないんでやめていただきたい。

普通ならばつまらない冗談ですむところだが、立花さん相手だとそうもいかない。

この人、けつこう危ない人である。

銃火器の類はけつこう普通に持ち歩いているし（どうやって持ち込んでいるのか知らんが）、ナイフを持っていない時は記憶をどんなに探ってみても思い当たらない。

一番怖かったのは、ジーンズのベルトに手榴弾を普通にはさんで街中を歩いていたときである。

さすがに俺がやめてくれと懇願したため、それ以来はやつていなによつだが。キャリーバックの中身が手榴弾だらけだったとしても、立花さんならやりかねないと俺は思つてゐる。

だが、こんな危ない人でも、俺の仕事上の上司で、武術の師範で、名付け親で、そして育ての親なのだ。

勘弁してくれよ、とは思うが、頭が上がらないのは確かである。だが、俺がこの人にある種の尊敬を抱いているのもまた確かだ。危ない人だが、いつでも優しいし頼りになる。子供のように無邪気だつたり、時として阿修羅のようになつたりする。

氣をつかつてないようで、実は裏でものすごく氣をつかつたりとかもしてくれる。身近に接していると、表情といい仕草といい、色々ものを見せてくれる楽しい人でもあるのだ。見ていて飽きないとは、こういうことを言つのだと思つ。

と、俺が思いを巡らせていると、立花さんが怪訝そうに俺の顔を覗き込んでいた。

「なんだい？ほーっとして？どしたのさ？」

あわてて「いや、なんでもないですよ」と応対した俺をどう思つたのか、「ふーん？」と立花さんは首をかしげた。ていうか、顔が近いです。サングラス越しとはいえ、近寄つて見つめられるのは苦手だ。

「ま、そんならいいけどさつ」

と言いながら立花さんは、俺からキャリーバックを受け取ると、それをいとも簡単に持ち上げ、次の瞬間タクシーのトランクに放り込んでいた。

「さつ、行こうか」

満足そうにそう言いながら、立花さんはタクシーに乗り込んだ。いつたいその細い体のどこにそんな力があるのだろうか？

俺は引きずるのにさえ苦労したキャリーバッグを、ビーとして軽々と持ち上げられるんだ？

そう疑問に思うこと、それも、いつもの事。

タクシーに乗り込む寸前に、ふと見上げた春の空は。雲一つない、いつもの空だった。

少なくとも、このままでは。

「じつに来て、もう何年になるんだい？」

タクシーが空港を出たところだ、立花さんが質問してきた。

「えーと……住み始めたのは、一年半前くらい……ですね」

そう答えると、「ほお～、もうそんなになるかあ」と立花さんは感慨深そうに言った。声や口調は、近所のおばさんと相違ない。

それより前から散発的に日本にくることはあったが、じつらに住居を移したのは一年半くらい前のことになる。

「そうかあ……しづくんももう高校2年生だねえ……ちやんと勉強してるかい？」

「そりゃまあ、ほじほじにです」

「そーかい、あたしは学校つてことは行つたことがないからねえ……。

日本の学校はどうだい？

「いいところですよ、締め付けが強いわけでもなく、放任主義つて訳でもないんで、快適です」

事実、髪の毛のこと以外については、特に学生生活に不自由は感じていなかつた。

その後は、学校についての話が盛り上がり、しばらくぶりの会話を楽しんだ。

しかし、俺は少し意外だつた。

立花さんが日本に来るのは3カ月ぶりで、それもそう珍しいことではない。

去年 つまり、俺が高校一年生の時も、いつもって空港まで立花さんを迎えることはじょひつあつた（どうして迎えに行く必要があるのか知らないが）。

それでも、俺の学校について聞くことは今までなかつた。

いつもは、つい伸ばしちゃなにしてしまつ俺の髪形についてうだうだ言つたり。食費は月いくらぐらいでやりくりができるのか、とか、あとは自分の娘の様子についてたずねるのが常であつた。

立花さんの娘は、名を「明」と書いて「あかり」と言い、今年で三歳になる。ちなみにお守り係（育児係か？）は俺の役目で、日本に来てからというもの、明の世話をしながらの学生生活である。

不便を感じたことはあるが、不満はない。

立花さんは俺を育てた、だから俺は明を育てる。

そういう理屈だと思っていたからだつた。

そんな風にぼんやり考えていたときだつた。

たまたま赤信号で止まつたタクシーの車内が、いつの間にか無言になつていた。

その沈黙は、突然やつてきた。さきまで立花さんが話していたが、急に口を閉ざしていた。

腕と足を組んだ状態で、立花さんは押し黙つていた。

車内でもはずさないごつこつサングラスが、いやに迫力があつた。

信号が青になつたのか、タクシーが走り出した。

しかし、立花さんは黙つたままである。

さすがに、何かおかしいと感じた。

なぜ黙っているのか、わからなかつた。

沈黙は、続いた。

今まで立花さんがここまで黙つたままといふことはなかつた。

それだけに、重い。

タクシーが、もう一度赤信号で止まつた。

目の前の交差点を、大型トラックが通り過ぎた。

黒い排ガスが、交差点の中央に舞つた。

排ガスが空気と同化して、色がなくなる。

その時だつた。

立花さんが、口を開いた。

「封筒、出して」

短い、一言だつた。

タクシーが、動き出した。

俺はその声から一拍遅れて、自分のズボンのポケットを探つた。取り出したのは、桜色 そうとしか例えられない色の封筒である。細長い、クレジットカードの使用料明細とか入つてそうな大きさの封筒。

中身は、一枚の紙と、もう一つ。一回り小さい、やはり桜色の封筒であつた。

一回り小さいほうの封筒は、大きい封筒よりもさらに鮮やかな桜色をしていた。

「手紙は、呼んだかい？」

俺はうなずく。なぜか、声がでなかつた。

封筒に入つていた紙には、素つ気なく「この封筒を常に持ち歩くこと、ただし、小さいほうの封筒は開かないよつこ」とだけ書かれていた。

立花さんは、腕を組んだまま、封筒を持つてゐる俺の両手を一瞥した。

そして、「まじめだね、しづくんは」とつぶやき、袖のあたりを探り始めた。なぜか、立花さんは悲しそうな表情をしていた 様な気がした。

どういう手品か知らないが、（ハイネックシャツの）袖から小さい刃物を取り出した。

それを俺に差出し、「封筒、開けてみな」と言つた。  
ペーパーナイフを使う必要があるのかどうかは疑問だったが、ありがたく使わせてもらつた。

中に入っていたのは、4枚の紙。

それぞれに違う顔写真が貼り付けられており、履歴書のような感じで、個人情報が書かれていた。

それこそ、それぞれの人物に見せたら「どうしてこんなことを知ってるんだ?」というに違いないことが書かれている代物であった。俺は、それを無言で眺めていた。そんな俺に、立花さんは重苦しそうにこう言った。

「それが今回の、『リスト』だよ」

『リスト』とは、俺たちが仕事上使うもので、「仕事」に関係すると思われる人物の情報のことである。またはそういう人物をまとめた名簿のようなものもそう呼ぶ。

俺は、『リスト』を渡される事はどうことなのか、よく知つてゐる。

俺にも、「仕事」が『えられる 』 ということだ。

何をするのか、具体的なことはまだわからない。だが、とにかくそういうとだ。

重い。

4枚の（履歴書のような）『リスト』がやたらと重い。

俺は、もう一度、その4枚の紙に貼り付けられている顔写真を見た。

目に入る、四人の顔。

2人はすでに知っている顔で、もう2人はまったく知らない顔だった。

高校一年生となる、少し前の昼下がり。雲一つない、いつもの青空の下の出来事だった。

そしてふと思う。

俺は、もしかすると。

最初から「普通」のいつもどおりを過ごすなんて。  
許されなかつたのかもしれない、と。

本当に、ふと、そう思った。

## ～桜色・第一章～

Coloring envelopes ～桜色・第一章(1)～

春といえば、日本は桜らしい。

どこに行つてもこれ見よがしに咲く桜色の花びらが、それを証明する。

初めて桜を見た時は、この淡い色に心を打たれたものだ。俺が育つた雪山では、こんなきれいな花を咲かす木なんてなかつたからな。

個人的には、ひらひら落ちてくる花びらが好きなんだが。まあそれはいいだろ？。

そして俺は、目の前にそびえる桜の木を見上げた。

樹齢が何年か知らないが、なかなかに立派なこの桜の木は、他の桜の木と同様に枝いっぱいに桜色としか言いようのない花びらをつけていた。

その無数の桜色の中から、ひらつと、小さな桜色がはぐれた。ひらひらと、ほんのわずかな風に揺られるその桜色は。まるで最初からそこに着地しようとしていたかのように紺色の布に乗つた。紺色のブレザーを着る俺の肩に、小さな桜の花びらが乗つかった。俺はその花びらをつまみ上げ、じっくり観察してやる。

消えてしまいそうなくらい淡い桜色にすっかり見とれた俺は。何かこれを保存する方法はないかとあれこれ考えた。

結果、良案は浮かばなかつたものの、とりあえず食品みたい、ジップロックにでも入れとけばいいんじゃないだろうか。と思い立ち、ひとまずその場では、花びらの形を崩さないように手帳に花びらをはさんでおいた。

『県立北高校』と記されたその手帳を胸ポケット時。ふいに背後から怒号が飛んできた。

「こらあ！虎野お！お前まだそんな髪の色で学校に来とんのかあ！」

反射的に、うげつ、と思う。最悪のタイミングで見つかった。

「あれほど髪を黒に戻して来いといつただろうが！…」

ひたすら怒氣を全面に出して、こちらに迫ってくるのは。俺を目の敵にする生徒指導の先生。いつもはジャージがトレーデマークだが、今日はスージだ。

ジャージじゃない分、逆に暑苦しい。

「だから先生、コレ地毛ですって」

俺は自分の髪を指差して弁解する。その髪は、確かにどこからどう見ても金髪、ブロンドヘアだが、マジで地毛である。

「日本人で地下が金髪のやつなどいるかあ！親が外人ならまだしも！」

弁解はあつという間に一蹴された。いや、まあ確かに両親が日本人で、生える髪の毛が金髪って事は確かに無いわな。

でもですね先生、世の中には隔世遺伝という言葉もありまして、系譜をさかのぼつていった時にもし、『先祖様に金髪の外人がいたら、それが偶然遺伝するってこともあるんですよ？』

「やかましい！今日こそその髪を性根ごと正してやる！」

俺のやんわりした反論も、いまさら抗力があるはずもなく。髪の毛をひとつつかまれ、無理矢理連行される。

たぶん向かう先は保健室で、髪を洗わされるのであるが。こいつは地毛なので絶対落ちない。そうなると今度はバリカンで容赦なく丸坊主にされるのだ（されたことないけど、されたやつが居るらしかった）。

まあ、最近髪が伸びてきたし、丸坊主にされるのも散髪に行く手間が省けると思えばいいかな。とか思つたが、やっぱり丸坊主はいやだな。そんな風にぼんやり考えていたとき、助つ人が現れた。

突然、カシャッ、という音が響いたかと思うと。

「あーあ、せんせー。んなことしていいのかなー？」

けつけつけ、と不気味に笑いながら近づいてくる人影があつた。

その手には使い捨てのカメラが握られている。

「なつ！？中田！？何をしているんだそんなとこりで…」

生徒指導の先生が、その姿を認めるなりそう叫んだ。

「なにしてんだーってのは、こっちのセリフですよ先生？」  
中田と呼ばれた人影は、使い捨てカメラを構え、カシャツ、ともう一度カメラを使用すると。

「学校来て、いきなり先生が生徒の髪ひつつかんで連行しようとしてるから、驚いてつい写真撮っちゃったんじゃないですか」

「ヤニヤしながら言つた。その表情はひたすらに憎たらしく。

慌てて、先生は俺の髪から手を離す。

「ダメですよ先生？体罰とかやつちやあね？」

「馬鹿なこと言つな！」この程度で体罰だなんて…！」

「先生がそう思わなくつても、この中の写真、PTAとか教育委員会に見せたらどう言つでしょうね？」

先生は口をつぐんだ。

中田は勝ち誇った様子で俺に近づき、寄りかかるように（わざとらしく大げさに）肩を組んでこいついた。

「大丈夫ですよ先生。こいつが髪を染めてくるようなやつじゃないことは俺が一番よく知つてますからね」

中田が俺に軽くウインクする、「俺に任せろ」というメッセージだ。左目の方でそれを読み取つた俺は、軽くうなずいた。

「いや…しかしだな…！」

まだ食い下がろうとする相手に対して、中田は最後のトゲメをさす。

「先生、俺の親がこいつこいつのこ田やとこつて、知つてますよね…？」

すると相手は、「うぐ…」といいながら、ゆっくりと引き下がつた。「覚えてるよ…」といつてゆっくり退いていくその姿は、今後あの先生とさらに深い因縁を持つことになつたことを物語つたが。とりあえず今は丸坊主から逃れられたという事も示していた。「いやー閑歩！始業式早々丸坊主になるところだつたな！危ねえ危

ねえ！」

中田は周囲にはばかることなく、大声で笑いながらそう言った。もちろん、生徒指導の先生が見えなくなつてからだが。

「ああ、助かつたよ。ありがとよ中田」

俺は正直にそう礼を述べた。同時にさつきからくつついた状態が続いていたので、暑苦しいぞ、という顔も伝えたが。

中田は相変わらず機嫌よそうに笑つていたが、「あいよ」と答えて首にからめていた腕を取り払つた。

「それにしても単純だよなー。こんな小道具に引っかかるなんてよ」中田が先ほどの使い捨てカメラを右手でもてあそびながら言つた。「そついえば、よくカメラなんて持つてたな？」

俺が素朴な疑問をぶつけてみた。考えてみればここは学校で、本日は始業式である。普通に考えて、カメラを持つている状況じゃないし。中田は新聞部や写真部などには当然所属していない。というか、そんなけつたいな部活自体がこの学校には存在しない。

すると、中田はふつふつふ、と満足そうに笑い。

「へーえ、閑歩もだまされたか。コレ本物のカメラじやねえよ」そういふと中田はいきなりカメラ（？）をこひらに向け、カシャツ、ヒシャッターをきつた。

急に写真を撮られ、反射的に身構えた俺だったが。同時にわずかな違和感を覚えた。

「…ああ、なるほど。フィルムを巻いてないな」

中田はにやつと笑い。

「（）答。こいつはシャッターを切ると、写真を撮った音が出る仕掛けになつてんのさ。中身がどうなつてんのか知らねえけどな」と言つ。

へえ、世の中色々な物が出回つてるもんだな。と感心した俺は、

中田に「ふとこんな質問をぶつけた。

「いったいそんな物どこで手に入れたんだ？」

すると中田から意外な答えが返つてきた。

「どこでつて……こないだお前の家遊びに行つたとき。やたら外見の若いおばさんにもらつたんじゃねえか。ほら、親戚だつた言つてたあの……立花、とかいう人だよ」

「……聞かなきやよかつた。俺の友達に何を渡してるんだあの人は？つてか、なぜ使い捨てカメラを改造した小道具なんて持つてるんだよ？そしてなぜ渡す？まったくあの人の行動は相変わらず訳わからん。……まあ、今回はそのおかげで助かつたんだけどさ。

「いやー、あの人面白いよなー？外見やたら若いのに声だけおばさんでよ？それに色々役に立つんだか立たないんだかよくわからん物くれるしさ？また遊びにいきてえよ。今度は何くれんだろう？」

「あーはいはい、また今度な……つて待て、色々くれたつて言ったか？てことは他にもなんかあげてんのかあの人は……俺に隠れて何か危ないもの渡してないだろうな？今度釘を刺しておかなければ……。しかし、下手に出るとあの人のことだ、うまい事言つて逃げるに違いない。じゃあどうするか……。

と俺が思案に暮れていると。

「おーい、閑歩？そんなとこに突つ立つてねえで、早く教室行こうぜ？」

中田が退屈そうに言った。見れば、他の生徒も続々と登校しており。下駄箱周辺はちょっととした登校ラッシュの模様を呈していた。

あと少し経ついたら、本当に登校ラッシュになつていたとこだろう。人ごみが苦手な俺にとつては、このくらいがちょうど気にせず動けるボーダーラインであつた。俺は人込みに入ると、どうしてかうまく動けない。流れに身を任せたまま、行きたい方向がどっしきさえ、人にもまれているうちにすっかり忘れてしまう。気が付くと、人ごみのはずれにつつ立つてているという有様で、何が原因でこななるのかもわからない。どうやら俺は本能的に人ごみがダメなようなのだ。

「ほら、早く行こうぜ？」

中田が軽くウインクした。言葉は軽いが、人ごみが苦手な俺を気遣つての発言だと俺にはよくわかつた。ここにはそんなところも気にしてくれるいいやつなのだ。

それが、俺が中田に信頼を置く理由のひとつだといえる。  
「ああ、いくか」

中田の配慮に感謝しつつ、俺は言った。

「おい閑歩、どこ行くんだよ？」

校舎に入り、最上階へ続く階段を登ろうとする。中田にそう引き止められた。

俺はとっさに「何だよ？」と聞き返しそうになつたが、すぐにあることに気が付いたのでやめておいた。

そうだ、俺今日から高一じゃねえか。

この場に居るほぼ全員がわかっていることを、ビラやら俺はすっかり忘れていたらしい。忘却の彼方、ファーラウホールだ。行くべき教室が変わつていてのだから、今までどおりの教室に行こうとするのはそりや間違いに決まつてる。

考えてみりや、今日は始業式で、生徒は誰しも進級しているわけだ。クラス替えの発表もあり、さつきまで一年に引き続き同じクラスに配属された中田と、いくらか冷めた喜びを味わっていたはずなのに俺は、すっかり進級していたことを忘れていた。

「あ、悪い悪い。ちつとボーッとしてた」

俺なんでもない様子で、中田に軽く笑いかけたが。中田はいくらか不審そうな目でこちらを見ていた。

「お前ほんとに大丈夫か？ 今日はいつにもましてボーッとしてるぜ？」

「大丈夫だよ、ただの春休みボケみたいなもんだろ……つておい待て『いつにもまして』ってことは、いつもの俺もボーッとしてるってか？」

「あれ？ 違うのか？」

「違つわ、俺がいつぼ・つとしてたつてんだよ？」

「お前の存在感 자체がぼーっとしてんじゃねえか？」

「つるせえや、悪かつたな存在感なくて」

「おーおい、俺は別にお前の存在感が『ない』とは言つてないぜ？  
言つならば『なきにしにもあらんや』的なもんだと言つて…」

「ややこしい上に何のフォローにもなつてねえよ！」

勢いに任せて、つい大声でつっこんでしまつた。廊下に出ていた

生徒が、俺に視線を送つてくる。

ちょっとした注目を浴びて、バツが悪くなつた俺の肩を中田が叩く。

「オッケー、そのつっこみのキレなら大丈夫だ」

何が大丈夫なものか。

だが中田は特に疑念を持たなかつたようで、ちょっととした注目の中、無言で俺をうながらすとクラス分けで配属されたクラスへと向かつた。

実を言つと、いつも以上にぼうつとしていたのは事実だ（いつもぼうつとしているかはさておき）。

表面上何もないように振舞つてはいるが、内心はとても穏やかではなかつた。ある懸案が、俺の心に重くのしかかっていたのだ。

ふと、廊下ですれ違う、知り合いでもないほかの生徒の顔をちらと見た。こちらが視線を送つたのにも気づかず、その人物は去つていつた。その顔には本当に見覚えのない顔だった。そのことを確認して、安心する。

あれ以来 4人の人間がプロファイルされた、『リスト』を受け取つてから フレがクセになつてしまつた。

そう、俺の懸案事項とは、あの桜色の封筒に入つていた『リスト』のことである。

どうしてそれが懸案事項なのかといつと、理由は2つある。

一つは、『リスト』に載つていた4人の内、二人はまったく知らない人物であつたことである。名前も顔もまったく心当たりのない

人物であった。勿論そういうことは別段珍しいことではないのだが。問題はその二人の年齢であった。

その一人は共に、今年高校生になる年齢であった。高校に通う俺に『リスト』が渡され、なおかつ俺がそのとき言われたのは「普段どおりの生活を送つても構わない」と言つことだつたのだ。と言つことは、少なくともその一人とはこの高校でとは言い切れないが、この辺要するに、俺の生活圏内、と言つことだけで接触することにはほぼ間違いないと見ていい。

つまりは、『リスト』記された人物がいつの間にか近くにいたとか。実はあそこで出くわしていた。なんて事がありえるのだった。『リスト』に記される人間は仕事上の最重要人物である。ちょっとした「接触でも気をつけなければならない」というのがルールであつた。

だから、道を歩くときは神経質に目を配らなければならないのだが、これが異常な負担となる。信じられないならやってみると通行人の顔を全て確認するなんて作業を。それも、もちろん誰にも気取られることもなく。

つと、はたから聞いても何のことだかわからないような説明をしても時間の無駄と言つやつか。

要は、『リスト』に載つている人間に不用意に出会つてしまわないようにしなければならない。と言うことである。

だが、俺の懸案事項はそれだけで済むものではなかつた。  
もう一つ。

こつちは、どうなつても厄介でしかない。本当に苦労しそうなことであつた。

その心配は登校途中まで予感としてわずかに心にあつたが、クラス替えの発表時。その心配は現実のものとなつたのだと悟つた。

「おーっす」

中田が教室に入りながら適当に挨拶をした。どうやら一年時のクラスメイトがそのまま進級したようで、クラスの面子はほとんど変

わってないようであった。ちらほら新しい面子も見かけるが、知らない顔ばかりだ。

「おう中田、今年度も学級委員長頼むぜ?」

「へっ、任しとけ。このクラスまとめられんのは俺しかいねえからな」

「これは中田と旧来のクラスメイトとの会話。紹介が遅れたが、中田は一年時俺のクラスの学級委員長だった。頭の堅い大人に言わせれば「最近の若い奴は…」といわれそうなラフな奴だが、リーダーの素質は十分にあり。社交的で、適度にまじめ。話のわかる頭のいいやつでもある。ちなみに成績はそこそこ」。

クラス内では俺の唯一の友人である……友達少なくて悪かつたな。

「おっす虎野、またよろしくな

「ああ、よろしく

比較的仲の良いクラスメイトから話しかけられ、応対する。そこ無難な対応をしたと思うのだが……。

「んだよ閑歩　？暗いなあ！？もつと明るく『おーっす！またよろしく頼む』『くらい言えねーのかよ！』

と中田にどつかれた。つか言えるかそんなこと。

その後、クラスメイト一同と話し込む中田を置いて、俺は自分に割り当てられた座席へと向かった。

が、その前を女子にさえぎられた。

前に立ちはだかったのは、どうやら一年時も同じクラスだったようだが、名前も覚えていない女子であった。顔は覚えてるんだが。何事かと思ったが、その女子はきこちない笑みを浮かべながらこんなことを言った。

「お…おはよう、虎野君…」

言つた後、さらにきこちない笑みを短めの前髪からのぞかせ、自然にショートヘアを揺らすその女子に、おそらくもつとも適切だと思われる言葉をかけた。

「ああ…、おはよっ」

するとその女子は「あはは…」とか不自然に笑いながら道をあけた。別段怖い顔をして言つたつもりはないのだが、女子の顔はいくらか引きつっていた。

ちらと周囲を確認すると、窓際に固まっている三・四人の女子がこちらを見ながらニヤニヤしているのが見えた。

何だろう、新手のバッジゲームかなんかか？

とふと考えたが、特に気にせずに。再び座席へと向かうが、今度は恐れていたことが起きた。

「やつほー！ みなさんおっはよー！…」

突如として教室に響き渡る。透き通る声。軽快なリズムに乗つて出される、まるでお祭り気分の明るい声。

「やつおはよー！ おはよー！ おつ！ また同じクラスだねつ…よろしくつや！ およ？」こちらさんはハジメマシテかなつ！？」

マシンガントークと言つ言葉をそのまま具現化したような言葉の嵐。だがその声は決して耳障りではなく、まるでピアノの連弾を聴いているかのような心地よささえあった。

背中をバンシ、ヒ勢によく叩かれたのとほぼ同時に、言葉が飛んでくる。

「やつ…じすくんおっはよー！…」

振り向きざまに、そう言われた。その声の発信源は、太陽のような笑顔の持ち主。

深緑の長い髪の毛が、その人の存在を際立たせる。今度は俺がきこちない笑みを浮かべる番だった。

「お…おはようございます。…………鶴屋さん…」

我ながら、情けないくらいのきこちなさである。案の定、その人 鶴屋さんに指摘される。

「あははつ！ 何でそんなにびっくりしてんのさつ！？」

鶴屋さんの勢いに圧倒されて、何もいえない俺であつたが。目だけは俊敏に動き、鶴屋さんの背後に少し遅れてやってきた人影が居

るのに気が付いた。

ふわりとした茶髪と大きな瞳、この世すべての男の庇護欲をそそる恐るべき愛らしさを持つ少女。 朝比奈 みくる。

「おはよう、虎野君」

につこりと微笑み、実に丁寧に挨拶してくれた朝比奈さんに、俺はうなずくことしかできなかつた。

「まつーとにかくまた同じクラスだしつーよろしくつむー！」

そう言つて笑う鶴屋さんの顔を、俺はただ見ることしかできなかつた。

もう俺は、この一人に何の言葉もかけられなかつた。

ただ、二人の顔を交互に見て、ある記憶と照合していた。  
ちくしょー！やつぱりそうなのかよ！

俺が脳裏にフラッシュバックさせていたのは記憶の映像。それは、四枚の『リスト』のうち『見覚えのある』方の一枚だつた。『リスト』を確認する限り、この二人がそうであることに疑いはなかつた。だが、心の底では認めたくなかったのだ。

しかし、もうそんな儂い希望も消え去つてしまつていた。今、目の前に居る一人の少女。

鶴屋さんと朝比奈さん。この一人は、間違いなく『リスト』に記された人間であつた。

仕事上の最重要人物。不用意に接触してはならない。たどえ、わずかでも。

いつの間にか、俺は唇をかんでいた。  
何やつてるんだろう、俺。

心に残つたのは、そんな思いだけだつた。

疲れた。

その一言に尽くる一日だったと俺は思った。

始業式からこんなに疲れるとは思つてなかつた。いや、疲れるとは思つてたんだけど、予想以上に疲れた。

そんな思いを抱きながら、俺はとぼとぼ家路についていた。始業式を終えた後、放課後の予定もクソもない俺はさっさと学校を出ていた。

いや、出なければやつてられなかつた。

「ちくしょう」

心中で何度も呟いたかわからぬ、行先不明の消化不良の言葉。今日教室で俺を戸惑わせたものに対するいらだちと、今俺がここにいる理由である「仕事」への義務感がその言葉を中途半端な物にしていた。なんだろう、憎いんだけど、それのお陰で今があるみたいな感覚だ。怒りがこもっているかと言うとそうでもなく、哀しみも、喜びも入っている訳ではない。なんだか形容しがたいものが心にたまつて、あふれた拍子に出たような、何の意味も持たない言葉。

「はあ……」

そして知らず知らずの内に、ため息をつく。

ふと心に浮かぶのは、二人の顔だ。

鶴屋さんと、朝比奈さん。

今日間近で確認した一人の顔と、『リスト』にのつてゐる一人の顔

何回思い出しても、同じである。一人で間違ひなかつた。いや、

間違ひあるはずが無かつた。『リスト』にのつてゐる情報が、間違つてゐることなどない。顔を確認せずとも、あの一人で間違ひない

…。

と特定する要素は山ほどあった。なんせ、いらん事までやたら書いてある代物だからな。

だが、信じたくなかった。

だつてそりやそうだろ？

ついこの間まで普通のクラスメイトとして普通に関わってたのに。「仕事」上の理由で「不用意に接触してはならない」んだからな。こつち行動がぎくしゃくしてかなわないね。

あの一人にとつて俺がどうだつたかは知らないが、少なくとも俺は大事な友達並みには思つてたさ。よく話したからさ。

特に鶴屋さんと話せないつてのは……いや、何が「特に」なのか自分でもわからないが、なんだか、やりきれない気分になるのだった。そして、最終的にため息となつてそんな気持ちが吐き出される。

というかそれ以前に、朝比奈さんは兎も角、俺と鶴屋さんは良く話す間柄だ。それはあの学校で俺の金髪を気にせず話しかけてくれた初めての人が彼女だつたということもあつたが。一年生時、運よく近くの席であつた時期が長く、自然と話すようになつていたためだ。閉鎖的な人間関係になりがちな俺からしてみると、数少ない話し相手と言えた。

そんな人と、ある日突然「接触するな」って言われても。そんな事情知らない相手は話しかけてくるだろう、無視しようと思えばそりや無視できるが、不審に思われるのは必定だろう。下手を打てば、余計に絡まれて対応に窮する事になりかねない。

一体、どうすればいいんだか。

少しの間、思いを巡らせ考えるが……やつぱりわからん。

あきらめて肩の力を抜くと、新学期早々からけだるさを感じる体がそこにあつた。

疲れた  
。

その一言に呑めると思った、改めて思った。  
まだ、昼飯も食つてねえのに。

「ただいま」

扉を開け、家に帰った時に言つのが最も適切だと思われる文句を言い放つた。

まず言つておぐが、俺は一人暮らしでない。  
俺が立花さんから預けられている三才児の明あかづきと、立花さんの育ての親（要するに、俺からみると育ての親の育ての親だ）であるおやつさんとの共同生活である。家事全般は俺が担当し、明の子守りも俺の役目である。おやつさんは「仕事」上の色々な調整をこなしているらしい。もっとも、忙しそうにしているところはほんとうに見ないのである。

ちなみに、そんな共同生活を送っている住まいは一戸建てである。角地、平屋建ての3LDK。3人で生活するには充分過ぎる広さを持つ家である。日本に初めて来た時、立花さんが「偶然」手に入れたらしく、家でそれ以来この家が俺たちの活動拠点となっている。「みやあー！ しずにいおかえり！」

家に入るなり、甲高い舌足らずな声が俺を出迎える。奥の部屋から、小さな物体がこちらへ飛び出してくるのがわかった。

ぴょこぴょこ飛び跳ねるようにして俺に近づき、玄関に上がったばかりの俺にさっそくまとわりついた。

その姿があまりにも愛くるしく、しゃがんで、その小さな物体をやさしく抱えてやる。

「明、ただいま」

小さな子供の相手をする時、軽く猫なで声になるのは仕方が無い。口調を気にするのを忘れやすくなりに可愛らしいのだから仕方が無い。

普段は絶対こんな口調は使わないのだが、まあ仕方が無い。

そう、そんな可愛らしい存在、それがこの子。立花さんの娘・明である。今年で三才。最近、語彙が急に増えて会話ができることが増え。ああ、成長してんだなあ。と実感させられている。立花さんも俺を育てるときはこんな気持ちだったのかとも思つたりもする。

「しずにい、おやじさんがね。」はんまだあ？つて

持ち上げられた明が、気分よさそうにそう俺に伝えた。

おやじさん、とは先程ちらと出てきたおやじさんのことである。「おやじさん」と舌が回らない頃に言わせようとしたのが原因で、「つ」が言えず、自然とくだけて「おやじさん」で覚えてしまったのである。まあぶつっちゃけ、別にどちらでも変わらないからいいのだが。

それにしても、帰つてくるなり「こはん」か。はいはい、予想してましたよつと。

「よし、じゃあ」飯にしようか、明

「うん！」

純粋でいい子である。本当に立花さんから生まれたのか怪しいと思つてしまふくらいだ。あの人は生まれた時から規格外だったに違いない。

本人に言つたら、ぶん殴られるどころじゃ済まないだろ？が。家の中央に走る廊下を中ほどまで行き、右手に見える洋風の扉をひらく。六畳の居間、カーペットの上にもう春なのにこたつがでんと置かれている部屋。隅にはテレビが置かれ、お皿に定番のバラエティ番組を映し出していた。

「おお、閑歩。おかえり」

カーペットの上に寝転がりながらテレビを見ている人影が、俺が部屋に入るなりそう言つた。

行動は完全にそこらへんのおっさんだが、やたらと声に重みと深みがあるので。どうも普通のおっさんと言うには威厳があつてためらわれる。

まあ、だから俺たちはこの呼称を使うのかもしれない。

「ああ、ただいま。おやじさん」

明をカーペットの上にやせしく降りしながら、俺はそう応対した。そう、この人こそ俺たちが「おやじさん」と呼ぶ。立花さんの育ての親にして、俺たちのボスである人だ。

もう一度言つが、見てくればどうせ普通のおやじである。だが、俺たちのボスなのだ。

とはいっても、何も何百人もの人間のトップに立つとか大げさなことではない。

この人の『部下』にたるのは、俺と立花さんを含めて三人（明を含めるというなら四人）しかいない。

勘のいい人は気付いているかもしれない。「仕事」とか呼んでずいぶんと大がかりな事をやつていうように聞こえるが、俺の所属しているいわば「組織」の実態は、構成員数名の、「組織」というよりは「集団」と言つほうがしっくりくるようなところなのだ。

俺の所属する「集団」には正式な名称は存在しない。理由は単純。必要ないからである。

つまり、俺たちを一つの「組織」とみなして、便宜上俺たちをひとまとめにした名称で呼ぶような勢力が存在しないのだ。

それは敵がないっていう訳ではなくて、例えば立花さん個人なら敵はいっぱいいるが、立花さんが勝手に動いて敵を作っているので、敵からしてみれば、立花さん個人が敵であって、俺たちの「集団」をそのものは特に気にしないのだ。呼ぶ必要そのものが無いのである。

ぶっちゃけ、立花さんはめちゃくちゃ勝手に動きまわって世界中飛び回つてゐるし。ボスたるおやつさんはといえば、いつ仕事してんだ、本当は自由人なんじゃねえかと思うくらいに何もしてない。で、俺はと言えば家事担当である。

要はそれぞれでんてんぱらばらの行動をとつてるので、一つのまとまとた「集団」とみなし必要すらないのであった。

……。

そう、客観的に見れば。

確かにてんてんぱらばらではあるが、俺は一つの「集団」であると信じている。

それは「家族」つて集団だ。

そう思う理由は、俺のある特殊な出生からきているのかもしれない。確かにこの「集団」には本当に血のつながった者同士なのは（明と立花さん以外）いない。全員が、言つてしまえば「他人」だ。でも、俺を育てくれた「集団」という事実以上のものが必ずある。皆だつてそう思つてゐるはずだ。

考えてみれば、本当の「家族」だつててんてんばらばらな事一人一人がやつてゐるだろ？それでも「家族」つてまとまりだと言えるのは、そこにお互い確認する必要のない想いがあるはずなんだ。そして、それと同じものを俺たちも一人一人が持つてゐる。うまく言えないが、きっとそうだと思つてゐる。

「…おい、閑歩。どうした？ぼーっとして？」

「え？」

ふと気がつけば、俺は居間に入つたそのままの状態で突つ立つていた。

また悪い癖が出た。どうでもいいときにはどうでもいいことをやら考へたがる。

「いや、大丈夫。なんでもないよ」

苦笑しながら、そう答えた。

「大丈夫か？具合が悪いのならすぐに言つてくれよ？」  
なおもおやつさんの心配そうな声が続いた。

大丈夫だよ、そんなんじゃないから。

俺は気を取り直して、居間の隣のある台所へと向かつた。昼飯を作らなければいけばならない。

「しづにい、だいじょうぶ？」

明にまで心配そうな声をかけられた。大丈夫だつて。心配してくれるのは、いい子だ。

そろそろこう考へ込む癖を何とかしたほうがいいな、と正直に思つた。

飯の準備をしながら、ふと、何か忘れているような気がした。

だが、それがなんであつたか思い出す前に。明が台所に入つてき

たのを追に出すのに気をとられて、遂に至らなかつた。

はて、何だつたかね？

それを思ひ出るのは、昼飯が出来た後になりそつた。

「Jの「ロロッケ、うまいな」

「だろ？近くのやうやこ屋でつまそつだつたから買つて来たんだ」

といふのは俺とおやつさんの食事中の会話。

一般に昼飯つてのはラーメンとか、パスタとか、単調なめんものになることが多い。だが、栄養学的に言つて、昼飯をそんな単調に済ますのはあまり良くないらしい。

……つて知つてはいるが、俺が作ったのはやつぱりラーメンなのだつた。

全国の主婦の皆さんに同意を得られると想つので言つておけ。昼飯つて、作るのもんじくさいんだよね。なんか、氣分的に。まあ、栄養学的には兎も角。一般に昼飯とは一品料理にもつ一品何か付けば妥当と言つといふだらア。

ラーメンをゆでて、ロロッケを惣菜屋から買つてただけじゃねーかとか言わないよつて。

俺が帰つて来てからもの三十分で、冬でもないのにこたつでラーメンを食べるという空間が広がつていた。もちろん、こたつの電源は入れてはいないが。

まあ、誰かが文句を言つ訳ではないからいいだらア。

明が、小皿に分けてやつたラーメンを一本ずつちゅるちゅる食べているのを横目に見ながら、俺は今日あつたことをふと思ひ出した。それと同時だつた。

おやつさんがないつも以上の低い声で俺を呼んだのは。

「閑歩」

「ん？」

名前を呼ばれて反応したといつよつは、条件反射で声をかけられ

たから反応したというのが正しい。

「『リスト』にのっている人間は全員確認できたのか？」

少し反応が遅れた、こんな唐突に『仕事』の話がくるとは思つてもみなかつた。

「いや、まだ」

四人中一人については、いやといづほじ確認したが、残りの一二人は全く分からなかつた。

が、おやつさんは特に残念そうでもなく。

「まあ、いざれ会うことになるだらうから、心の準備だけはしておけよ?」

と言つた。

無理に探りに行かなくて、一いちから接触することにならつてことか? はたまたその逆か?

と。接触という言葉を使って、思い出したことがあつた。てが、家に帰つてすぐに明にからまれてすっかり忘れていたことだ。

「なあ、おやつさん…『リスト』にのってる人の話なんだけどさ」「ん? どうした?」

「実は、その内の二人と同じクラスなんだよ」

すると意外、……いや、俺以外なら驚かない返事が返つてきた。

「ああ、まあそういうな」

ん? あれ? 何で「まあそういう」なんだ?

内心、妙に嫌な予感がする。

「立花が『そういう』にしておく』って言つてたからな」

……あんだけ?

ちよ、ちよと待つた。どうこうことだ? 原則関わつてはいけない『リスト』の人間と、半日強制的に同じ空間にいさせるような状況に、あえて俺を置いたつてのか? どうこうことだそれは。

「閑歩、『不用意に接触するな』つてのは。何もそいつと一切関わるなつて事じやないぞ?」

おやつさんは俺の誤解を氷解させるのに十分な言葉をのたまつた。

「あくまで自然に、現状維持で関わり続けて。無理に探りを入れるようなマネはするなってことだ」

……ことは、明るく挨拶してくれた鶴屋さんと朝比奈さんに一言も返すことなく過ぎて行ったあの時間は何だったのや。り。

しかし、これで懸案事項が一つ解消された。

「うまかったぞ、じつそさん」

おやつさんがラーメンのざんぶり上に箸をおいて、両手を合わせるなりそう言つた。どんぶりは知るまですっかりなくなつた本当に空の状態であり、おやつさんの言葉をそのまま代弁していた。だが俺は、このラーメンがうまかったかどうかよりも、聞いておきたいことがあった。

実はこのことは前々から聞きたかったのだが、『いうこい』と『立花さんに聞くのがスジだらう』という判断からおやつさんに質問した事は無かつた。

だが、立花さんに聞いても答えてくれなかつたので、やつぱりおやつさんに聞くこと思つていたのだ。

「なあ、おやつさん」

はたから見れば、こんなこと聞くなんてあまりにもおかしいと思つが。

『リスト』なる個人情報を漏れな物を押領し、これから『仕事』を俺もするのだ。と覚悟を決めていた俺であったが、どうしてもひとつ。大事な事を教えてもらつてなかつた。

それは知らなきや仕事もクソも無いようなことで、といづか、今まで知らされなかつたのがおかしい事であつた。

すなわち、根本的な事。

「俺の『仕事』って、何やんの?」

そしたらすぐにとんでもない返事が返つてきた。

「さあ? 知らん。」

「…………え?」

あつさつと「知らん」と言つおやつさんに、俺は言葉を失つた。

なんじゅんじゅ。  
。

朝。

現代人ならば誰もが、目覚まし時計という名前がそのまんま役割を表しているステキな文明の利器に叩き起しだして始まるであろうこの時間。

そのステキな文明利器は今俺の頭上でもうなりを上げ、その役目を全うしようとしていた。

俺はその音源を確認するまでもなく、素早くふとんから手を伸ばし、そいつにお役目は終わつたと伝えてやつた。

今、世界は科学技術の発展やら経済の発展やらでいろいろと騒いでいるようだが。俺は全ての目覚まし時計に経済の発展に大きく貢献したとして、勲章を授与してもいいと思う。

だってよ、こいつがいなくちゃ、全ての社会人が定時に会社に来るなんて無理だろ？

だから俺はもう少し、この小さな枕元の功労者に感謝すべきだと思うね。

つてこないだ立花さんも同じような事言つてたつけ。

そう思うのと、凍えそうな冷水が顔にあたるのが同時だった。ぼやけていた意識が、一気にはつきりした。その瞬間は気分がいいが、やっぱり冷たい。

俺は顔を洗う時、温水は使わない。別にガス料金を気にしてる訳じやないぜ？

俺が育つたのが雪山であったので。習慣の様なもので、冷水のほうが肌に合っているように感じるのかも知れない。

そう言えば俺、猫舌だな、そういうことも関係あるのかもしねない。

そう思うのと、やかんが高いなりをあげ、お湯が沸くのが同時であつた。

朝のぼんやりした思考回路に、終止符が打たれる。  
時計の針は、五時三十分を指していた。  
今日も、いつもどおり。

「おひ、閑野、おはよひ。早起きだな」

おやつさんが俺の一時間後くらいに起きて来たころにはその田もつていく弁当の準備も終えて、比較的ゆっくりと、居間でくつろいでいた。

「おはよう、いつものことだろ?」

俺は、朝は強いほうのはずだ。一応、去年一年寝坊はなかつたし。

「まあ、そりやそうだが、な」

おやつさんが相変わらずの渋い声で同調した。

おやつさん。俺の育ての親 &amp;名付けの親その2。ついでに俺をどこからか拾つてきたのもこの人で、更に俺の育ての親である立花さんの育ての親。

なおかつ、俺たちのボス。ということは、少し前に説明したばかりであるが。ここではもうちょい詳しく説明してみることにする。そもそも俺の所属する『集団』 便宜上、そう呼ぶことにする

は何も無目的に集まっている訳ではない。それはまあ分かつていただけていると思うが、では一体何の『集団』なのか?それを説明しよう。

一言で説明する。眞面目に言つので笑わないで聞いていただきたい。

俺たちは、世間一般的に『超人』と呼ばれる人間たちの集まりなのである。

そう、『超人』。通常の人間とはかけ離れた能力を持つような人

間のことだ。国語辞典的に言うと、もう一個某ドイツの哲学者が説いた、人間の理想的典型的のことらしいが、それはここでは置いておく。

とりあえず、超人の集団なのだ。もつとも、人数は全員で五人だが。

まあ、んなこと急に言われたってさっぱりだろう。だから、まあ、説明していくことにする。

まずこの目の前にいるおやつさん。この人自身が『超人』である。どう超人なのか？すばり言おう。この人は聴覚が異常に発達しているのだ。少なくとも『超人』と呼ばれる程度には。

なんだ、そこまで大したことじやないとと思うかもしない。だが、この人の聴覚は異常という言葉がそのままあてはまるにふさわしい、とんでもないものだと重ねて言つておく。

なにせ、二百メートル以上離れたところから、小声でぼそぼそとしゃべっている声が聞きとれるのである。これについてはおやつさんが自分で実験しており、調子のいい時には五百メートル先の会話は聞き取れるらしい。一枚や一枚壁を隔てたくらいなら全く問題にならず、隣の部屋でなにが起きているかつつぬけだつたりする。

だからまあ、ドッキリとかサプライズと名のつくものは通用しない人である。本人に曰く、それが生きている上で一番つらい事だとういう。

わかつていただけるだろうか？こんな感じの人間が集まる所なのである（とはいえ、総員五名だが）。

ここで注意していただきたいのは、『超人』と『超能力者』は違うということである。

同じじゃないか、と思うかも知れないが、違う。

ここで言う『超人』とは、その能力 자체は人間が元々持っているものだが、そのレベル、おやつさんで言うなら、耳の良さが通常のレベルを「超越」しているから『超人』と言つ。だが『超能力』つてのはすなわち人間が元來持っていない、科学的に立証不可な、魔法

の類か念力か、はたまた透視か。そんな感じの能力を持つものを指す。

残念ながら我が「集団」にはそんな存在は集まつてはない。

とはいって、この「集団」にも一名だけ。例外のように『超能力者』がいるのだが、まあそれは置いておく。

「ああ、そういえば昨日の遅くに、立花が帰つて來たぞ」

おやつさんが、思い出したように言つた。そのおやつさんは、朝起きるなりテレビをつけ、けだるそうにそれを見ながらお茶を飲んでいる。

俺は家にいる間、おやつさんが寝てるかテレビ見てるかパソコンやつてるとこしか見たこと無いんだが。日本に来るまでは違つたのに。

そう感じながらも、俺は立花さんが帰つてきたのだという事実に純粹に驚いていた。立花さんは春休みの後半、始業式も間近と言う時に俺に『リスト』を渡した後、再びどこへともなく出かけて行っていたのだ。それ以来音沙汰なしといつもの状態だったのだが、どうも急に帰つて来たらしい。

「おっ、うわさをすればなんとやら…か、起きて來たぞ」

おやつさんが視線はテレビに向いたまま、言つ。どうやら立花さんが起きたらしい事を、自慢の耳で把握したらしい。

これで立花さんが普通に今に來たら驚かなかつたのに。

「おっはよー。早いねえ二人とも」

俺の向かい側、居間に隣接した和室のふすまが、すーっと開いたかと思うと、そこにはカットシャツに細身のパンツをはいた、絶対スーツ着て帰つてきてそのまま寝ただろとつっこみたくなる装いで入ってきた。当然、長い髪はすんげーぼさぼさであった。いつもと違うところといえば、寝起きだからいつもの「じつ」サングラスがなく、どこかかわいい感じの目が印象的だということくらいか。

いや、問題は立花さんが出て來たところにあった。和室は、俺と明が寝てこることである。そこから寝起きの立花さんが出て來た

とこう」とはつまり…。

「え、、つー！立花さんもしかして和室で寝てたんすか！？」

「あり？ 気づいてなかつたのかい？」

「いやまつたく。朝起きる時も、明をなるべくおひやないようになんがいても気づかなかつたのかもしれないが。

「はつはーん？ あたしはさ、起きた時びっくりせよつと思つて明と一緒にしづくんを抱き枕にして寝てたんだけど。起きて見たらしずくんいないからさ。へえ、しづくんもこういうのに耐性ついて、あんまさわがなくなつたのかなーって思つてたのにねえ…なんだ、気づいて無かつたのかい」

そう言われてみれば、起きる時少し体になにかまとわりついている感はあつたが、まさかそんなうれしい…じゃねえ、大変な状況だとはついぞ思わなかつた。

てか、さすがに鈍感過ぎるぜ俺。抱きつかれてて気づかないとは。ちょっと反省だ、何に反省してんのかよくわからないが。

「ふひひ、じや今度はいやでもわかるようこぎゅーっと抱きしめてあげようかい？」

勘弁して下さい。俺苦手なんですから、そういうの。応対に困るつて言うか。

そう俺が抵抗しても、不敵な笑みを崩さない立花さん。どうやら

「苦手」と言つたのが逆効果だつたようだ。

そんなこの人も、『超人』だ。

立花さんは視覚が異常に発達している『超人』だ。しかもそれは単に視力がどうというレベルを超越している。

とりあえず、見えないものを探すほうが難しいかもしれない。一キロ先、二キロ先のものはあたりまえにはつきり見えるらしいし、銃弾をかわすことが出来る動体視力（－）も持ち、近くとなれば下手なルーペよりも小さなものがはつきり見えるとか。とにかく色々超越しすぎている目を持つのだ。

そしてそれだけでもう十分なのに、おまけの「」と「超人的な人格まで持つ、ある意味パーソナリティ超人である。まあ、人格のほうについては、後々明らかになる時が来るだろうから」「」では語らないが。まあ、一言で言うなら破天荒そのものであると言わざるを得ない。

ちなみに、『超人』であるかどうかはっきり分からぬのが一名いる。

それがさつきの会話にも名前が出て来た、立花さんの実の娘、明である。

おやつさん曰く、今のところ『超人』らしき兆候は見られないとのことだが。立花さんの娘である以上、何かありそうだというのは「集団」全員の感情。

まあ、明と一番よく接している俺も特に何も感じないのでから、何もないとは思つ……が。

そんな心配をしていると、今度は後ろからまた別の声が飛んできた。

「つはよ～…うわ、弁当だ。相変わらずよく作るねえ、こんなの。あたしには無理だわ…」

けだるそうだが、どこか気が強そうな女の声。何でここにいるんだと思いながら俺はそいつの名を呼んだ。

「…吉野? 何でここに…?」

するとそいつは、くせの強い、ウエーブした（寝起きでボサボサの）髪をかき上げながら、

「…何よ、その不満そうな口ぶりは? あたしがここにこちやいけないっての?」

不機嫌そうにそういう言い放った。はなからケンカ腰である。

「別にそつは言つてな…」

「じゃ、何よ…!」

「聞きたいならしゃべらせりつての。」

「あーあ、また始まつたかい?」

あきれた様子で、立花さんがつぶやいた。  
が、俺たちには聞こえなかつた。

「別に何だつていいだろーがよ」

俺とした事が、突っぱねるよつていたのがよくなかった。

「何よその言い方！またあんた、あたしよりもちょっと優秀だから  
つていい気になつて、あたしなんていらねーとか言つんでしょ！？」  
「いつ俺がそんなこと言つた。

「だいたいあんたは昔からそうなのよー何でもソツなくこなすから

つて兄貴面すんのが気に入らないのよー」

いつ俺が兄貴面したんだ。捏造すんな。

「その無自覚なこと、だるい口調がムカつくのよー」

知らん、もう勝手にしてくれ。

後に残つたのは、怒鳴り声で耳が多少おかしくなつた俺と、怒鳴  
つてスッキリしたのか、いくらか気分の良くなつたらしい吉野だけ  
だつた。

何も生み出さないとは、まさしくこのことだと思つが。

吉野はすぐに「顔、洗つてくる」とかぶつきぢりまくに言つて放つて、  
居間から出て行つた。ああ、顔を洗つて出直してこととかつまっこ  
と言つてやろうとか思つたが、やめておいた。

吉野 華恋。

それがあいつの名である。

「集団」の中では、唯一俺と同年代である。もつとも、ホントは  
俺のほうが二つくらい年上らしいことだが。

俺と一緒に立花さんとおやつさんに育てられたので、いわば兄妹  
の様なもんである。もつとも、吉野はそれがいやらしいが。

ただ、今はフィンランド（どうだかわかるかね？）にある俺たち  
の隠れ家で留守を預かっているはずなので、ここにはいなはづな  
んだが……まあ、どうして日本に出て来たのかは、後になればわか  
るだろうな。

ちなみに、あいつも立派な『超人』だ。

察しのいい方ならもうわかるかもしね。聴覚、視覚。耳、目と  
くれば、次は鼻。嗅覚である。

吉野は嗅覚が異常に発達しているのだ。

が、前の二人に比べると弱点が多い。確かに嗅覚は犬並み（本人いわく犬以上）であるが、本人に言わせると、鼻が敏感になり過ぎて苦手な臭いを嗅いだ時はたとえその発生源が遠くでも、くしゃみが止まらなくなるそうである。で、その苦手な臭いと言つのが意外に種類が多くて困るのである。

おやつさんに言わせると「ソフト面は発達してるが、ハード面が訓練不足なんだ」…だそうである。正直、良くわからん。

なんだか最近はその対策として薬をなんか飲んでるらしいが、吉野は効果があるのか微妙だと言つている。

どちらにせよ、俺にはわかりかねる次元の話である。

「おい、閑歩。そろそろ学校に行かなきゃいけないんじゃないか？」  
おやつさんにそう言われ、はっとなる。時計の針は既に出発予定の時刻を五分過ぎていた。

まあどうせ、いつも余裕をもつて出でているから、運動がどうとう問題ではないのだが。

それでも、俺は素早く弁当をカバンに詰め込み、そいつを肩にひっさげると玄関へ直行した。

一年間はいて、流石にボロくなつてきたスニーカーに足を入れる時。俺を追いかけて来た立花さんが、ふと俺にささやいた。

「しづくん、今日は寄り道しないで早く帰ってきなよ？」

「え？」

まるで諭すように言つたので。その真意をはかりかねたのだが。俺が立花さんの言葉をつまく理解できていないでいるのを察した立花さんは、俺のあごの下をつかみ、無理矢理自分のほうを向かせて言つた。

「いいね？」

その時の立花さんはかなり真剣な顔で、全てを射抜くような、い

や、全てを見透かすような目で言つた。

やつと俺は理解した、「とにかく、なんでもいいから早く帰つて  
こい」という意味なのだと。

と思つた瞬間、つかまれていた顔が自由になつた。

「いつてらつしゃい」

さつきとは比べ物にならないくらい柔らかい口調で立花さんが言つた。顔には微笑みをたたえてさえいる。

このあたりが立花さんらしい。言つたら言いっぱなし。相手に拒否権など皆無なのだ。

まあ、逆らうつもりは無いからいいけど。

「いつてきます」

俺も微笑み返して、家を出た。

四月もそろそろ後半に入するかという頃合い。風はもうすっかり春であった。

さて、俺の所属する「集団」の紹介はもう全部したかな。  
いや、実を言うとあと一人だけ紹介していない奴がいる。

『超人』のあつまる「集団」の中で唯一の仲間外れの奴だ。そう、勘のいい人ならわかるだろう。「一人だけ例外的にいる超能力者」のことだ。

で、さらに勘のいい人ならわかるだろう。俺たちの「集団」は総勢五人で、今までに紹介したのは『超人』三人と「不明」が一人、だ。

ここまで言つてもわからない人の為にもう一声。紹介していないあと一人の話を、あんたはずつと聞いてるんだぜ？

「集団」に「所属」している残り「一人」、が「超能力者」ということは。

もう流石にいいだろう。もつたいぶつても仕方がない。  
では、一人だけいる例外的な「超能力者」は誰？

そ  
う、  
俺  
だ。

## ～桜色・第一章(2)～(前書き)

今回、少し文章の表示形式を変えました。  
気になる程度ではないと思いますが…。

俺がこの道を初めて通つたのはいつだつただろうか。  
あまりにも昔の様な気がしたが、よく思い返してみると、違ひと気が  
づいた。

しづくん、ここが君の通つところだよ？

初めてこの高校に續く、長つたらしい坂道を登り終えた後。立花さ  
んがそう言って北高を指差したのを覚えている。  
あれが確か、一年半前。

日本に来たばかりの時だつた。

あの時は、まだ何にも知らなかつた。

俺のこの、「超能力」ってやつも含めて。

今もわからなうことだけではあるんだけどな。

「よつ、閑歩」

教室に入ると、中田がいつもと変わらん調子で軽い挨拶をしてきた。

「ああ、お早う中田」

こちらも、軽く手を挙げて挨拶し返す。

俺は人ごみが苦手だから学校に早目に来るんだが、中田は中田でい  
つも俺より早くいる。こいつは一体何しに来てんだろうね？

そう思いながら中田をちらと見たが、中田はクラスの女子と何か話  
しこんでいるようだ。

あの様子だと、特に確固たる理由は無とそつであつた。  
といふか、その方がいい。

ほんやりとかばんを探り、今日授業のある教科を頭で思い返しながら

ら、教科書を取り出す。

そいや、数？の宿題があつたっけか、まあやつてあつたと思つが。数学のノートをぱりぱりとめぐると、しっかりと宿題をやり終えたページがそう探さなくても現れた。

我ながら、しつかりとやつてるじゃないか。と、軽い自己満足に浸つていると。ふと、かばんの中でもう一つものがあるのに気がついた。

日本史と物理の教科書に挟まれた形で、クリアファイルがあつた。なんだか、嫌な予感がして、教科書に挟まつたままの状態で、クリアファイルの中身をのぞき見た。

瞬間、しまつたと思つた。

そんな時に、わざわざ後ろから声をかけてくる人がいたもんだからたまらない。

「やあ、お早うさん！」

背中に軽い衝撃と共に訪れた、底抜けに明るい声。後ろを振り向かなくてもわかる。その声の主が。

そう、鶴屋さんだ。

「やあやあー、いつものことだけ早いねえ、しづくん！」

俺があいさつを返すよりも早く、すらすらと口から言葉を発する鶴屋さん。

本当は「わっ！？」とか叫んでしまってどうなくらい驚いたし、心臓が止まるかと思つてからにドキッとしたのだが、俺にしては本当によぐりまかした。

かばんの中身を、鶴屋さんに少しでも気にされてはまずかった。何せあの中には、

鶴屋さんを含む、四人分の『リスト』が入つているクリアファイルがあるのだから。

どうやら、昨日教科書をかばんに入れると、何かの手違いでノートか教科書にはさまり、かばんに入つてしまつたのだろう。

自分で呟つのもなんだが、もうちょっと注意して扱えよ俺。何で教

科書なんかに挟まるかなあ？

こんなん見つかりでもしたら、‘むね’とある。

「へしづくん、どうかした？」

鶴屋さんが俺の様子を見て、‘じつもおかしいと感じたのだろう。勘のよろしい方だ。

まあ、かばんの口を閉じてしまえば。別に焦る必要はない。

「いや？ 何もないですよ？」

しつと、自然な笑顔で俺は応対した。

さりげなくかばんを机の横にかけて、遠ざけておくのも忘れない。

「そつか、で、しづくんさ。数？の宿題ってやってきたにょ？」

そりや、やつてきましたが。

「そりやよかつた！ それでわつ、よければ教えて欲しいんだけどいいかなつ？」

そりや、拒否する理由もないし。鶴屋さんになら喜んで教えますが？でも、基本的にはなんでもこなす鶴屋さんが、数学が出来ないってことがあるのかね？

「……みくるに、だけどね

：なるほど。

鶴屋さんの後ろから、控えめに朝比奈さんが出て來た。

「虎野くん… よければ、お願ひします」

嫌というくらいにかわいい仕草でお願いされる。

いや、別にいいんですけど、ね…。

なんだか期待外れな勘が俺の心を取り巻いて、鶴屋さんをちらりと見やつた。

別に、朝比奈さんだからどうとこいつじゃないんだが…。

「朝比奈さん、それ式間違えてます。3×じゃなくて4×ですよこの値」

「えつ？ あ、ほんとだ… やだ、私ったら…」

「だからこれは相反方程式ですから、両辺を×一乗で割つて、その

あと整理して…」

「ああ、ここでの値を七と置くんですね」

「そーです。これで、あとは大丈夫ですね?」

「うん…ちょっと待つて……あつ、できたあー。」

「ほーつ、よかつたねえ、みくるつ」

「はいっ、虎野くん、ありがとう」

「いやいや、大した事はしてませんって」

実際、朝比奈さんは最初に問題を写し間違えていただけで。俺はその間違いを指摘したにすぎない。

それに、朝比奈さんは、本来こんな問題が解けないはずがない。なぜなら。

いや、よそ。こここんな事考えるのは。

「それにも流石しづくん、数学得意だねえ」

出来るにこしたことはないのでやつてる、と言えばそれまでですけど。

なんだか鶴屋さんにほめられると嬉しいな、とか思つていると、ふとある考えに思い当つた。

「ていうか、さつきの、鶴屋さんが朝比奈さんに教えればよかつたんじや…」

「しずくん、モチはモチ屋といつ言葉があつてだねえ…」

要は、得意な奴に教われというわけか。

その分野のことは、その分野の人間に任せるのが、一番いい。

?

何だか、心に引っかかるものがあつた。  
だが、その時感じたのはそれくらいだった。

鶴屋さんとも朝比奈さんとも、今は何の気兼ねもなく、以前のよつに話すことが出来る。

だが、それは「今」の話。

二人とも、いざれ俺の「仕事」に何らかの形で関わってくることは

明らかなのだ。

それが、どうやつて関わつて、その後の二人の関係がどうなるのか、それは全く分からぬ。

俺がその頃持つていた、漠然とした不安。その不安の序曲が、この日の授業中に。突然やつてきたのだ。

確か現国の授業中だつた。

「すいません、ちょっと」

気分良く、小難しい古文調小説の解説をしていた国語教諭に、扉から控えめに声をかける人がいた。

昼下がり、クラスの少なくとも2割は睡眠学習体制に入っている教室で、その人はクラス全員の視線を集めた。

俺の見る限り、その人は事務の人ようだつた。全校集会かなんかで見かけたことはあるが、教室で授業をしているところは見かけない人だつたからだ。

「虎野くんつてのは……いるかな？」

「はい？」

視線が、今度は俺に集まる。

事務の人が手招きするので、何だらうと思いながら、ためらいがちに席を立つた。

なんとなく気になつたのは、目の端でなんとなくとらえた鶴屋さんの表情が、…………そつとするくらい、にこやかだつたことだ。

朝比奈さんや中田、他多数はキヨトンとしていたのだが。

「家から、電話来てるぞ、すぐ帰つて来いって」

で、聞かされたのはそんな話だつた。

なんだ？一体何があつたんだつてんだ？

「何だが大変なことがあつたみたいだつたぞ、すごい剣幕で『いいから早く帰してくれつ！』つて」

事情はよくわからなかつたが、一つ確認しておきたかつた。

「すいません、それ女人の声でした？」

「ん？ああ、若い女人みたいだつたけど？お姉さんか？」

よくわかつた、これは早く帰らないと殺られる。

教室にもどり、教科書をかばんに放り込む。

視線は相変わらず俺に集まつたままだつた。

とりあえず、教壇につつ立つたままの教師に一言。報告した。

「すんません、早退します」

なんとなく言葉足らずな気がしたので、付け足した。

「家庭の事情で」

クラス中が茫然とした雰囲気の中。

鶴屋さんが、笑っていた。

俺には、そう見えた。

誰もいない廊下を駆け抜け、学校の外へである。

校門の外に、黒塗りのタクシーのような車が止まつていた。

助手席の開いた窓から、見慣れたサングラスがのぞいていた。

俺は迷わず後部座席に乗り込んだ。

「遅い」

助手席の窓を閉めながら、立花さんがそう言つ。

「まじめ過ぎるのも考えもんだねえ？しづくん？ケータイの電源しつかり切つてるし」

そりや、授業中なんで。当然です。

「連絡付かなくて困つたんだよ！『氣いきかしなさいよ！』」

そう言つのは、運転席に座る吉野だつた。無茶言つな。

それにしても、一体どうして呼びだされるよつたな事態になつたのか  
？てか、ぶっちゃけ何が起きた？

立花さんに聞こつと思つたその時。吉野にあつさつと遮られた。

「行くよオ！つかまつてなあ！！」

あまりに男らしすぎる掛け声と共に、吉野がハンドルを握りなおし

て、ギアをドライブに入れた。黒い手袋をはめた手が、田にもとまらぬ速度で不吉に動く。

体にとんでもない重力がかかり、座席に体が押し付けられる。せめてシートベルトを締めさせてくれ、と言おうとしたが。もうあまりにも遅かった。

車がすげースピードで走ってるのがわかつた。正確には、とりあえず車が動いているのがわかつたという次元の話だつたが。

ドア上部についている、手すりにしがみついてなんとか体勢を維持していた俺であつたが、その時、おそらく立花さんがつぶやいたのであるう小さなつぶやきを、俺は鮮明に覚えている。

「初『仕事』だねえ、しづくん」

本当にそう言っていたのか、空耳だったのか。  
どうであるかは分からぬのだが。  
恐いぐらいに、印象に残つていた。

それはきっと、これが序曲だつたから。

C . e ) 第一章・(3) )

「ついたねえ」

いつ車が止まつたのか、てかいつまで走つてたのかすら俺はわからなかつたが。立花さんのその一言で、とりあえずひと段落したことを知つた。

「ちよつと！何寝てんのよ！氣い抜いてんじゃないわよ…」

ようやく体の感覚が、停止した車に戻つてきて、生きた心地がしてきた所で、吉野にそう叫ばれた、頬むから静かにしろ。

とりあえず、車はどこかの路地に停車していた。

俺は後部座席にへばりついており、吉野は相変わらず黒い手袋をはめたまま運転席に、立花さんは車の外で、なにやら携帯をいじくっていた。

胃腸がひつくり返るような感覚をなんとかおさえて、窓越しに立花さんを見やつた。

「あいあい、位置ここで合つてんの？で、大丈夫？そっちはばれてないかい？うん」

何やら、あんま聞かんほうがいいような話を携帯でしているようだつた。もつとも、窓越しでよく聞こえなかつたが。

再び視線を車内に戻す。ようやく狂った三半規管が回復し、脳みそが平衡感覚を獲得していくにつれ、俺の中で何か別の感覚が出現しているのに気がついた。

「？」

それは、どこかで感じたことのある違和感。どこかへ、誘われているような。いや、いるべき所はここではないと体が言つているような。そんな感覚。

何かに呼ばれているような、そんな感覚で不意に車の外へ出た。

出でみるとそこはどこかの裏路地で、車も人もめったに通らない

ような、閑散とした通りであった。

傾きかけた陽が、路地を斜めに照らす中。電話を終えたらしい立花さんが、そつと俺に言った。

「や、行こうか」

俺はうなずいた。

何をすべきか、なぜかわかつていた。

こつちだ。

人気のない裏路地を、ずんずん進んでいった。  
見たと事もない道であったが、どこへ向かえばいいか、なんとな  
くつかむことが出来た。

「あつ」

思わず、声を上げる。

立花さんが聞いてきた。

「おや、ここかい？」

「はい、ここです」

そう答えながら、俺は自分の先に広がるものを見た。

何の事は無い、相も変わらず人気のない路地が広がっているだけ  
だったが。俺には違つたものが見えていた。

「ほいじゃ、行こうかねえ？」

「はい……ってえ？ 立花さんも来るんですか？」

立花さんは、そりやそうでしょといった感じで言った。

「何のためについてきたと思つてんのやつ？」

いやまあ、確かにそりやそーでけど。

「やつ、早くいくよ？」

そう言つて立花さんは、すつと手を差し伸べてきた。

なんとなく恥ずかしいながらも、立花さんの手をとった。予想

以上に柔らかくて暖かい手に驚いたりしながらも、進むべき方向へ

と向き直る。

後ろで、立花さんがクスッを笑つたのが聞こえたが、何で笑つたのかなんて気にしない事にした。

「立花さん、目を閉じていってください」

そう言いながら、俺は手を握つていない方の手を、前へ伸ばした。はたから見れば、虚空に手を泳がせている妙な風景に違いないだろうが。

伸ばして泳がせた手が、何かに入り込むような感覚を感じ取った。手の一点から、少しずつ感覚が広がっていく、水の中に入るようだ。違うものに、空気の違いを感じるような感覚。

一步、踏み出せば、その感覚が半身を覆い。もう一步、歩くと、全身が包まれた。

そこであたりを見渡せば、どこまでも暗闇が広がっていた。何も見えない闇。

何も見えないが、どこへ向かえばいいのかは、なぜだかわかつた。歩き出すと、つないでいる立花さんの手が、俺の手をさつきよりも少し強く握つていてるのに気がついた。

流石に、目を閉じて何も見えない状態だと、立花さんだって不安になるのだろうか。

だが、歩みは止めない。

そして、それほど歩かない内に景色がひらけた。

そこに広がるのは、先ほどの人気のない路地。

が、しかし。その景色はさつきとはまったく違う印象を感じさせるものだった。

一面の灰色。

色を失つたような景色が広がっていた。街並み自体は変わっていないが、空に太陽なく、周囲に人がいる気配が微塵もない。全体がうす暗く灰色で、夜の様だが、建物に光はともつていない。沈黙した灰色に包まれたと言つた感じだった。

「もう大丈夫です、立花さん」

俺は周囲を警戒しながら立花さんにそういった。

「ここが……かい？」

立花さんがつぶやくよつと言つた。

「ええ、ここが、」

その言葉が出かかって、気づいた。この言葉を口にするのは、いつぶりだらうと。

閉鎖空間。

その名の通りの、閉ざされ、一部の人間しか出入りできない空間。もつとも、ここに来るのは初めてではないが。

「相変わらず、不気味なところだねえ」

このうす暗さの中でさえ、サングラスをかけたままの立花さんが言つた。確かにそうとしか言いようがない空間だ。

この空間はいつたいどういつ空間なのか、なぜ発生するのか、どうして俺が入れるのか。

もし普通の人間がここに入つたなら矢継ぎ早にそんな質問をふつかけてくるだらうが。残念ながら、そのほとんどの質問で俺は十分に答えられない。

Q・どういう空間なのか？ A・外部との接触の断たれた一時的な灰色の空間。科学的には不明。

Q・なぜ発生するのか？ A・空間自体は『ある少女』が生みだすらしい、多分そう。

Q・どうして俺が入れるのか？ A・そういう超能力者だから。すまんね、そうとしか答えられない。

なにせ俺だつて、「言えない」んじゃなくて「わからない」んだ。ただ、明らかなことは、俺は『二年前』に突然この力を得たらしいということ。

その力は『ある少女』によつてもたらされたらしいということ。

俺以外の『そういう超能力者』は、『機関』とう組織に集められ

てこるといつこと。

そして、『そういう超能力者』の俺たちが、『この空間』でのみ、超能力者でいられるといつこと。

「どうも、こんにちわ」

不意に、背後から声がした。

ぱつと、振り返ろうとして、立花さんの手をまだ握りっぱなしだと気がついたが、その時にはもう立花さんが手を振りほどいていた。かと思つと、ジャカツ、といつ音と共にもう拳銃を構える立花さんがそこにいた。早い。

立花さんが拳銃を向けた先にいたのは、

「……どうやら、はじめまして。と言つておくのが適切でしょうか？」

背は少し高め、俺が言つのもどうだと思うがルックスはいい、飘々とした態度と嫌に丁寧な口調。そしてなんだか顔に貼り付けたような微笑み。

立花さんに拳銃（一応言つとく、多分マジチャカである）を向かれても、顔色一つ変えず、微笑みを顔に貼り付けたままの「コイツ。俺にはその顔に見覚えがあつた。

「古泉、一樹か？」

「おや？ あなたとは初対面ではありますんでしたか？」

そいつはすこし驚いた様子で言つた。

「いんや、シラを合わせるのは多分初めてだ」

そう、『余つ』のは初めてだ。

そうか、「コイツか」と俺は確信した。

四枚の『リスト』の内、見覚えのない一枚のほう。なるほどな、そして「コイツもここにいるつてことは。つまりコイツもか。

「お前も超能力者つてことか」

「『お前も』ときましたが、ええ、まあ。否定はしませんが。『

機関』の人間であると言えば十分でしょうか?」

微笑んだまま、返していく。

「実を言つと、僕もあなた方のことは知つていたんですよ」

そう語りだしながら、古泉は立花さんの方をちらと見た。立花さんはまだ拳銃を構えっぱなしだったが。古泉は別段ひるむ様子もなかつた。おい、マジでやる時はやるぞその人は。

「今、僕があなたちに接触したのも、上から言われたことにして。今回僕はちょっとしたあこがれに来たようなものなんですよ。上も、いつかは『こうなる』と思つていたんでしょ? うね」

「いぶんとひつかかるいい方をしゃがる。

「『こうなる』ってなんだよ、お前の上は俺らが何すると思つてんだ」

「強いて言えば、今回の様に、『この空間』へ干渉することです。古泉はキッパリとそう言つた。

「あなたが『この空間』に入る力があることは認めます。それはあなたが超能力者であり、僕たちと同類であることを証明しています。ですが、あなたは、『ここに入ることしかできない』、ということを忘れないで下さい。我々からしてみれば、同じ『使命』を負いながら、その『使命』を果たす出来ない方に、無駄に振り回されたくないのですよ、わかりますか?」

くそつ、と呟きたくなつた。口の言つことは正しい。  
それはどういうことか? それは多分、もう少し時間がたてばわかるや。いや、もうすぐかな。

この空間が出現する真の理由が、俺の存在意義を靈めるのだ。こいつが言つてるのはそのこと。

「ふん」

突然、口を開いたのは立花さんだった。そういうれば今までずっと黙つていたが。

「そりゃあ、あんたらの都合じゃないのかい? それも勝手なね。あたしらが関わろうが関わるまいが、あんたらにや関係ないだろ? う

に？逆に言やあね、あんたらだけが『あの娘』に関わる権利を持つてると勘違いすんなつて、あたしは思うけどねえ？」

古泉はゆっくりと立花さんに向き直った。いつの間にか、立花さんは拳銃を降ろしていた。まだ手に持つてはいたが。

「我々からしてみれば、あなたが一番の危険人物なのですよ？立花さん？」

古泉が、先程よりいくらか冷徹な口調で立花さんに言い放った。  
なんだそれ、立花さんが何かしたってのか？

「あまり『機関』を挑発されるような行動をとられると、我々もそれ相応の対応をしなければなりませんので」

「下つ端定番の口上だねえ、あたしが怖いならそう言いな？」  
俺が付いていけない中、挑発しあう（ように見える）二人は、お互い睨み合つて動かなかつた。

そして、時間がやつてきた。

青い光が、俺のはるか後方から昇つた。

古泉は立花さんから目線を離し、青い光へと向き直つた。  
灰色の世界に、何よりも目立つ巨大な青い光。  
それが、ビルの高さ以上の人型になつていく。  
『この空間』が発生する真実の意味。

これが現れた途端、俺の存在意義は無に帰す。  
誰も、何もしゃべらなかつた。

## （桜色・第一章（4））

C・e・) 第一章・(4) )

巨大な青い光が、灰色の街をやたら明るく照らし出す。やがてその光は巨大な人型にまとまり、頭と思われる部分に顔と思われる赤黒い光を付けた。

その人型の光が誕生する瞬間、それはとてもなく幻想的で超常的な光景だ。

人によつては感動を感じるし、恐怖にも感じる光景であろう。

ふと、俺はどちらだろうと考へた。

そしてかき消す。そんなこと、どうでもいい。

「さて、」

古泉が口を開いた。

「そろそろ、危険ですのであなたがたは退去なされた方がよろしいと思われますが？」

そつけなく言いやがる。

「あんたこそ、さつさとあたしらなんて放つておいて行かなきやいけないんじやないのかい？」

立花さんはやはりケンカ腰で応対する。

古泉はふつ、と不敵な微笑を見せた後、俺に向かつて、こう言い放つた。

「ええ…、残念な事に。私は暇では無いですからね。力を持ちながら、『神人』を倒す使命を持たない方、とは違いますからね」露骨な嫌味であった。俺にとっては最大級の侮辱である。

『神人』。こいつら『機関』の人間はあの光の巨人をそう呼ぶ。

そして、少なくとも『機関』に所属する『超能力者』たちは、この『神人』を倒す力を持ち、なおかつ、この空間に入りできる。

では、俺はどうであるのか？

俺が、この『超能力』を持ちながら、機関の人間にならなかつた、いや、なれなかつた。その最大の理由は、

「では、これで失敬させていただきます……。『同じ使命を持つ仲間達』のところへ行かねばなりません」

意地悪く笑いながら（少なくとも俺にはそう見えた）、そいつは俺らから一、三歩後ろに離れた。

そして、少し距離を取つたのを確認してから。古泉はその『超能力』を発動した。

瞬間、古泉の姿は赤い光に包まれた。いや、古泉自身が赤い玉になつた。

そして赤い玉は俺たちの前で浮き上がつたかと思うと、高速で『神人』の方へ飛び立つて行つた。見ると、青い光に照らされた『神人』の周囲には、同じような赤い玉が飛び回つていた。と言つても、ここからでは遠く、小さく赤いものが飛んでいるのが見えただけだつたが。

巨大な青を取り巻く、多数の赤玉。

しばらくもしない内に、『神人』はその巨大な腕を振り上げ、近くにあつた、『神人』と同じくらいの大きさのビルに、振り下ろした。

「うわっ！？」

立花さんが珍しく、驚きの声を上げた。

無理もない。『神人』は、上げた腕を振り下ろしただけで、その先にあつたビルを完全に倒壊させていた。ビルはすさまじい轟音と地響きをおこしながら崩れしていく。

「があーっ……ハヂにやるねえ……」

俺は目の前の光景に目を見張りながらも、立花さんの言葉に冷静に同意していた。

なぜか頭は冴えわたり。目の前で起きていることを『当然のこと』として俺の頭はとらえていたようだつた。光の巨人が灰色の街を壊

していても、何も感じていなかつた。

なんだろう。今日の前で起きていることの理由を、始めから全部知つてゐるような……そんなよくわからない感覚。

『神人』はなおも、周囲の建物を破壊する活動を続けていた。動作は比較的ゆっくりだが、圧倒的な力でひたすら壊していく。ビルをへし折るだの、踏みつけるだの、押し倒すだの、あつという間に『神人』のいる周囲は廃墟以下の荒れ地へと変貌しているようだつた。目の前に建物があつて実はここからじや良く見えないんだけどさ。ビルの屋上とか行けば、きっと世紀末な景色が見れるだろうが。

と、そこへ。

再び腕を振り上げようとする『神人』の顔（と思われる部分）をかすめるように赤い小さな玉が横切つた。

『神人』は一瞬ひるむような動作をした後、そのスキを狙つてが、今まで『神人』を遠巻きに囮んでいた赤い玉が、一斉に『神人』への包囲をせばめた。様々な角度から、『神人』へ高速で接近していく。

「…………ちつ

目の前で繰り広げられる、一般人にとつては理解の範疇にとうていおさまるはずもない戦い。

それは同時に、俺の絶対的にどうしようもない『超能力者』としての欠点を見せつけられているのである。

そう、俺と、今日の前で神人との戦いに参加している『超能力者』との最大の違い。

俺は、『神人』と戦えない。

理由は単純。俺はあいつらみたいに赤い玉になれない。

それ以上でもなければ、それ以下でもない。

なぜだか知らないが、『超能力者』はこの空間に入りし、出現

するあの『神人』とやらを倒し続ける『使命』を負つてやがるのだ  
といふ。

そうしないと、いけないそうだ。誰が決めたかなんてしるか、知  
りたくもないね。

ちなみに、俺にも『神人』と戦う力が全く無いわけじゃない。

俺は左手を前に突き出し、手の平を上に向けた。

そして一回その手を握り、もう一回。左の手を意識しながら手を  
素早く開く。すると

バレー ボールくらいの大きさで、きれいな球体をした赤い玉が、  
手の平の上に音もなく浮かび上がった。

効果音をつけるなら、ぼつ、って感じだらうが、素つ気なく、音  
も出ない。

ロマンもかっこよさもあつたもんじやない、おまけに。

俺は、少し助走をつけて、ハンドボールの要領で『神人』  
に向かつてその赤玉を投げつけた。

我ながらなかなか勢いのある感じで飛んで行つた赤玉であつたが。  
『神人』までの距離は残念なくらい離れており。あんな大きさの玉  
では、その距離まで届く前に、目で見ることが難しい大きさになつ  
てしまつて、当つたのかどうかさえ分からなかつた。

当つていたとしても、神人に何か変化があつた様子はまったく見ら  
れなかつた（ちなみに当つているかどうかは立花さんに聞けばわか  
るが、虚しい回答以外が返つてくる可能性はゼロなため聞かない）。

中途半端な上に、まったくの役立たず。

それが、俺の持つ素晴らしい『超能力』だ。

サイコーだね、くそつたれめ。

「……あーあ、情けねえ……」

ぼそつと、自分で自分につぶやいた。

すると、立花さんが何か言いたそうな顔をしたが、何も言わなか  
つたので無視した。

そーいえば、どうして俺ここにいるんだっけ？

なんだかんだで一番重要なとこを失念していたことに気づいた。が、それはまた、ビルの倒壊とは違う地響きがその思考を遮った。

散々周囲を破壊していた『神人』が崩れる音だった。

どうやら赤い玉諸君は協力しながら、『神人』の胴体部分を真つ二つにし、『神人』にあきらかに再起不能なダメージを負わせることが成功したようであつた。

再生能力でもありやいいのに、と何か知らないが思つた。

『神人』はうめき声を上げるわけでもなく、その体を崩壊させるがままでいた。赤い玉はなおその周囲を飛び回り、執拗に『神人』の腕やら足やらを切断し続けていた。

意外にちまちました戦い方である。実務性重視つて感じの。

『神人』があんなにスケールがでかいのだから、こっちもそれなりの大技かなんか出せねえのかな？

……あ、いや。普通に能力も使えない俺が言つたつてはじまる話じゃないけどさ。

ここからでは視界を遮る建物があるため、よく見えなかつたが。背の高さを半分以下に縮小され、おまけに行動不能になつた『神人』は、どうやら塵芥となり消えさせたらしかつた。さきほどまで青い光に照らされていた『神人』の周囲も、今は灰色の世界と同化していた。

ひとまずこれで、おしまいである。俺は本能的にそうだと確信した。

今まで『神人』を倒すために飛び回つていた赤い玉は、どうもそれぞればらばらに別れて帰つていつたらしい。

が、その中の一つは（なんとなく予想はしていたが）、こっちに向かつて飛んできて、俺たちの前で軟着陸した。

赤い玉の光が弱まり、次第にその中から人型が浮かび上がる。最後に、先程と変わらない笑みを貼り付けた古泉がいた。

「おや？まだいらつしやつたんですか？」

相も変わらず、微笑みながらそつまづ。便利だな、その顔貼り付けてりや表情変えなくていいから。

おまけに、イヤミ言ひ時余計に憎たらしく聞こえるからな。

「どこのようが、あしたちの勝手だろい？違うのかい？」立花さんが再びケンカ腰になる。なんでこいつにそんなに噛みつくんだろうか？

「ええ、まあその通りですが……」

古泉は変わらぬ笑みのまま言つた。

「しかし、あなたたちがここに来ても意味がないのはもうおわからでしょ？それを踏まえて、『機関』を代表して忠告させていただくなれば。あなたたちは、ここに来るべきではない、と言わざるを得ないということです」

古泉はすらすらとそんなことを言つた。俺が言ひのも難だが、間違つていないう気がする。

癪に障るけどな。もうもう全部ひつくるめ。

が、立花さんは不敵な笑みを浮かべて古泉を睨んでいた。そして、詰め寄るようにこいつ言つた。

「ふうん？じゃあ、どひしてあんたはここにいるんだい？」

「はい？」

古泉が、微笑みを貼り付けたままキヨトンとした声を上げた。

「何で『神人』を倒したあとまつすぐここに来たんだい？あんたの上にそしきと命令されでもしないとそんなことしないでしょ？そもそも、あたしらが『機関』について『意味もないのに勝手に空間に入つてくる』程度の重要性しか持つていらないなら、何も『超能力者』であるあんたが直接、それもわざわざ『この空間』で接触する必要はないんじやないのかい？」

「……どういう意味でしょ？」「

古泉の微笑が、わずかに曇つた。

「困るんじやないの？」

立花さんが、露骨ににやりとした。感じの悪いにやけだ。

「あたしらがここに居ちゃ困るから、あなたはわざわざこじに来てんじゃないのかい？」

古泉は、特に何も反応していなかつた。無視しているよつこも、また、立花さんの言葉を計りかねているようにも感じた。対して俺は、ぶっちゃけ立花さんが何を言つているかわからなかつたが、立花さんの側に立つ手前。訳知り顔で黙つていた。

「それは……」

古泉が何か言おうと口を開いたが、すぐにつぐんだ。

何か立花さんの言葉に思い当るフシでもあるのだろうか？煮え切らないような、不気味な物を見るような目で古泉が立花さんを見ていた。よく見直すと、その表情は微笑んでいなかつた。

まるで、何かを見透かされてしまつたと。恐怖しているよつにも感じた。

だが、俺はふと別の異変に気づいた。

「あつ」

思わずつぶやく。

ふと見上げた灰色の空に、いくつもの亀裂が走つていた。薄い氷が割れるみたいに、空に入った亀裂はどんどん大きくなり。

パリン、と割れた。空が、バラバラと崩れる。いや、周囲の建物も、遠景も、全部が。

だが、崩れるのに何の音も聞こえることは無かつた。無音の灰色はやはり無音で崩れていつた。

閉鎖空間は、『神人』の消滅と共に消滅する。

ほんの数秒と數えない内に、灰色の空間すべてが崩壊した。

古泉と、立花さんと、俺。

一人は安心したような、一人は不敵な笑みで、一人は間抜け面。

三人はそのまま、おかしいところなど一つもない信じて疑わずに回り続ける、いつもの世界へと、再び放り込まれた。

「……」一つ、血口反省じゃないが言つておきたいことがある。

「この時の俺はまだ本当に何も知らなかつた。

この世界の行く末とか、『機関』の奴らの事とか、宇宙人の存在とか、世界をぶち壊してしまうかもしないとんでもない破天荒少女の実態とか、鶴屋さんの事とか。

だから、この頃の俺は本氣でこう思つてたんだ。

また明日も、『ごく普通の生活が送れる、と。

こんな出来事に遭遇しておいて何言つてんだと思われるかもしないが、俺にとつてはそんなもんだった。

なにせ俺には『超人』に囲まれる生活が普通だつたからな、このぐらいのことは、連休中に小旅行にでかけたよつな、ちょっと日常から離れただけだと思つていたのだ。

だが、次第に俺は気づかされていくことになるのだった。

俺の日常のなんてもん、スクラップにして裁断して粉々に碎いて献身しても、次の瞬間とんでもないことになつてるかもしけん世界に俺はいるのだといふことを。

ああ、笑えねえ。

## ～桜色・第二章（1）～（前書き）

よつやく第三章。ここからよつやく物語が動き始めます。  
今までの展開があまりによつくりだったの反省してます。  
投稿直後に誤字修正しています、すいません。  
……

## （桜色・第二章（1））

C · e 第二章

GWが明けると、けだるそうな顔が教室に並ぶいつもの日々が戻ってきた。

四月はもうとっくに暮れ、桜はとっくに葉桜だ。

淡い桜色は、見る影も無くなっていた。

季節はこれから梅雨へと突入する前段階といつたといふ。春が少しづつ遠のいていく時期であった。

そう、そんな頃だ。俺が世纪に残る大失敗をしたのは。

俺の日常という歯車は、その頃……いや、その時にもうすでに狂いまくっていた。

その事実を俺に知らせたのが、ただ意外な人だったと言つだけで。

「元気ないねえ、しづくん」

GW明け一日目、だんだん暖かいを通り過ぎて来た日光を浴びながら、机に突つ伏す俺に、鶴屋さんがそんなことを言つた。

「……そーつすか……？」

突つ伏したまま、顔を声のした方に向ける。我ながら確かに元気なさそうな仕草であると感じたが。まあそれは置いておいて。

ふと見渡せば、教室中がけだるい気分に包まれている。休み明けで、皆休日気分のままなのであろう。その中には当然、俺と似たような状態の奴もいるわけであつて。俺の元気のなさが特に異常であるとは思えなかつた。

ところが、そのことを鶴屋さんに伝えたところ。

「いんや、しづくんの元気のなさは異常つさ」と、ちょっと心配そうな表情で返された。

心配してくれるのにはありがたいし、嬉しくもあるのだが。

俺は自分が疲れている理由を思い起こし、そしてすぐに打ち消した。

言えん、こんなこと言える訳あるか。

確かに疲れているのは真実なのである。

事実、この三日間ほとんど寝ていないと云うのがその原因だが。肝心なのはその『寝なかつた』理由であった。

三日間、毎日夜中に立花さんが俺を叩き起こし。吉野が運転する、プロのドライバー＆スタンスマン顔負けにアクロバティックな拳動をする車にのせられ、それだけで既に一日は寝込んでもいいグロッキー状態なのに、更に立花さんを閉鎖空間へと案内しなければならないのであった。

そして閉鎖空間で一連の動きを見、帰りは再びアクロバティック。前後不覚という状態で済めばまだマシである。

しかも驚くべきことに、起こそれてから帰つてくるまでの全行程は一時間以内で終了するのであった。

あらゆる意味でめまぐるしいのである。これで疲れないほうが異常だ。

唯一の救いは、閉鎖空間い出入りした三日間。いずれも古泉、もとい『機関』の人間と接触することがなかつたことぐらいだろうか。あの状態は他人だろうが、知り合ひだろうが見られたくない。特にあのニヤケ野郎には。

だが、誰かに会おうが余つまみに、俺の睡眠時間と狂わされてしまった体内時計と一生分に相当する車酔いによるダメージはどうにもならない訳で。

結果、現在くたばつているという訳である。

寝不足にも程があるのだが、疲労感の割に昼間は眠くならないので困っている。幸いとすべきか、不幸とすべきか。

「んあれ？あ、またあの娘だ」

不意に、鶴屋さんが声を上げた。廊下のまづを見やつて、「

「どうしたんですか？」

「あいや、少し前にも見た娘だな、と想つたら」

少し前に見た娘？誰ですか、それ。

すると、鶴屋さんは少し困ったような表情をして。

「ほら、ちよつと前からウワサになつてゐるぢやん。一年のすんげーべつぴんな娘がさつ。なんだがすんごく変わつた娘りしくて、学校中の部活に入部して退部してたり、休み時間中学校うわづいてるつて話……」

そこですぐに見当がついた。あいつだ。

「涼宮ハルヒ、ですか」

「そうそれわつ」

鶴屋さんがうれしかつてあいづちを打つ。

それと同時に、

「へえ、閑歩。お前の口からその奴が出るとはなあと、どこからか声が飛んできた。

声のした方向を見てやると、我がクラスの愛すべき学級委員長。中田が近づいてきていた。

授業の合間たる今は空席となつてゐる俺の前の席へ腰かけると、続けて話し始めた。

「お前は噂話とかまったく興味持たねえだらうからまさか知つてるとは思わなかつたぜ」

そんなことをのたまりやがつた。まあ、石井はしないのだが。

「あんな、俺だつて良い年頃の男子高校生だぜ？流石に噂話のいくつかは耳にとめておくつつの」

へえ、そういうかい。と中田は意外そうな顔をしつゝ、「やつと学生らしくなつたのか、お前」とぬかした。このやつ。石井はしないけど。

一応中田の名譽の為に言つておく（俺の名譽か？）が、さつきの俺の発言はウソである。涼宮ハルヒと言つたがは、噂で知つたのでは

ない。ていうか、そんな噂が流れているということはなんとなく知っていたが、それがそいつの事だとは知らなかつた。噂もたまには聞いておくもんだな。

ではなぜ『涼宮ハルヒ』と言つ奴を知つていたのかといつと。：察しのいい方ならわかるだろつ。

そう、四枚の『リスト』の内、最後の一枚通称・『世界を終わらせてしまつかもしない少女』それが、涼宮ハルヒのものだつた。

四枚の『リスト』は、どれも信じがたいことがさらつと書いてあるものだつた。

例えば、古泉のところには『超能力者』と書いてあり、鶴屋さんのところには『機関』の間接的スポンサーとかあんまり知りたくないことも書かれていた。

それだけならまだいいが、朝比奈さんのところには『未来人』とはつきり読み間違いが起こるはずもないくらいはつきり書かれていた。『リスト』の情報は特に断りが無い限り100%正確だ。しかしこの時は流石に信じられなくて立花さんに聞いてみたが、「間違いない」らしかつた。なんてこつた。俺も超能力者なんだけどさ。

だが、それ以上に信じられないことが書いてあるものが存在した。

『自らの願望を実現することが出来る、世界を終わらせてしまうかもしれない少女』

ぶつちやけると、俺は今までに『仕事』に関するこことをほとんど聞かされていない。それがどうしてなのかは知らない。だが、『この少女』に関することはやたらみつちりと教え込まれた。

中学時代にその少女がおこした数々の奇行。有形無形、恐らくはどんなことでも実現することができるという『神』のような能力。そして、その能力が発動することを抑えている、少女の論理的思考

と常識。その絶妙なバランスによつて保たれている安定。あの『閉鎖空間』は、あの少女のフラストレーションの具現化であるという事。そして、俺や古泉の『超能力』は少女から『えられた』といふこと。

必要以上にいろいろ聞かされたような気もする。

それらのほとんどが、とても信じられるような話ではなかつたのだが。

だがそれだけの話を聞いて知つていても、俺は涼宮ハルヒという人物を一回、それもちよつと見かけた程度でしか見ていなかつた。もつとも、顔は写真で覚えているのだが。

しかし、一応は理解していた。『涼宮ハルヒ』が俺の仕事のいや、全世界の命運を握つているという事を。

まあこの頃はまだ半信半疑だつたんだが。

「そういうやそいつ、学校中全部の部活に入部して退部したつて話だつけか。てことは、書道部にも来たんですか鶴屋さん？」  
中田が鶴屋さんに問い合わせる。ああ、そういうや鶴屋さんと朝比奈さんは書道部だつたつ。

「えつ？あ、いや、えーとね？」

なぜか、鶴屋さんは少し慌てて、つつかえながら答えた。その様子はどうもいつもと違つていた。

ようく見えたのは、俺の錯覚だつたのだろうか。

「その時はさつ、ちょうどあたしも家のこととかが忙しくつてしまつ。サボリ気味の時だつたからわからんなくつてねー。気が付いたら入部して退部した後だつたと思うつさ」

口調はいつもの調子であつたが、なんとなく答えに違和感を覚えた。

が、その時はどうもつつこむ氣力がなかつたため、「へえ」とあいづちを打つくらいの反応だつたが。

「あいたー、そいつは残念。俺そういう変な女けつこう好きなん

で、話聞こつと思つたんだけどなー」

中田が頭をかきながら言う。お前そんな好みだつたつけか。

「あははっ、キミそんな変わつた趣味だつたにょろ?」

鶴屋さんが笑つて言う。中田も笑つていた。が、否定しないといふことは、そういう趣味なのか。

いつも通り、クラスメイト同士談笑している図。

その中で鶴屋さんはひときわ明るく笑つている。

屈託なく、快活な笑顔は、見る人全てを幸せにしてしまいそうな不思議な笑顔だった。

この後、その笑顔の裏。

他の奴らはほとんど見ることはないであろう、鶴屋さんの『違う笑顔』を見ることになるといつのこと。

俺はまだ気づいていなかつた。いや、気づけるわけがなかつた。

そのあとでの休み時間だった気がする。

昼休みだつたかな、空腹と眠気に同時襲撃され、どちらを優先しようか少し迷つた後、昼飯を食つた後の方が快適に眠れるだらうとひとまず弁当に手を伸ばした時だつた。

「おややつ、ホントに元氣無さ過ぎだよじずくんつ。動きがナマケモノみたいだよつ? 大丈夫?」

後ろから鶴屋さんの声が降つてきた。

「あは、大丈夫ですよ。休み明けで、ちよつと気合いが入らないだけですから……」

実態は、8割睡眠不足からきでいるのだが。こう答えたほうが無難だらう。変に詮索されないよう気をつけねばならない。と、思つていた矢先だつた。

小声で、囁くように鶴屋さんは言った。

「ふーん……しずくん、田の下にクマ出来てるよ~  
「えつ! ?」

あらうことが、俺は多少動搖し、取り乱した。目の中をあわてて触るが、触つてわかるもんじゃない。

しまつた、これじや睡眠不足なのにそれを隠してゐるつてのがバレじゃないか！なのに平静を装つてゐるなんて俺なんて恥ずかし……。

そこまで思つた所で、俺は目の前に映る光景にア然とした。

目の前にあつたのは、俺自身の顔だつた。見ると、いつもより元気はなさそつだが、それ以外は特に何もない。少なくとも『目の下』には何もない顔がそこにあつた。

鶴屋さんが、俺の目の前に手鏡を差し出していた。

あまりに突然のことで、俺の思考は完全にストップしていた。

「冗談つさ」

違つた。俺の耳は一瞬、この言葉が誰のものかわからなかつた。少なくともいつも鶴屋さんの声ではなかつた。囁く声よつな声であるはずなのに、耳にまつすぐ言葉が突き刺さるようだつた。

でも、その声は誓つて鶴屋さんのものであると確信できた。

俺の目の前から俺の顔がなくなつた。鶴屋さんが手鏡をひつこめたのだ。

「寝不足は感心しないなあ」

俺は、鶴屋さんを恐る恐る見上げた。

するとそこには、今までに見たことのないような、うつすらと口は微笑んでいるが、目はちつとも笑つていない。不気味な笑みを浮かべた鶴屋さんがそこにいた。

「帰つたら、ちゃんと寝るよ？」

が、それも一瞬だつた。もうこの時には鶴屋さんはもういつも笑顔になり、口調も戻つていた。

そして俺の頭をポンポンと叩きながら去つていつた。

俺はその後ろ姿を、人生の中でワースト3位に入るくらいの悪寒を感じながら、ただ、見送つていた。

もつ、序曲は終わっていたのだ。

C・e 第二章（2）

GW明け、それを待っていたかのように事態が動き始めた。それが目の前の現実となつて現れたのは、GW明け当初のつらさを乗り切つて。ようやく一晩中ぐっすり眠れる夜がいくらか続いた後であった。

「S・O・S……団？」

俺は目の前に置かれた藁半紙のチラシから、その団体名をとりあえず読み上げた。

そして、俺の机にそのチラシを置いた張本人、中田が「そう」とあいづちを打つた。

俺はもう一度チラシに向き直り、団体名と併記されている「世の不思議」を求めているという意を述べている文を見。その意味不明すぎる文にいささか困惑しつつ、このチラシの存在そのものが不思議だらうという結論に至つて俺の思考は中断した。

「なんじやこりや

「そうなんだよ。なんじやこりや、なんだ」

俺の率直な感想に、中田はカラカラ笑いながら反応した。

「ただ、こつからわかるのは、入学から一ヶ月余りで、校内最高の知名度を得た変人美少女が、どうにかこうにか変な団体を立ち上げたらしいということだ」

直接名前を言わずに、個人を特定できるよう話すところに、なんとなくコイツのいやらしさを見たような気がしたが、そんなことは置いておいて。

「涼宮ハルヒ、か」

その名をつぶやいた。

通称、「世界を終わらせてしまうかもしない少女」の名を。正直俺は困惑していた。今まで『リスト』にある四人の中で、一番動きがなかつた（部活に入つたり辞めたりはしてたようだが）にも関わらず最重要人物だったあいつが動き出した、ということに。もちろんそれが具体的にどういった変化を及ぼすものなのかはわからなかつたが、嫌な予感のすることだけは確かだつた。

どうも、薄気味悪い。

そう考えていた矢先のこと。

「やあやあ！しづくんに中田っちーおはようさんっ！」

いつもの跳ねるように快活な声。鶴屋さんだつた。朝一番フルスロットルである。

適当にあいさつを返す俺たちの横に、鶴屋さんはやつてきた。が、俺はその姿になんだか違和感を感じた。それはこの前鶴屋さんに手鏡を突き付けられた時の不気味なものとはちがつたが、何か足りないような、そんな印象を受けた。

そこでふと気がついたのは、いつも鶴屋さんの後ろでひかえめにあいさつしてくれるあの人の姿が見当たらぬ。

「あれ、鶴屋さん。朝比奈さんは？」

後から考えると、これが地雷だつたらしい。

その場の空気が、一瞬で張り詰めた。

え？ 何だ。俺なんかまずいこと言つたか？

本日最高度の困惑に陥る俺に、中田があきれながら助け舟を出した。

「ああ…鶴屋さん。こいつ、いつも即下校で放課後ちつとも学校にいねえから、わかんないんですよ…バニーガール事件を」

「バニーガール事件？」

聞き慣れ無さ過ぎる言葉に、思わず聞き返す。その際、反射的に声のトーンが上がつていていたせいで、周りのクラスメイト数人の視線を集めてしまつた。中田がしーつ、と口に指をてる。

「お前ほんとに知らんのか？このビラが配られた方法を？」

中田はヒラヒラと、先程まで机の上にのせていたチラシを、俺の目の前に持ってきて言った。

「知らん、配り方くらいどうにでもなるだろ？」「

「ならなかつたんだよ、あの変人美女にかかると、な」

一息入れ、周囲に少し視線を配つた上で。中田は話し始めた。

「事の発端はな……。昨日の放課後、それも割とすぐ。正門に突如二人のバーニガールが現れた」

「はあ？」

「まあ最後まで聞け、……いいか？その正門に現れた二人のバーニガール。一方はその変人美女だったんだが、もう一人は誰だか、わかるか？」

「んなもんわかるわけねー……ってあ、まさか。

「そのままかだ、あの朝比奈さんが、超セクスイー・バーニガール姿で正門のとこに立つてた。

……何がどうしてそうなつた。

「知らん、だがこれはマジだぞ。バーニガールのツートップが、正門を通りかかる人に無差別ビラ配りテロを敢行したんだよ。お前あれは世界の終わりかと思つたね。やつぱりあれだな、バーニーってのは古風なエロさが漂つていけねーな！もうあれだ、あのバーニー二人には恐らくこの世の男の九割は目線釘づけ間違い無しだつた！本当にぞ？写メとつたから見るか？」

そう言うなり、中田はケータイを取り出して、頼んでもいないのに写メを見せてくれたらしかった。

いや、なんつうか。そんな奴だつたつけ、お前。

「バツカおめー、エロは世界を救うんだぜ？」

知らん。

ケータイをいじくつていた中田は、ずいっと俺の前のケータイ画面を押し付けてきた。

見ると……なるほど、確かにそこには、背景が正門なのがもつた

いないくらいの。素晴らしい光景が写し出されていた。

なんていうか、ありがとうバーー。

中田が器用にケータイを操作し、俺に見せながら画像を切り替えしていく。…顔アップ、ヒップ、バスト、上半身、なぜかうなじのアップ。朝比奈さんのばつかだつたが、しつかりもう一人も撮つてあつた。

「……」

涼宮ハルヒ、か。こうして見ると、なるほどこりやどえらい美人だ。じっくり顔を拝んだりなんてことはなかつたが分、新鮮な発見だな。そんでもつてなるほど確かにスタイルがいい。で、中田君よ、なんでまたうなじのアップがあるのかね？

中田がさらに画像を切り替えると、今度はバーーガールに駆け寄る教師陣の写真だつた。俺にいつも絡んでくる生徒指導の奴もいた。「だが、天国は10分と続かなかつた…教師どもがあたふたしながら、バーーを連行していつたとさ……まあ、泣きじやくる朝比奈さんをバツチリ撮れるアングルに移動してくれたのは感謝だぜ」

今度は連行されながら泣きじやくる朝比奈さんの写真が写し出された。なんていうか、あれ、扇情的です。

ところが、そう思いながら画面を見る俺の目の前から、ケータイが忽然と姿を消した。

「はーい、それまでーーこのけしからん写真群はたつた今このあたしが預かつたあ！」

今まで沈黙を守つていた鶴屋さんが、突如実力行使に出た。中田からケータイを取り上げ、何か操作している。

「えー！ちょっとおー！写真くらいいいじゃないですか鶴屋さん！みんなそれくらい撮つてますよお！」

「はーいはーい、それをあたしの前で公開したのが運の尽きたねつ。ほいつ、消去つ」

「んなああああー！そりやないですよ鶴屋大明神さまああああー！」

中田の絶叫も届かず、画像は無事に葬られたようである。ひょりと残念。

「うわーっ！本当に全部消えてるーっ！？んな無慈悲なーっ！」

中田が取り上げられたケータイを取り返した時には、もうすべて終わつた後であつた。どんまい。

どうやら画像を失つたのが相当ショックであつたらしい、中田は「そんなん…」とかぶつぶつ呟きながら、自分の席に戻つていつた。まあ正直、自業自得だけどな。ふらつきながら遠のく背中にんなこととも言えなかつたが。

そこへ、鶴屋さんがにゅっと寄つてきた。

「あれえ？しづくんも残念そうな顔だねっ？……ひょっとしてしずくん、かわいい顔してスケベさんかなっ？」

いやそんなことは… と言い返そうとして、己の口元を触ると、何かにやけでいた。体は正直つてやつか。

「それにしても、あの朝比奈さんが…あんな格好するなんて…」

あはは、とか適当に笑いをつくろつて俺が言ひ。

「無理やりせせらされたのわっ！でないとみくるはあんなことしないよっ！」

多少憤慨氣味に鶴屋さんは言つた。

でしそうね。今日朝比奈さんが休んでこるのは、そのトライウマ決定の記憶から逃れるため、つてかそりや学校来れねえわな。あんなこと無理やりやらされたら。

それにしても、朝比奈さんと『あいつ』。一体なにがどうしてつながつたのだろう。

一人とも、『リスト』によつて無駄に知つていることが多い分、あまりに共通点のない一人がどうしてダブルバニーになるような事態に？

これも、『あいつ』の力なのか？  
ふとそんなことを考える。確証はないが。

そう思考に浸ろうとしていると、がらがら、と教室の引き戸が開く

音がして。少し薄毛が気になるらしき、化学の教師が入ってきた。  
てっぺんが禿げるタイプの薄毛持ちだ、バーコードにはしていない、  
中途半端に残すくらいなら全部剃ればいいのに。おやつさんみたい  
に。

「……うー、そういうや一時限田は化学だつたけか。

苦手なんだよなー化学。モルとか、クロマトグラフィーとか?さ  
っぱりだぜ……とか俺が割とどうでもいいことを考えながら、化学  
の教科書を机の中から引っ張りだした時だつた。

「……あれ?」

机の上に、中田が残していくたばずのチラシ…SOSU団の所信表  
明うんたらかんたらのビラが、なくなつていた。

おかしい、放心状態の中田がそのまま放つておいたはずなのに。  
風にでも飛ばされたのかと思ってあたりを見まわしたが、チラシ  
の影すらなかつた。

「……きりーつ」

中田の元気が無い声で号令がかけられたため、いつたん探すのを  
やめたが。その後も見つかることはなかつた。

「れー……」

いや、その日の夜までは。

「ひやくせきー……」

びこを探したつて見つかる訳なかつたのだが。

まず、その日の放課後はおかしいと思つた。

授業が終わる頃には、消えたチラシの事など氣にもとめていなか  
つた俺は。その日まったくの唐突に、鶴屋さんから「一緒に帰らな  
いかいっ?」とのうれしいお誘いを受けたのだつた。

何でも、本日は書道部が休みで、おまけに朝比奈さんがいないの  
で一緒に帰る人がいないのだといつ。

朝比奈さんは悪いが、何という幸運。

うん、幸運だつた。

その後、鶴屋さんと他愛もない話で盛り上がり、通りかかったお店にたまたま置いてあつたいかにも売れ無さそうな商品についてぐだらん議論に花を咲かせたり、夕日をバックに大笑いする鶴屋さんに見とれてたり……。

非常に健全で楽しい、高校生の放課後を楽しんでいた。

ついつい楽しくて、鶴屋さんの家（これがとんでもないでかさの屋敷なんだが）の近くへ来ても話しこんてしまい、気がつくと日が暮れてしまっていた。

その後、流石に残念そうにしながらもお互い別れたのだが。すさまじく幸せな気分で俺が帰宅したのは言うまでもない。

そうだな、強いて言うなら。幸せすぎたのかも知れない。

家にたどり着き、今日の夕飯は何にしようかと考えを巡らせていた頃。

いつもの要領で開いた郵便受け。

たつた一通だけ入っていた、見覚えのある『それ』に、俺の幸福感はどうかに吹っ飛んだ。

桜色の見慣れた封筒が、ただ一通。

もう桜なんて、どこにも見えない季節なのに。

ただ、あつた。

「行つてきますつ！」

五分前に入つたばかりの家を飛び出す。

日中の春の陽気、それを忘れ去つたかのよつた暗い道が続く。  
ぽつぽつとしかない街頭、無機質な明りで照らすそれを辿るつ  
に走る。

行く道は、通い慣れた道。  
北高への道、だ。

日はすっかり暮れていたのだ。

家に帰つてきて、日にした封筒。そこには一言だけ、そつけなく  
文字が書いてあつた。

『見たらすぐ開けるように』

その筆跡が立花さんのものであると確認するまでもなく、俺は封  
筒を破るように開いた。

中には白い紙。パーティの招待状とかに使いそうな、ポストカー  
トのサイズ。

裏表真っ白なその真ん中に、何かの文字列が書かれていた。

『何か』と言つたのは、おおよそ一般の人間には読めない言語で  
書かれているから。

その分野の学者でもないと、さらりと読めたりはしない文字列だ。  
俺には読めるからいいのだが。

その意味を解した瞬間、俺は家へと駆け込み、おやつさんに出か  
けるといつ面と、遅くなるかも知れないから夕飯は適当に頬んだと  
伝言。荷物を放り出し、明にただいまといい、冷蔵庫にちやんと食

材があるか確認し、冷たい麦茶を一杯、腹に流し込んで、そして家から飛び出した。

文字列を意訳するところだった。

『北高正門前、すぐ来ること』

いつものんびり歩くと長い通学路も、走るとなかなか短い。自転車で行けって？もってたらそうするさ。しかし長距離は嫌いな方じゃないが、なるほどじこつしてみると意外と気分がいいかもしない。

もつとも、北高へ至る最終難関。長大な坂道を登り終えるころにはそんな気分は消えうせていたが。

体力が切れて苦しかったからというのもあるが、

坂道の頂上、正門前にいる人影を発見したからでもあった。

「走つて来るとは、感心感心」

正門前、門横の壁に寄り掛かる立花さんが笑いかけてきた。

「『すぐ』と書いてあつたんで」

俺は多少の息切れと脚にたまつた乳酸を引きずりながら、立花さんの前で歩みを止めた。

「さて、仕事だよ」

休む間など立花さんがくれるはずもなく、矢継ぎ早にしゃべり始めた。

「もう知つてつと思うけど、涼宮ハルヒがSOS団つていう、なんだかよくわからぬ団体を立ち上げた。もちろん学校側公認じゃないけど、その存在は校内でも知らない人はなし。当然、しづくんも知つてるよねえ？」

俺はうなずく、肯定だ。

とはいって、中田がチラシを持ち出してこなきや知らなかつたかもだが。

「よろしこつ。では、そのSOS団が文芸部室を本拠としている

のは知つてるかい？

首を横に振る、否定。

そんなことしつたこっちゃねえ。

「いかんねえ…、そこの意識の無さはまだまだねえ。まあ、今はいいや。いいかい？今は、そのSOS団が何をどういう活動をしているのか、しようとしてるのか、どんなくだらないことでもいいから、少しでも情報を手に入れることが先決なのさ」「俺の反応をうかがいながら、立花さんは続けた。

「今回は、文芸部室を調べるよ」

そう言つて立花さんは自分のジーンズのポケットをまさぐつた。何かを取り出し、俺に差し出す。俺が手のひらを出して受け取る意志を示すと、チャリン、とそれが手のひらに落ちた。

それは、何かの鍵だった。

その辺の市民プールのロッカーキーミたいにオレンジのタグがついたその鍵。何の鍵かは大体想像がついたが、そのタグに記された文字を読む。

『文芸部室 予備』、だとさ。

毎度思うんだが、あんたはどつから取つてくれんだ、こりこりの。

「そいつで文芸部室に入つて、部室になにがあるのか、本来あるはずのないもの、おかしいもの、あつて不思議でないが、なんか不自然なもの、……なんでもいいから、調査すること。メモもつとつて、後でちゃんと報告出来るようにしてくんだよ」

そういうなり、立花さんは俺に手の平サイズのメモ帳を押し付けた。ご丁寧にペンもつけて。

「ほいじゃ、がんばってね」

ぐるりと回り、背を向けた状態でひらひら手を振りながら、立花さんは立ち去る。する。

て、ちょっと待つた。あんたは帰るのかい。

「て、立花さんは調査しないんですか！？」

「あたしゃあね、忙しいのさ」

顔だけじつちに振り向いて、立花さんはさうと言つた。

「そうじやないとしづくん呼んだ意味ないじゃん。あたしで出来たら一人でやるよ。」

そりゃー…、ううでしょ「うナビ。

反論したいのだが、なんか反論できない俺を置いてけぼりに。立花さんはゆっくりと闇に消えていった。

その後ろ姿が見えなくなる直前、「つまくやんなよ…」と聞こえた気がしたが、俺は応えなかつた。

鍵さえあるなら、夜の学校に侵入して、部屋を調べるなど造作もない。

と、今どき鍵のかかつてない正門をゆっくり開けながら思つた。不用心だな、この高校。さすが平和な国。『つまくやる』もどうもいゝもないだろ、と。そう思つてたんだ。

「およ?あーしづくんだつーやつほーー」  
その声を聞くまでは。

結論から言つと、俺の余裕は五分と続かなかつた。

昇降口の扉をゆっくりと開け、今までに学校へ踏み込む、といふその時。

後ろから飛んできた明るい声、俺の鼓膜は、それを鶴屋さんだと断定するのに一秒とかからなかつた。

ドキッとして振り返ると、そこには夕方下校した時と同じよう制服に身を包んだ、いつもの鶴屋さんが立っていた。

なんでここに、と脊髄反射的に言おつとして飲み込む。落ち着け、まずは落ち着け俺。

「あつははは!しづくん何そんなにコソコソしてんのやつー?ドロボーミたいだよ。」

まあ、似たような後ろめたさはあるかもですが。

と、そんな事を考へてゐる間ではなかつた。この状況をいかに説明すればよいのやう。

「いやー、それにしてもしづくんもとは、奇遇だね！」

「え？」

「しづくんも忘れもの、取りに来たんでしょう？でなきやこんな時間にガツ「来ないつさねー」

「え、あ、はあ、まあ、そうです……ね……」

鶴屋さんに言われて、慌ててうなづく。思えばそれが一番まつとうな理由である。助かつた。

「じゃ、一緒に取りにいこつか。教室でしょ？」

言つなり、鶴屋さんはガラツと昇降口を開け、大胆に侵入した。校内には宿直の先生とかいるはずなので、あんまり見つかりたくない俺としてはあまり物音を立てたくなかつたのだが。そんなことを知る由もない鶴屋さんは、つゝ立つていて俺に手招きして言つた。

「はらはやくつ、別に悪いことしてないんだからさつ？」

そうして、半ば勢いに押されて俺は校舎へと侵入した。

とりあえずこの時俺は、まあ仕方がない。と思つた。

とにかくこの場は忘れ物を取りにいくフリをして。鶴屋さんと別れた後、改めて文芸部室に行こう、と考えた。

まあ、俺にこれ以上の判断を要するのは、無理だつたろひ、気が動転してたし。

だが、最悪の判断だつた。俺は大甘だつたのだ。

それに気づくのをえ、五分とかからなかつた訳だが。

昇降口を過ぎて、廊下に出ても人影はなく。ただ静かな夜の校舎。蛍光灯がついてない事以外は、なんら変わらないいつもの学校だ。足元がすこし見づらいくらいの廊下を、並んで歩く俺と鶴屋さん。廊下には無駄に非常灯がついている（電気消してもついてる薄いみどりのアレだ）ので、お互の表情までは見えないものの、どこにいるかくらいはわかる明るさだつた。

少し歩くのをためらいそうな暗さだが、鶴屋さんはズカズカ歩いていく。それにならんで、俺も。

そのズカズカ歩く姿が、なんとなく立花さんに似てるなとか思つたが、言わなかつた。まあ、言つてもわからないだろ(ひ)。

「夜の学校つてのもなかなか雰囲氣があるね(ひ)」

ふと鶴屋さんがそんなことを言つた。

「ええ、まあ、そうですね。もちつと迫力があつてもいいですけど、なんか出そうな感じとか」

もつところ、お化け屋敷並みに不気味かと想像していた俺が、正直にそう言つた。鶴屋さんはクスクスと笑つた。

「もつつ、しづくんはロマンチックの欠片もないっさねえ」

何か場違いな事言つたのだろうか、俺。

そうこうしてゐうちに、階段の踊り場まで來た。

並んで歩くそのままで、階段をいつもより少し慎重に上る。

「よつ、と。しづくん、大丈夫？ 足元見えてる？」

踊り場のどこに十度非常灯が付いているが、そうなると逆に階段の半ばは一番暗いということになる。俺を心配したのか、鶴屋さんが声をかけた。

「大丈夫ですよ、夜目はきく方なんで。鶴屋さんの方こそ大丈夫ですか？」

答えるながら、なんとなく何かがひつかかつた。

「あははは、あたしはいつも鍛えてつからねー。ちつとくらい足元見えなくとも、すつころんだりしないによろよー！」

うん、そうだ。足元が見えにくい。ん?なんだ、何かがおかしい。

「ずいぶん頼もしいこと言いますね、一体なにで鍛えてるんですか」

階段を上り終えた。踊り場の非常灯が、目的地へ続く廊下も照らしている。

「鶴屋家に代々伝わる、鶴屋流古武術つさ。伝統あるし、役に立つよ? しづくんもどうだいつ?」

階段を上れば、あとは廊下を直進するだけだ。田がだいぶ暗さに慣れて、鶴屋さんの表情がぼんやり見えるようになる。

「いやー…、遠慮しありますよ。あんま荒っぽいことはできないんで…」

そうだ、どうして田が暗さに慣れる？ 暗いから。そりやそりだ、じやどうして暗い？

「えー、しづくんひ弱そうだし。ちゃんと鍛えないとなめによろよ？自分の好きな女の子くらこは守れるようになつとかないとなつ電気がついてないからだる、そりやそりだ。ん？なにかおかしいところがあるか？」

「そんなこと言われても…、あ、大丈夫ですよ、僕は強い人を好きになつておきますから」

まあ、鶴屋さんみたいな人ならしつかり守るつもりですが。って、そりぢやない。何かがおかしい。

「まーたーまた。そうやつて逃げないつ

まあ、鶴屋さんみたいな人ならしつかり守るつもりですが。って、そりぢやしているうちに、目的地の教室までやってきた。非常灯のぼんやりした明りが、見慣れた教室の扉を照らしている。間違いないここだ。

鶴屋さんが扉に手を掛け、カラカラと開けた。

そこには、廊下より暗い感じの、いつもの教室が広がっていた。

「まあ、一つ言つとくと」

鶴屋さんが不意に言つた。さつきの会話と声のトーンは同じだ。「女の子は、みんな意外と強いけどね」

暗がりの中で、にこりと笑つてそんなこと言つ鶴屋さんの姿を俺の夜目はとらえた。

とらえたと思つたその時だった。

パチン、と。無機質な音がする。ビームで聞きなれた音。

「わ、」

途端に、さつきまで暗かつた世界に光が満ちた。

教室の蛍光灯がついたのだ。つまりさつきのはスイッチを入れる

音。

暗がりに田が慣れていたせいで、大量の光に思わず田をつむる。とても田を開けてられない。

まぶたの向こうに広がる光の世界を感じながら俺はよしやく気がついた。

頭の中ではんやりしていたひつかかりが、確かな疑問へと変貌する。

そうだ、どうして。

どうしてここに来るまでに、電気をつけなかつたんだ？  
ようやく疑問にたどり着いた俺をじり田に、鶴屋さんは教室の中へ進んで行つた。

「いやー、英語の教科書忘れるなんてついてないっさねー。あたし明日訳で当てられるつてのこさつ」

田を閉じた暗闇でその声を聞きながら、俺はまぶたの向こうに確かに危機を感じた。

なにかが、危険だ、と体に警告していた。

ようやくうすら田を開けることができた俺の田は、まず鶴屋さんをとらえた。

いつもの鶴屋さんだ。教室に立つ、いつもの鶴屋さん。  
その安堵と、ついたきの疑問符と、出所不明の警告。  
頭にうかんだそれらが、飛んできた声にはじき飛ばされた。

「ねえ、しづくん」

恐ろしく冷徹な声が飛んできた、感情を殺したような声。  
だが、それは確かに『鶴屋さん』の声だった。信じられないくらい、確かに。

手鏡の時以上の冷たい声が俺の鼓膜を揺さぶった。

「……しづくんの忘れものって、何？」

田を開いて確かに鶴屋さんの姿をとらえた俺は、その声の発信源

は鶴屋さんだと一重に把握し。

また、あの、不気味な笑みを浮かべる鶴屋さんを見た。

そして、見た。

その鶴屋さんがこじらへ差し出す手。その手に、オレンジ色のタグが見えた。

見てしまった。

笑えない事に、一人きりの教室で。

笑えない事に、一人きりの夜の校舎で。

笑えない事に、今さらさつきのやうとつでの『ロマンチック』の意味を把握して。

冷や汗が一筋。

俺の額を流れて落ちた。

## ～桜色・第三章（4）～（前書き）

どうでもいい話ですが、このお話をからとひとつ原稿をデジタル化！  
でもお話のぐだぐだ感はアナログ原稿時代と変わらないのであしか  
らず（）

## ～桜色・第三章（4）～

Coloring envelopes 桜色・第三章（4）

光に満ちた教室で、俺は鶴屋さんと一人つきり。

ああ、ちくしょう。なんてしあわせ空間だバカヤロー。

光量だけが多い蛍光灯の人工的な光は、ただ、無為に俺を照らし。不気味な笑みを浮かべる鶴屋さんを、はつきりと見せ付ける以外の役割を持たなかつた。

「えつ……？」

俺はあまりに突然のことでの頭が回らず、ただ無意味に声を漏らすのみだつた。

おいおい、これじゃ蛍光灯と同価値だな俺の存在意義。

「しづくんの、忘れ物、何？」

鶴屋さんは今度ははつきりと。一句一句区切つてはつきり言い直した。

その表情は、相も変わらず、恐ろしく不気味な笑みであった。にたりとしたような、鶴屋さんに似合わないその笑いは。不気味さで俺を金縛る程度にはインパクトがあつた。

それに加え、派出所不明ながらも、さつきから危険信号を伝える俺の勘がさらに警報をがなりたてているようだつた。「ここは危ない、逃げろ」と俺の勘は言つていた。確かにやばそうな雰囲気であることは確かだ……が。

「…………」

俺は混乱した頭を抱えて、思考がままならなかつた。当然、鶴屋さんの問答に答えられなくても何の不思議も無いとする。

だが鶴屋さんは、間髪入れずに俺の尋問タイムへ突入し、俺の思考を追い詰めた。

「それで、」

鶴屋さんは左手に持つ『それ』を、俺に見えるように掲げて言った。

「これは、何かなあ？」

「……」

鶴屋さんの左手には、鍵、があつた。見間違えようも無い、オレンジのタグがついた『それ』が。

ほとんど金縛り状態であつた俺の体は一気に硬直へとステージを進めた。

だが、右手をポケットに突つ込む程度の余裕だけはあつた。本来あの鍵があるべきポケットを確認する。

当然の『ごとく、ポケットには何も入つていなかつた。

今度は思考も一緒にフリーズする番だつた。

鶴屋さんが、盗つた？このポケットから？

混乱の上に疑問符が上書きされる。

いつ？いつだ。いつそんなことが可能な時が……。

電気をつけたときだ！

あの時反射的に目を閉じた俺は、確かにポケットなんて氣にしてられなかつた。

だが、そう結論付けたとしても、そんな推論はこの場では無力かつ無駄であった。

俺はこのとき、そんなことを考えるよりも、まずどうして鶴屋さんが鍵を持っていることを尋問するのか、その理由を考えるべきだつたのだ。

ほんと、何してんだろうな。俺は。

「なんだ、しづくんが、文芸部室の鍵をもつてるのかなあ？」  
核心を突かれ、俺の焦りは最高潮に達する。

「そつ

何か言おうとして口を開くが、混乱した頭で何も気の利いたこと  
が言えるはずも無い。

なんだなんだなんなんだ。

どうして俺は鶴屋さんに問い合わせられてるんだ？

馬鹿、そんなもん決まってるだろ。

何で？

鶴屋さんが、俺の『仕事』を知ったんじゃないのか？

それでどうした、それがどうしてこの状況になるんだ！？

んなもん知るか、くそつ、落ち着け俺！

「…しづくんは、あの娘が気になるのかなあ？」

身包みはがされるような気分で、俺は鶴屋さんの声を聞いていた。核心にさえ切り込んでさらに核心をつかれたような、そんな気分。この状況で、『あの娘』が誰を指すかなど、わかりきっている。

俺たち『集団』、と古泉ら『機関』。そのどちらもが追いかけている共通の存在。

涼宮ハルヒ。

やなもんだ、いつとしか考えられないのも。

普通男女が一人つきりでこんなとこにいて、「あの娘が気になるんじゃないの？」と言えば、たいていが痴話喧嘩の類だと思うがな。いや、こういふのは修羅場つて言うんだつたか？笑えんな。

俺も鶴屋さんと痴話喧嘩してえよ馬鹿。

「あつははは…：図星、によろ？」

一瞬、いつもの快活な大笑いをする鶴屋さんに戻ったが、すぐ元に戻った。不気味な笑いと、刺すような視線で俺を射抜く。

とりあえず、図星だらつと言われる程度には俺は間抜け面をしていたようだ。

まあ図星だしな、ショウガねえや。

俺はなんとか少しずつ平静を取り戻しつつあった、とにかく落ち着こうと努力したのは功を奏し、なんとか自分と周囲の状況を分析できるようになってきた。

いやもう正直なところは逃げ出したくてたまらなかつたんだが。が、その時を見計らつたように鶴屋さんは搔さぶりをかけてきた。

鶴屋さんはすっと、鍵を持つてゐるのとは逆の手をあげた。

そういうえばそつちにもなんか持つてゐる、と俺が気にしたその瞬間。

俺の視線は、鶴屋さんの手に釘付けになつた。

バカな、いくらなんでも、あれは盗られるわけがない。

鶴屋さんの手には、少なくともこの学校の人間には見せたことがなく、恐らくおやつさんあたりもまさかその隠し場所を知つてゐるはずのないもの。しかし、俺が常備している大切なもの、だつた。

「それと、こんな物騒なもの。持つちゃダメによろよ」

その手には、小型のナイフ。

俺の、大切なナイフだつた。

「えつ！？それはつ…！？」

少し離れた位置にいる鶴屋さんだが、その手に握るナイフが俺のモノであることは明白であつた。

全長は20センチくらい、折りたたみ式でたためば大きさは10センチ前後、スリムでシンプル。

俺が何かあつたときのために、ベルトの裏に仕込んでいたナイフだつた…。

なぜ、それを鶴屋さんが持つのか。俺にはさっぱりわからなかつた。

ただ、手をゆっくりベルトに這わせる。ナイフを仕込んでるはずのところに手が到達しても、なにもなかつた。

既に冷や汗で満員状態の俺の額にさらに冷や汗が追加される。なんだ、コレ、どういうことなんだ、誰かわかりやすく説明してくれ、五十字以内で簡潔にな、あ、句読点も含めよ。

掏られるはずのないところにあるナイフが盗まれてゐる、こんなところにそこにあるとわかつてなければ盗れる訳もない、鍵もどこ、事前にそこにあるとわかつてなければ盗れる訳もない、鍵も

然り、ナイフも然り。

ということは、鶴屋さんは知っていた？俺のナイフの仕込み場所さえ？そしてあの時 電気を突然つけ、俺の視覚を奪つたあの時 同時に抜き取つた？

そんな、バカな。

そんな芸当普通の人間ができるわけがない。

だが目の前にある現実はそんな俺の推論を全て打ち碎く程度の破壊力があった。

どうなつてんだ。

というか、それよりも重大な事実がそこににある。

鶴屋さんは『知つて』いたんだ、俺のナイフの隠し場所を。

そして『あの娘』。鶴屋さんは確実に俺の事について、いくらか知つて欲しくないことまで知つている。

それだ、それがおかしい。

鶴屋さんは、『機関』のスポンサーである鶴屋家の次期当主。そりや『機関』の情報が伝えられても何の不思議もない。しかし、鶴屋家と『機関』は実は相互不干渉の盟約を結んでいるのだ。鶴屋家は『機関』のやることに關して一切関知しない、だが、援助はする。そんな不思議な関係なのだ：が。

この世界中、どこを探したって俺のことを調べるのは『機関』くらいなものである。俺は立花さんみたいに世界を飛び回つてあちこちで恨み買つたりなんてしてないからな。気楽なもんさ。

つまり、鶴屋さんが俺の『仕事』云々について知つているということは、間違いくな『機関』の情報であると思われる。

だがそれは…相互不干渉の盟約に反することではないか？

『リスト』に鶴屋さんが記載されながらも、重要人物のランクとしては低い位置であつた。その理由はまさしくこの相互不干渉があつたから。関係者でありながら、関係者でない。そんな存在であるはずだった。

「しづくん、お互い様。によろよ

鶴屋さんが似合わない不気味な笑みで言った。

鶴屋さんが、こうやって俺を尋問すること。これも盟約違反のはずだ。『機関』のやうなことの関係者。それに必要以上に干渉している。

しかし、この俺の考えは少しズレていた。俺はこの時こんなことに頭を回すべきでなかつたのだ。

鶴屋さんが、盟約に反する、とわかつていながら、俺を詰問している。

その理由に頭を回すべきだつたんだ。

どうも俺と言つのは、その場その場の出来事について深く考へるが、その理由を追つるのは苦手らしく。

そして、鶴屋さんはゆつくりといつ宣言した。

「しづくんがあたしのことをするか知つてゐると同じように、あたしもしづくんのことをしてゐるのさつ」

それは、俺が鶴屋さんの情報を知る根源、『リスト』の存在を知つているのだと言つことをにおわせた発言だった。  
同時に、鶴屋さんが俺を知るため、『リスト』に似たものを利用している、と言つてゐる感じもした。

要は、お互ひの手の内はわかり切つてゐる。と言つことを言つたいらしこ。

こつちは思いつきり想定外なんだけどな。

そして認めたくない事実が一つ。

俺と鶴屋さんは、晴れてお互ひを探りあい奉制しあつ……敵味方の関係と認め合つたと言つわけだ。

思わず表情が歪む。

最悪だ。こんにゃく。

そう考へてる俺の顔を見て、鶴屋さんは何を思つたのだろう。なぜか少し悲しそうな表情をしていた。

不気味な笑みは影を潜め、見たこともない悲壮な表情…のよつこ俺には見えた。

だがその表情も一瞬後には変貌していた。

次に俺が見たのは、手に持つナイフを振り上げ、いつでも投げれるような体制をとった鶴屋さんだつた。

「えつ？」

俺は困惑した、いくらんでもまさか、鶴屋さんがそんなことするはずがない。

これは牽制か、ハツタリだ。もしくはパフォーマンス。

そう思つてた時期が俺にもありました。

スローモーションで見ているように、鶴屋さんが振りかぶつたのが見えた。右手、親指と人差し指で挟むようにしてナイフを持つるのがわかる。（つかみやすいでしょ、鶴屋さん。それ俺の特注なんすよ。）鶴屋さんの長くて綺麗な髪が、体の大きな動きに合わせて綺麗にウェーブした。（美しい、かの葛飾北斎が見た波間越しの富士山なんてのがあつたか、俺は鶴屋さんの髪越しがいいな。）鶴屋さんの目が、すさまじい視線の鋭さをもつて俺を見ているのが見えた、その表情に笑みはひとかけらもない。（ああ、やっぱり鶴屋さんは笑顔が似合つよな。）そしてそれほどどの間もなく、その手は振り切られ、手から放たれたナイフは、高速で回転しながら、俺に向かつてきていた。（え？ 投げた？）

ナイフは俺の顔をめがけて飛んできて、右耳をかするようにして通り過ぎていった。

後ろ、教室のドアが、カツ、という音が聞こえた。刺さつたんだろ？ 何が、だなんて考えたくない。

冷や汗なんてもう枯れた。

「…………これは、警告だよ。しづくん」

恐ろしいくらい普通の鶴屋さんの声だつた。消え入るような、鶴屋さんの声が響いた。

「これ以上君が関わつたつて、何も幸せにならないつさ……」

鶴屋さんは、うつむいていた。その表情がどうであるか、俺はつかがい知ることはできなかつた。

ただとも、悲しそうな声であつた。

俺はこの時なんと言えばよかつたのだらう。いや、このときの俺はもはや、まともに言語を話せたかどうかが疑問だつた。

次々に起る予測外の事態。浴びせられた質問。飛んできたナイフ。

あいた口が塞がらない？馬鹿言え、口すら開けん。

「……

何もしゃべれない俺を見てなんと困ったのだらうか。鶴屋さんは、顔を上げた。

そこには、いつもの明るい表情をした鶴屋さんが立つていた。一体俺はこの時間だけで、鶴屋さんの表情をいくつ見たんだ。だが、いつもと違うのは、あの底抜けに明るい声と帶同していいといふことか。無言だつた。

鶴屋さんは手ぶらで、教室の出入り口へ向かつた。まあそれはつまり、入り口で立ち去くす俺の側にくつてことなんだが。

鶴屋さんは、俺の横を通り過ぎる時。まったくいつもの調子でこう言つた。

「それじゃつ、また明日つ」

「……

俺は答える術など持ち合わせるはずもなかつた。

そして鶴屋さんはそれだけ言い終えると、何の未練もなさうつ、普通に教室から歩いて出て行つた。

その影が廊下の闇に消えた後も、俺はまだ動くことができなかつた。

蛍光灯はただ無為に、そんな俺を照らすためだけに、目いっぱいの光量を出していった。

なあ、誰か教えてくれ。

俺はあの時、なんて言えばよかつたんだ?

俺は、どうすればよかつたんだ?

背後のドアに刺さつたらしいナイフが、重力に負けてするりと抜けたらしい。

俺の後ろで、カラカラと金属の跳ねる音。

それでもまだ、俺は動けなかつた。

まるで頭の中まで蛍光灯で照らされているような、そんな気分だつた。

～桜色・第三章（4）～（後書き）

第三章はこれにて終わり。第四章から『は、いよこよ（よしきく）』『機関』と『集団』の駆け引きがあつたりなかつたりの予定です…たぶん（お

～桜色・第四章（1）～（前書き）

新章突入。ですがスロー・テンポな展開は相変わらずです。

Coloring envelopes ～桜色・第四章（1）～

暗闇の中、唐突に猛烈な音が鳴り響く。

その音源をコンマ一秒で特定し、布団の中から的確な攻撃を下す。音を鳴らすのを止めたそれをひっつかんまま、俺は動かなかつた。

疲れていたから、ではない。

心の中でぐるぐると、あまりにいろんな感情が渦巻いていた。

外では、まだ日の出の時刻でもない空が、暗く鬱屈した闇を作っていた。

薄暗い静寂の中。さつき沸かしたばかりのお湯でコーヒーを入れる。

どうも気分が優れないの、普段飲まないものに手を出した。ちなみに普段だと、朝は断然牛乳派だつたりする。たまにココアも飲む。「まあこよな、アレ、牛乳万歳だ。

「コーヒーはおやつさんが飲むのだが（立花さんは甘党なのであんまり飲まない。飲んだとしても砂糖を大量投下する）、特にこだわりがあるようではなく、普通に市販のインスタントだつた。

適当にマグカップを取り出し、インスタントの粉末を入れてお湯を注ぐ。

するとあつとこう間にコーヒーらしき液体が誕生する。考えてみると「こもんだ、スプーン一杯の粉をつっこんでお湯入れるだけ

で「コーヒーになるんだもんな、昔の人見たら腰抜かすぞ。」  
わりどどいでもいい事を考るようにながら、春も終わるかと言つ時期に、まだこたつ出してる我が家リビングへと向かう。  
そのままキッチンで立ち飲みしてもよかつたんだが。なんとなくゆっくり飲みたい氣がした。

「コーヒーの素とお湯しか入れてない液体のにおいを嗅ぐ、なるほど、これはなかなか頭の冴えそつた匂いだ。こうこうコーヒーはなんて言うんだろう、ストレートコーヒーか? そういやブリックとかエスプレッソとか言つよな、あれってどう違つんだろう。今度おやつさんに聞いとこ!」

別に寒くはないのだが、テーブルにカップを置く都合上。コタツに入らなければ不便なのでコタツに入る。もちろん電源は入つていので熱くも寒くもない。

「コーヒーをぐつと一口飲んだ。思つたより苦くない。

が、のどを通したところで、後味が少し苦かった。のどが辛くなる。

水を取りに行ひつかと思つたが、やめた。

もつと焼け付くように苦くなればいい、なんとなくやつ思つた。

全部飲んでみると、後味の苦さもこもんだと思えたむづになつてきいていた。

でも次飲むときは少し牛乳入れよつ、うん、牛乳万歳。

さて……。

そこで俺は動きを止めた。

瞬間、ああ、しまつた。と思つ。

でも遅かった。

すぐに浮かんでくるのは、あの時の光景。あの時の教室。あの時の自分。あの時の鶴屋さん。

田の前に軽い言葉では片付けられない何かが列挙される。考えて、後悔したところで所詮それはもうどうしようもないことだ。あの時

鶴屋さんとの問答を避けていたとしても、あれと似通つた事態には遅かれ早かれなつたのだろう。しょうがない。最初から敵味方の関係であることは明らかだつた。ただ相互認識が足りなかつただけ、確認しただけなんだ、あの時は。

必死にそう片付けようとした。しかし、俺の中で、ああ、やはり鶴屋さんは『機関』側の人間なんだな、と認識するのが少しつらかつた。

ほんのごくわずか、俺はついこないだまで、鶴屋さんは味方になつてくれるんじゃないとか淡い幻想を抱いていた時期があつた。鶴屋さんは決して『機関』と決定的関わりがあるわけではないと、そこに一縷の望みがあつた。

それは確かに馬鹿馬鹿しい妄想かもしけれなかつたが、決して絶望的な話でもなかつたはずだ。『あの娘』、涼宮ハルヒに直接鶴屋さんが関わるような事態が、もしくは機関と鶴屋さんが直接つながるようなことがなければ、最悪でも中立でいてくれる存在だったはずなのだ。

それが今は、俺が鶴屋さんを知っているように、鶴屋さんも俺を知つてゐる。そんな意味の鶴屋さんの発言は、俺を敵とみなしたと言うのと同義であつた。少なくとも俺を調べた『機関』から情報を受け取るようなことがあつたのだろう、俺の望みは、あつさりとその色を失つたのだ。

くつや。

舌打ちを交えて、俺の中にうずまく疑問が浮かび上がる。あの日あの時からずっと囚われている疑問へ。

俺は何でここにいるんだ。  
何のためにここにいるんだ。

わからなかつた。今までもわからなかつたよつた氣もするが、余計にわからなくなつた。

深い思考の淵に沈みながら、俺はうなだれたように空のカップを握り締めていた。

だから最初その声が聞こえてもつまづく反応できなかつた。

「……んにゃ……しずにい……」

眠そうな声だった。か細い、子供の声。

それが明のだと気づくのに、少しの思考を要した。

「明……？どうした、トイレか？」

薄暗い部屋の中、明が眠そうにうなずいたのが見えた気がした。見れば、隣の和室から、扉を少しだけ開けてこちらをのぞくようになに明が立っていた。

和室の向かいにあるキッチンから差す、無機質な白の灯りのみが明を照らしていた。きっと明からは、俺の姿が不気味に見えるのだろうか。いや、逆光でしかも暗いから、黒い影にしか見えてないかもしれない。

ある意味それが正解と言えるような気がしたが。

ひとまずお互に近づかなければ何も出来ない。俺は立ち上がりて、扉に体を支えながら立ちすくむ明の頭をなでた。まだ眠そうだ。まあそれは当然か。

とにかくトイレに連れて行こうと、眠そうな明を抱えて持ち上げた。まるで眠つてしまつたかのように力が入つていなかつたその体は、かなり容易に抱えられた。

抱えられながら、明は言つた。いや、寝言だったのかもしれない。

「…………しずにい、なにがあつたの……？」

「えつ？」

明の声で、ふつとそう聞こえた気がした。

だが、薄暗い部屋の中では、明が起きているかどうかさえ定かではなかつた。

「…………すじく、……かなしそうな……かおしてるよ……」

やはり寝言なのだろうか、どこかしらつかえつつかえの明の声

を聞きながら。今度は俺が立ちすくむ番だった。

「…………」

何も応えられなかつた。

明に言われるくらい、俺はひどい顔をしていたのだろうか。  
そんな動搖の中にある俺を差し置いて、明は肩を枕にすりすり寝ついていた。

明の前で、そんな姿を見せるよつじやあ、俺も終わりだ。  
だから、少しの間をあいて俺は応えた。

「何もないよ、大丈夫」

つとめて優しい声で言つた。表情は、気持ち微笑んだつもりで。  
明はすうすう眠つたままだつたが。

その時の俺は、笑えていたかね？

学校に行つても特に何か変わるわけでもなく、気分も沈んだままであつた。

ただ、一部の人間はどうも落ち込みオーラを発する俺を探知した  
らしかつたが。もともとクラスでの存在は空氣程度の俺は、誰に気  
にされるといふこともなかつた。

それまで毎朝あいさつをかわしていた鶴屋さんは、やはりあい  
さつもせず。お互い一言もしゃべらなかつた。

田すら合わせなかつた。

その様子を不審に思つたのか、中田が鶴屋さんのいない時を見計  
らつて、こつそり「……なあ、お前と鶴屋さん。ケンカでもした？」  
などと聞いてきた。半分正解で半分不正解とでも言つて、その観察  
力をほめてやりたかったが、あいにく俺はその程度の心情的余裕す  
ら持ち合わせていかつた。

「さあな」

短く、否定とも肯定とも取れる返事をして濁した。  
悪いな、中田。

お前にはとても言えない事なんだ。

幸いにも、学校の授業とは、周囲の人間と田をあわすことがなく  
ても受けれるようになつてゐる。

俺と鶴屋さんは、幸か不幸か、どちらも何もしゃべりずてその日  
を過じた。

もつとも鶴屋さんは、俺以外のご友人とは元気に話していたの  
が。

まあ、だから中田に心配されたのか。と俺は思った。  
それすらも、どうでもいいとも思つたが。

昼休みになつた。

手早く弁当をかきこんだ俺は、教室になぞ元から居場所もないの  
で、腹ごなしの散歩へ出かけた。

いつもは適当に、午前の授業で出された宿題でもするのだが。今  
日は座つていたくない気分だった。

校舎内を適当に散策し、中庭、校庭をちらりと回り、また校舎へ  
戻る。

すると、なつかしい一年生の教室が見えてくる。  
ぽんやりしながら眺める。もはや一年の時のことなんてすっかり

忘れた。：ある一個の出来事を除いて。

まあ、それはいいや。と、せつかく思い出したことを脳裏から振  
り落として、散歩を続けた。すると、進んだ先に、埃っぽい階段を  
見つけた。

おそらく屋上へ続く階段なのだろう。普段通られることがないた  
め、美術関係のあれこれが所狭しと置かれていた。物置状態だ。

「……へえ、こんな場所があんのか」

俺は素直に感心した。しかし掃除もされていなかつたようで、そ  
のあまりの埃っぽさには閉口した。

お世辞にも、腰を下ろすに適したところではなかつたが。校舎中  
を散歩して回つて、いいかげん少し休みたかった俺はここを休憩所

に選んだ。

埃かぶつた階段の、すこしあまりマシだと思われる部分に腰掛ける。それだけでも、若干の埃が舞つた。

「俺もこの置物といっしょだよ」

隣に並べられた、同じように埃をかぶつた美術品群を眺めてつぶやく。

「こいつらも、かつてはどんな目的でここに来たんだろうか。もう捨てられるのを待つだけなんかね、こいつらは。

「何のためにいんのかわからんね、だけど埃かぶつてもまだここにいる。よくわからんことに連れ回されて、好きな人に嫌われて、ていうか敵になつて。それでも俺がここにいる理由ってなんなんだよ何を言つている、ここに来なければ、鶴屋さんに会うこともなかつたし。この学校 자체と会うことがなかつた。この学校生活があるんだから、お前は己の存在理由なんて問い合わせ返す必要もないじゃないか。お前の居場所は希薄だがクラスにあるし、何を卑下する必要があるのか？この学校で出会つたものすべてに感謝すべきだろ？ほこりかぶつたなんかの肖像画がそう言つた気がした。

そんな気がしたが、やはり言つたのは俺だった。

「そりやあそだよ、でも裏を返せば。俺はここに本来いなはずの人間なんだ」

今度は肖像画も何も言わなかつた。

「ここにいなれば得られなかつた何かなんてどうでもいい。俺は、どうして、『ここ』にいなればいけないんだ？」

考えてみればみるほどそんな気がしてくる。

ここ最近起こつた出来事と『仕事』のあれこれ。

俺が必要だつたか？

問い合わせて、突き詰めていくと、それらは一つの結論に辿り着く。ぶつちやけ、俺がいなくともどうにかなつただろ？

百歩譲つて、俺が必要だつたのは『閉鎖空間』の一件くらいなものだらう。

なら俺はどうしてここにいるんだ。

どうしてここへ、送り込まれたんだ。

俺でなければいけない理由はなんなんだよ。

階段に腰掛け、俺はうなだれていた。

頭を抱える。頭をぐしゃぐしゃにしてみる。

何も変わらなかつた。もともとサラサラした髪質の髪は、どんなにぐちゃぐちゃにしたって、元通りだ。

なんとなく、そのまま俺を表しているような気がする。

どうあがこうが、何も変わらない。

いや、悪い方向にのみ変化している気しかしない。

なんとなく、そこで立花さんの顔が浮かんだ。

「しづくん、事が悪い方向に進むって事はだねえ。少なくとも良い方向に進む余地があるってことなんだよ」

頭の中で、おばさんくさい声が響いた。そういうやそなこと言われた様な気がする。

良い方向に進む余地がある?

俺のこの状態にも、何か希望があるってか?

ていうかあの人は、いろんな言葉に深みとか意味とか込めすぎなんだよ。あの人の言つことはなんだか小難しいことばつかな気がする。もつとさ、簡単に教えてくれよ。アフォリズム、警句みたいな感じで。

そう思つていたとき、不意に俺の右ポケットで何かが振動した。

「うおっ?」

驚いて、声を上げる。

あわてて振動するそれをポケットから取り出す。ポケットの中にあつて振動するものと言つたら答えは限られる。てかむしろ、携帯以外にあるのだろうか。

開いて液晶を見る。

画面に表示されていたのは見知らぬ番号だった。

だが、俺は通話ボタンを即押しした。

確かに見知らぬ番号だったが、どこかで見たことがあるような感じがしたからだ。

そしてそれは、本来ここに電話をかけて来るはずのない番号だった。

耳に携帯を押し当てながら、俺は自分の予感が当たっていることを確信した。

第一声。今すぐ殴りに行きたくなるようなニヤケ面が、脳裏につかり浮かんだ。

「おや、出てくれましたか」

向こうから聞こえてくる、妙にすました声。きっと顔は相変わらずの貼り付けたような笑顔だろうよ。

「何の用だ、古泉」

俺は不機嫌にそう言った。ようやく一人になれる時間すら、テメーが奪おうってのか。

くつくつと、不快に笑うそいつの声を聞きながら、俺は埃かぶつた美術品群を眺めた。

俺はまだ、埃かぶることさえ許されないようだぜ。

さつきしゃべったような気がした肖像画が、それでいいじゃないか、と言った気がした。

余計なお世話だ馬鹿。

だが、虚空に浮かぶたつ一本のロープ。自らを繋ぎ止める一本の可能性。

そんな思いで携帯を握っていたのも事実だった。

俺は美術品群の元から離れ、歩き始めた。  
じつとしていられなかつた。頭を動かすために、まず足を動かす。  
ひょっとすると俺はこのとき。  
少し微笑んでらいたのかもしれなかつた。

## ～桜色・第四章（2）～

Coloring envelopes ～第四章（2）～

歩きながら、俺は人気の無い場所を目指した。

ケータイで話しているところを、教師諸賢に叩撃されたら事である。特に俺の場合容赦無い処罰が待っているだろ？

しかしそうやって周囲を警戒しながらも、俺の耳はスピーカーから聞こえる声を一字一句聞き漏らさぬようひと細心の注意を払っていた。

「ひょっとしたら出でくれないんじゃないかと思いましたが、意外に僕とお話する気はあるんですねえ。てっきり嫌われたものだと思つていまししたが」

そう言つて、またくつくつと笑いやがる。ニヤケ面がくつきりと脳裏に浮かんで、非常に俺の機嫌はよろしくない。そう言つてやろうかと思つたが、ここで言つても大して効果もなさそうなのでやめておいた。

「うるせえな、気味悪い笑い方しやがつて。何の用だよ

と思つたら、気づくと口から悪態がすべり出でていた。ああ、俺つて意外と考えてることすぐ口にするタイプだったんだろうか。

だが肝心の相手の方はやはりまったく効果がなかつたようだ、「おや、これは失敬」とかいなながら、話を仕切りなおそうとした。まあ、そつちの方がいいんだけどな。

そして古泉のほうから話を切り出してきた。何のことは無い、あいつがここに電話をしたのはただ単にこのためだつた。

「話し合いの場を持ちませんか、僕たち『機関』とあなたたちの『集団』とで、

古泉は極めて冷静にそう述べた。

「なんだよ、話し合いつて」

「こちらも至極冷静に受け應えてやる。」

「なんだと言われましても、涼宮さんの事以外で何があるでしょうか。このままではお互に理解し合えないまま、意味もなく対立してしまいそうなので。我々はそれを避けようと、とにかく互いの意見を確認しあうだけの場だけでも作ろうと言つておるのでありますよ」

和して同せず、というような状況にしたいってわけか？

石井＝ランシング協定。ふと、頭にそんな言葉が浮かんだが、かき消した。

「ええ、まあそんなどこりです。とにかく、そちらの上のほう…立花さん、などこお伝えしていただけると幸いなんですが」

そこでなんとなく、俺の脳裏に疑問符が浮かんだ。

なぜ俺に伝言を依頼するんだ？

話し合ひの場を持ちたいなら、俺に言つよつ立花さんに直接交渉したほうが早くないか？それかおやつさんと話をつければ、立花さんも俺もくつついてくるだろ。元気がある気がして。俺は古泉にそれを聞いた

ただした。

「なあ、伝えるのは別に構わねえけどよ。何で俺に言つんだ？立花さんとかに話しつけたほうが早いだろ？」

すると、電話口の向こうでは、なぜかあきれたため息が聞こえた。そしてどこか力の無い声が、受話器の向こうから聞こえてきた。

「…それが出来たら苦労しませんよ」

急に三日連続残業した直後のサラリーマンみたいな疲れ切った声をだしやがった。あつこの野郎あからさまにわざとらしくしゃがつて、8割演技だな？譲歩しても4割はそういうだろ。

「普通に考えれば、あなた以外に話のつけようが無いじゃないですか」

……？

それは、どうことだ？

まあ確かに立花さんに直接話しても、いろいろばぐらかされてなかなか話がまともないかも知れないが、しかし立花さんだって一応話は聞くと思つた？

すると、古泉は今度こそほんとにあきれた様な口ぶりで言った。  
「单刀直入に言え。あなた以外にこちらから接触できる方なんていりないんですよ。それもこんなふうに、誰にも怪しまれることなく、ね」

今度は急に、耳元でひそひそ話をするときのようになんかをひそめた古泉が言う。事実携帯のスピーカーは耳元にあるので、実際にあいつが俺の耳元で声を出しているような気がして非常に気分が悪い。ていうか、声のトーンをいちいち変えるのはよさんか、疲れる。しかし、そうか。

俺は、頭の中のつつかえが、ひとつ外れたような感覚でそこに立つていた。

その後、古泉はできれば今週中にその場をもつけたいといつ『機関』側の都合と、確認のために明日今と同じ時間に連絡すると言つ旨を言い残した。

俺は、その両方をかなえてやりたいが。あいにく立花さんが日本にいるかどうか不明だから、すぐ連絡がつくか分からない。と答えた。

「それでもまあ、確認のため明日もかけますから。連絡がつかなかつたときはつかなかつたときで、その時考えましょ」「うう  
ひとまず、お願ひしますよ。と古泉は言つた。俺が、ああ。と答えると、どちらからともなく、通話は切れた。  
虚空に浮かぶロープは切られたのだ。

だがロープが切れたときには、もう俺はロープに頼らなくていいところまで自分を引き上げていた。

俺にも、できることはあった。

ケータイを握り締めながら、俺は口元が緩むのを止めることがで

きなかつた。

そんなちっぽけなこと、と笑いたければ笑うがいい。

誰からどう見たって、今の俺は『話し合い』とやらの開催を立花さんたちに伝えるだけの小間使いだらうよ。今はそれでもいいんだ。ここにいるからには、動かなきやしそうがない。

俺は歩き出した。そろそろ昼休みが終わる。

歩きながら、俺はある一つの計画を。そつと胸の奥で組み立てた。ありがとよ古泉。お前が『話し合い』とかいうのをもちかけたお陰で、俺にも良い考えが浮かんだ。

和して同せず。お互い意見や立場が違うのはわかるし、行動が噛み合わず対立するのもわかるが、ひとまず対立せず仲良くしていましょう。そんな意味合いの言葉だ。

そうだ、その手があるじやないか。

昼休み終了の鐘が鳴り響いた。

どうやら予想以上に古泉との会話で時間をくつっていたようだ。俺は半ば慌てて駆け出した。

だが、その顔はにやけたままだつたに違いない。

貼り付けたような笑みなんかじゃないぜ。心の内から湧き上がるような、本当にうれしい微笑みさ。

なんだか全力疾走したくなつて、俺は教室までの道程をダッシュした。

そうか、まだ。全てが終わつたわけじゃないんだ。

俺は、新しく見つけた希望へ向かうかのように。走つた。

ああ、もうメロスとでもなんでも言つてくれ。

「ただいま」

俺は郵便受けをしつかり確認した後、家の施錠を解除し。帰宅した。

基本的に家の鍵は俺が持つている。とはいえ、立花さんとおやつ

さんがそれぞれスペアを持つてるので、特に必要ないことは無いのだが。

帰つて早々リビングに飛び込んだ。おやつさんせこつも内にいる。

「おお、おかえり闇歩」

なにやらパソコンをいじくりながら、首をひねつてひから振り返るおやつさんが言った。

明は、ロジングと続きの和室で寝ているようだつた。

俺はさうとキッチンから和室まで眺め、立花さんの姿が無いのを確認してから。

「おやつさん、立花さんは？」

と聞いた。

するとおやつさんは、いつもネットサーフィンしてこらるるに様子でマウスをかちかちやつながら。

「あー…どこだったか。ちょっと待つてくれ、確かメール着てたはずだ…」

見た目からして明らかにおやつさんであるわつに、おやつさんはパソコン関連というか、電子機器にめっぽう強い。かなり慣れた手つきでメールボックスを開き、お皿でのメールを探しているようだ。余談だが、俺はこういつの疎くて吉野によく勝ち誇った顔をされるのが常だ。どうせ機械音痴だよ。

ていうか、おやつさんと立花さんのやつとりはメールなのか。

「えー、どれだったかな、ど。確かにそんなに遠くなことこだつたんだが…」

遠くない方が助かる。できれば日本国内であるせつが望ましい。今週中にここに帰つてこられるならなお良い。

「ああ、あつた。立花なり、今パリにいるな

見事に国外じゃねーか！しかも遠つー

これじゃ帰つてこれるかどうか不透明すぎる…。

そう悲観的になつてこる俺に、おやつさんが希望の一言をくれた。

「おつ、ひつやり明日には帰つてくるみたいだぞ」

「またそりや急な話だ、明日から飯一人分多く作らにやいかんじやないか、食材足りたかな？」

つてそりやない、今は『話し合』の方が懸案事項だ。

「そりやねえ、急に立花の事なんて聞いてどうした？」

おやつさんが、今度は体ごとこちらにむけて、俺に向き直つた。対する俺は、学校帰りの格好のままで荷物も降ろしてないままだつたが。今日の晝に古泉から持ちかけられた『話し合』についてのことを報告した。

おやつさんは少し驚いたような表情を見せたが、すぐに平常の無表情になり、無精髭をいじくりながら。

「そりやか」

と短く答えた。

「それにしても話し合いを持ちかけてきたか、やつらも相当焦つてるようだな、これは」

独り言のようにおやつさんがつぶやいた。この時にはもうおやつさんはネットサーフィンにまたその身を委ねていた。

「『話し合』を受けるんだよな？」

「もちろん、受けない理由はないからな」

俺はふと不安になつたことを聞いたが、その心配は無用だつたようだ。

「立花には俺から言つておひつ、明日もつ一度連絡が来るんだつたな？」

低く、重みのある声が聞いかけてくる。

俺はなんだかしごまつて、「はい」とか答えた。なんとなく、そんな雰囲気だつた。

「今週中に開くのも良し、こつでもいいと伝えておけ。それと、話し合には立花と閑歩で行け。向こうが何人で来るかわからんが、二人で十分だつ」

「えつ？」

「ん？ どうした」

驚きの声を上げた俺に、おやつさんが問い合わせ返す。

「…いや、おやつさんと立花さんが行くのかなと思つてたから…」  
俺は正直な感想を述べた。だってそうだろ？『集団』の中で一番このことに精通してるのはその一人だし、俺は行つてもどりせたいしたことしゃべれないし（ていうか、知らないし）。立花さんはともかく、どうして俺が行くのか。ていうか、立花さんを連れて行つたらもう話し合いになんかならないんじやないかとすら思う。当然立花さんを俺が抑えられるわけ無いし、だからおやつさんが出て行って、しっかり立花さんを抑えつつ『機関』のやつらと話し合つべきじゃないのか？

その旨をおやつさんに正直に申し述べたといひ、おやつさんせ「がつはは」とか豪快に笑いながら。

「お前が行かなきゃ意味が無いだろ、閑歩。逆に、俺が出て行く意味は無いぞ」

と、よくわからぬことを言つた。

そのときの俺ははぐらかされたと憤つたもんだ。

俺はその後も、おやつさんにどうして俺が行かねばならないのかを問いただしたが、納得できる答えは得られなかつた。

何はともあれ、俺は立花さんと一緒に『機関』の連中と話し合わなければならんらしい。

別に話し合つのはいいんだが、なにを話し合つのかわからんという不安と同時に、相方が立花さんでまず口クな事にならないだろうな、という厄介ごと確定の不安感が俺を取り巻いて、非常に前向きになりづらかつた。

どう考へても俺を不安にたらしめる要素しかないのだが、それでも俺はいぐらか前向きであった。

俺は『リスト』を取り出して、ある番号を携帯に登録した。

「…いや、おやつさんと立花さんが行くのかなと思つてたから…」

『機関』との話し合いが迫る中、俺の中ではもう一つの『話し合  
い』の計画を進めていた。

これはそのためのものだ。

ひょっとすると、俺らと『機関』との間にも同じことが言えるの  
かもしねないが。お互いに知っていることが少ない。  
いや違うな、お互いにお互いを調べ上げてるから「知っているつ  
もりになってる」んだろう。

だから最初から、相手とは話し合ひにならない、相手と対立する  
のは仕方が無い。とあきらめてかかる。だから無用に対立する。  
分かり合ひ、分かり合えない、それ以前に。もっとお互いを知る  
うとする必要で。お互いを知ろうと思ってるなら、知る機会  
を作ればいい。相手を密かに調べ上げるなんてことしないで、本物  
の相手と向き合ってみないと、わからぬことなんてたくさんある。  
それを知つて、初めて相手を「わかる」んじゃないだろうか。

ただそれは、お互いが「知りたい」と思わないと成立しないこと  
だ。

俺にはそれが一縷の不安だった。

相手が 、あの人ガ、俺のことを知りたくないのなら。これは  
俺の独りよがりだ。

俺の気持ちを唯一マイナスの方へひっぱるベクトルは、それであ  
つた。

どの不安よりも大きいそれは、しかし今の俺を劇的に改善するか  
もしれないブラックボックスでもあった。

どう転ぶかは、俺しだいで、あの人しだいなんだ。

そんなふうにぼうつと考えていると、隣の部屋からテレビの天気  
予報が聞こえてきた。

どうやら明日は、なかなかの快晴で、気温もだいぶ高くなるらしい。  
いまさしく初夏の気候になるそうだ。

やれやれ、まだ夏服の移行期間でもないのに。明日はブレザー着  
込んで、汗だく必至だな。

ハンカチ一枚多くもつてくかな、あいや、ハンカチで汗拭くのは  
おっさんくさいだらうか？

できるだけどうでもいいことに思考を預けながら、その日は暮れ  
ていった。

言い換えれば、久しぶりにそんな穏やかな気分でいたのだ。

太陽は、核融合全開で俺の真上にいるようだ。

人気の無い、美術備品倉庫代わりの階段。

そこにたたずむ俺の右ポケットが、小刻みに振動し低いうなりを  
上げる。

俺はそれをポケットの中から手早く出し、番号を確認するまでも  
なく通話ボタンをプッシュした。

「あや、早いですね」

「かかってくると判つてりゃ、そりや早えよ」

お互にあまり関心がないようなふうで、言葉を交わす。

「どうでした？そちらの予定は？」

「オッケーだ、今週中ならいつでもいいとさ」

「わかりました、では日曜の午後2時ごろでいかがでしょう？」

そりやまたずいぶんと半端な時間だ。だがまあ、断る理由もまた  
ないだろう。

「ああ、いいぜ。たぶんこっちに問題は無い」

「それはよかつた。ところで、そちらからはどうなが出席なさる

のでしょうか？」

む、古泉が探りを入れてきた。

「ん？ああ、こっちは立花さんと俺が出る。そっちはどうなんだ、お前が出るのか？」

が、古泉は答えず。代わりにくつくつとあの憎たらしい笑いが返ってきた。

その時俺は、あつ、正直に答えてやつたのは失敗だつたのかと思つた。

「いえ、まだわかりません。正直こちらの人選はまだ決まっていないのですよ」

くつくつと続いていた笑い声が消え、古泉の発言だけをケータイは拾つてきた。

「ですが、あなた方の人選を参考にさせていただくのは、間違いないでしょうね」

この野郎、体よく俺から出席者の情報だけ掠め取りやがつて。いやまあ、真正直に答えた俺も俺だし。わかつたといひでどうなんだといわれりやそうだけど。

なんだか今すぐケータイを切りたい衝動に駆られたが、どうせすぐ切ることになりそうでやめておいた。

「では、日曜日の午後2時、ということで。その時に、直接お会いしましょう」

「ああ」

俺は多少不機嫌そつに言った。

「では、失礼」

携帯が切れた。

そこでふと、ん？と思つ。

あいつ、なんか最後に引っかかると言わなかつたか？

しばらへ考へた後、あつ、あの野郎。ともつ一度思ひはめになつた。

何が、『人選は決まつてない』だよ。

少なくとも、お前が出ることはわかつてんじやねえか。

俺はそこでよつやく、古泉を含む『機関』の連中が、わりかししたたかだといふことを思い知つたのだった。

その事実はこの先にかけて懸案事項以外になり得ず。

今週末に直面することが確定した、『話し合い』といふ出来事においても俺の気持ちを落ちこませるもの以外の何物でもなかつた。だが、迷れようと思つても時の流れに抗える訳も無く。

週明けが誰にでもやつてへるよつこまた、週末は俺にちやつてくれる。

俺はその週末が来る前に、やつておかねばならぬことがあつた。

それは、俺の『話し合い』へ向けての下準備である。

『はーい? やあひやん?』

受話器の向こうから、聞きなれた快活な声が聞こえてきた。

俺は、息を思い切り吸い込み、とにかくはつきり言つことに気をつけ。ゆつくりとしゃべつた。

「鶴屋さん、俺です。虎野です。虎野閑歩」  
『えつ?』

正直な驚愕の吐息に、俺は逆に安堵した。

そして恐らく、電話口に立つてゐるであつた彼女がまだ状況を理

解できていなこつちに。俺は用件を書つ必要があった。

「鶴屋さん、切らないで、とりあえず俺の話を聞いてください」

俺は必死の思いでそう言つた。

そして俺は、できるだけ早口で用件を話した。彼女は驚いたままで、何も返しては来なかつた。

「学校で、良いかどうか確認しますんで。そのときまでに考えてください。じゃあ」

まるで、留守番電話に伝言を残しているかのように俺はしゃべつた。

それは彼女の方から何も反応がなかつたからどうのもあるが、最初からそのつもりだつたといつのもある。

これで俺は、一いつの話し合いを整えた。

もつとも、どちらもうまくいくかはよくわからん。

だが、ただ一つ言えることがあつた。

「何もしないよつは、マシだ」

言い聞かせるように自分に言い、俺は携帯を放り出した。

賽は投げられた、つてな。

そこ、笑つて良いぞ。

そして、なんにも知らない太陽が、日曜の朝を告げにやつてきた。

Coloring envelope 第四章（3）

いつも通りの朝だつた。拍子抜けするくらい。

なにも普段と変わらない日曜日で、少し変わつたことじこえば。

「閑歩、パンにバター塗りたいんだけど」

「ねーよ、マークリンならあるけど」

「はあ！？ なんでバター無いのよ！」

「うつるせーよ朝から、マークリンで我慢しろ。バターは割高なんだよ、すぐ食べれねえし」

まだコタツを片付ける様子の無い我が家居間には、朝から怒号が響いていた。

その発信源はいわすもがな。俺の同僚にして幼馴染、吉野である。それにしてもコタツがつけっぱなしの食卓で朝飯がパンに卵、ベーコンと味噌汁という組み合わせつてのはどうだつたかな。俺は好きなんだけどこの組み合わせ。洋食の割合がでかいだろとか言うなよ。

今はその食卓をおやつさん、立花さん、俺、吉野、そして明が囮んでいる。

珍しくフルメンバー。全員そろつての朝ごはんだ。

そしてぶつくさ言いながら、吉野がマークリンをパンに塗り始めた。別にマーガリンだからどうとも無いだろ、動物油脂か植物油脂かの違いなんだからよ。なんでバターにこだわるんかね？

「しづくん、砂糖」

そこで飛んできたのは立花さんの声だった。例のおばさんくさい声で砂糖を要求される。

「え、あ、はいわかりました。いま取つて来ます

俺は立ち上がり、キッチンへ砂糖を取りに行つた。そうだった、立花さんのいる食卓には砂糖が必須だったのを忘れていた。

ん？卵やベーコン、それに味噌汁の食卓に、どうして砂糖が必要なんだつて？それはこの人の食事を見てれば、大体分かる。

立花さんは、かなりの偏食家なのだ。

俺はとつてきた砂糖を立花さんの前に置いた。満足そうに「ありがとうね、しづくん」と言つなり、立花さんは田の前の田玉焼きに砂糖を振りかけ始めた。

それも、ぱつ、とじゃない。けつこう、どばつ、と。

そんな調子で隣のベーコンにも砂糖が降りかかり、次に味噌汁も犠牲になつて、最終的にパンにも結構な量の粒子が降り注いだ。で、シメは、砂糖の容器をコーヒーカップの上へ移動させ、もはやドサツという音が耳に届きそななくらいの量が、黒色の水平線を揺らした。あれは、何コーヒーと呼ぶんだろ？

俺は「コーヒー」を飲まない方だが、それでもあの飲み方が常識から外れるとるというのはわかる。いくらなんでも、わかる。

そして立花さんはそのコーヒーを念入りにかき混ぜた後、一口のみ。サングラス越しで満足そうな笑みを浮かべた。あ、立花さんは寝起き以外はいつもサングラスをかけているのが普通だ。

そんな調子で砂糖ふりかけ卵焼きにも手を伸ばし、満足そうに食べている。そして食べ方はナイフとフォークを使って、非常にお上品な食べ方だ。

そして卵を食べての一聲。

「うんうん、やっぱ日本の砂糖は違うねえ」

……ついこないだまで行つてたパリでも、それやつてたんですか立花さん…。

非常に気になつたし、現地の方々からどのように見られたかと思うと、少々どころでなく気にしたが、なんだか怖いので聞かないでおくことにした。

食卓は、しばし無言であった。俺たちの食卓は、全員そろつても

無言であることが多い。

それ、それに考へることつてのがあるのだらう。だが別に、食事中は私語禁止とかそういうつもりがあるわけでもない。

だが無言であるほうが、『』飯はすぐ終わる。

しゃべりながら食いつと長引くからな。そういう意味では、効率がいい。

やう考へてこらへちひ、全員朝飯を食べ終わっていた（明にはおやつさんが悪戦苦闘しながら食べさせていた）。

いつものことだが、家事係は俺なので。その片付けも俺の役目だ。

「あと8時間って所だな……」

明との朝食戦争を終えたらじいにおやつさんが、つぶやいた。  
あと8時間。何を隠すまでも無い、『機関』との話し合いまでの時間である。

「よし、閑歩、華恋、立花。話がある、集まつてくれ」

おやつさんが呼びかける。俺は食器を運んでいる最中だったので、返事はしながらも、ひとまずテーブルの上を片付けてから向かうことにした。吉野は「あー」とか言いながら、朝飯を食べたままの場所で待機。立花さんに限つては、朝飯を食べたその場から少しも動くことなく、不気味な笑みもまた浮かべっぱなしであつた。

キッチンにそこまで多くない食器を置き、俺は居間へ戻つた。テーブル拭くための台拭きも忘れない。

俺が朝飯と同じ場所に収まるなり、おやつさんは話し始めた。ひとまずテーブル拭きは後回しだ。

「みんな分かつていると思うが、今日『機関』側と話し合ひの席がある」

俺たちちはうなずいた。ちなみに明はおやつさんに抱えられているので、結局全員この話を聞いている。

「で、最初は立花と閑歩の二人で行つてもうおつと思つたんだが

…

おやつさんが、ためらつよいに吉野の方を見た。

それを持ちましては、吉野が宣言する。なぜか  
視線を俺に向けながら。

「あたしも付いていくよ」

と言い放つた。

どうやら、話し合いで吉野も付いてくるらしい。うそ、三人寄ら  
ば文殊の知恵って言うし……

「つて待て、どうしてお前が付いてくんだよー。」

俺は思わず追及の声を上げざるを得なかつた。言っちゃわるいが、  
吉野はとても話し合い向きの奴じやない。どちらかって言つと立花  
さんタイプだ。人の話を聞かないで猪突猛進、唯我独尊みたいな感  
じ。

そんな奴が話し合いに同席するって、ややこしくしかならないと  
思うんだが。

「まあまあ、閑歩。吉野がどうしても行きたいって言つたんだ、  
別にいいだろ?」

すると、にらみ合づ俺と吉野を見かねたのか、おやつさんがそう  
言って俺を諭しにかかった。

ん? 吉野が行きたって言つた?

それはそれでなぜなのか気になるところだが、おやつさんが  
話を先に進めたい風だったの、ひとまず放置しておいた。  
そしたら、唯我独尊吉野があつさり皿供した。

「へん、閑歩。あんただけ日本で活躍させたりなんてしないんだ  
からねつ」

ふん、と俺を鼻で笑うような仕草をしながら、吉野はそんな事を  
言つた。そんな理由かよ、深く考えて損した。いや、気になつて損  
した。

ていつか、そんな理由でよくフィンランド（俺たちの本拠地だ）  
からここまで飛んできたもんだ。

「ま、多少動機は不純だが。まあいだろ?、人数が一人くらい  
増えてどうということはあるまい」

おやつさんがそう統括して、ひとまず話を続けた。

「まあ最初の話し合いでどうこうすることも無いだろ。次回の話し合いで約束を取り付けるだけのつもりで行ってー」

「えー

流石にこれには反応せざるを得なかつた。

「どうした？ 閑歩」

おやつさんが俺の方を向いて言つた。いや、どうしたもんじつしたも。「いや……、次回の話し合いで約束だけしてこいつて、もう聞こえたんだけど……」

それは話し合いでしての態を成してないんじゃないだろうか。

そんな俺の疑問を、何のことは無しにおやつさんは笑い飛ばした。

「あつはは、そうか、閑歩は眞面目だからな。本当に『機関』の連中と話し合つつもりだったのか

え、俺なんかおかしいこと言つたか？

立花さんを見れば、別にあきれるでもなく笑うでもなく、不気味な沈黙を保つていた。いや、もとより表情の変化は読み取りづらいが。そして吉野はあまりよくわかつてないふうな顔をしていた、間抜け面してんぞお前。そして明はなにもわかつてない笑顔だった、かわいいな、お前はかわいいなこんちくしそう。

「いいか、俺たちと『機関』は、元来解りあつはずの無い一つのグループだ」

そこで、突発おやつさん講座が始まった。

「それが一回の話し合いで妥協点を見つけたり、なにか取り決めをしたりなんて出来るわけが無いんだ。最初から折り合いが悪いうえに、主張が食い違つてるんだから、言い争つてまとまらないのは必定

うつむ、確かにそんな気がするが……。

「だから最初は、話し合いで長期戦になることを見越して、定期的に話し合いの席を設ける約束をとりつけるということをする。そこで、最低次の話し合いの席を取り付けて来いと言つたわけだ。同

時に、先方が「ひかりと本当に話し合をする意思があるのかどうかも確かめると書いた訳だ」

それは、この話し合いが『機関』側の見せ掛けかもしれないといふことも示唆していた。

つまりは、俺たちを牽制するために、一応の話し合いの場を一回だけ設けたのではないか、と。

「ま、こきなりあちらから。話し合いが出来ぬよつた重役が出てくるとも思えないしな…」

おやつさんは最後につぶやくよつて言った。「つべ、とこう」とこの話しあいとは一体何なんだらう。なんだか恐ろしく無駄なことしてこむような気がしてきたぞ。

「ま、大丈夫さね」

ふいに、居間に立花さんの声が響いた。  
凛とした、よく響く声だった。

「いやと書う時は、あたしが、この話し合いを一回きりになんてさせないようにするからね」

そう言って立花さんが口元を歪めた。

いや違つた、微笑んだのだ。微笑みがそつは見えないほどに立花さんは不気味な笑みを浮かべていた。

俺は、あと八時間後のわが身に。わずかな危機を覚えたのだが。そのときは何も言わなかつた。

あれは、立花さんが何か口クでもないことを考へている時の顔だ。なんだか不意に、俺死ぬんじやないかとかさえ思つた。おおげさだつてのは、わかつてゐるんだけどな。

そして氣づけば、約束の一時までとわざかとなつていた。

それまでの間のことは、正直あまり記憶に無い。

まあそれは特に何もなかつたからなのだが。

吉野が運転する車（免許持つてゐるのか？と気になつたが、聞かないでおいた）に乗つて、『話し合』の場所に移動する。場所は北口駅、そのロータリーだ。

それが先週の間だけ恒例になつた、古泉との定時連絡で伝えられた集合場所だ。

実を言うとここは、市内の中心部であり。休日にはどこから沸いたんだと思うくらいの若者でじつたがえす。正直人ごみが苦手な俺には、勘弁して欲しい場所だ。

吉野は適当な100円パーキングを見つけて黒塗りの車を止め、そこから徒歩でロータリーへ向かつた。

超人が一人いようが、することは普通の人間と同じである。

なんとなく皮肉だなあ、と笑い出しそうな俺を、立花さんが突然小突いた。

「やあしづくんぞ、にやけてるつてことは。ずいぶんと余裕があるんだねえ？」

駅前へ向かう道を歩きながら、立花さんの方がよっぽど皮肉っぽく俺に言った。

俺の方は、駅前に向かうにつれ増えていく人々に注意深く目を走らせながら。

「そんな、余裕なんて、無いですよ」

ロータリーにたどり着けるかどうかという、話し合い以前の心配で既に頭が一杯の俺にはそれくらいの応答が精一杯であつて。

「…ナイフは、ちゃんと仕込んでるかい？」

という立花さんのわざやきを、危うく聞き漏らすところだつた。えつ、と立花さんの方を向く。すると、立花さんはサングラス越しに苦い顔しながら、「前向きな」という合図を首から上だけで送つた。俺は慌てて前を向く。

吉野は、俺と立花さんの少し後ろから付いてきている。立花さん

のわざやさばぎりぎり聞こえないようだ。

「しづくんは、銃は使ったことあるっけ？」

「また立花さんが囁いた。なんだ、何でこんなことをいま聞く？」

「…立花さんに教わった以上のことば、まだ」

俺も同じさやきの波長に合わせて言つ。同時に、子供時代に立花さんに無理やり銃の扱い方を教わった時の事を思い出す。…あんまりいい思い出じやないなあ…。

「そつか、じゃあまだ持たせないほうがいいね」

なんだ、いつたい何の話なんだ。

俺は横目で立花さんを見た、立花さんはいつもと変わらない様子で、俺と並んで歩いているだけであった。時たま、すこし顔を近づけて囁く。

再びサングラスが耳元に近寄ってきた。

「吉野はねえ、銃持つてるからね……アレはけんかつ早いから。いざといつときはしづくんが抑えておくれよっ？」

なんだか物騒な話になつてきたぞ？

「抑えるつて、じうするんですか？」

立花さんはさも当然という風に言い放つた。

「マジでヤバイ時は、銃持つてる腕を折るとか、首筋にナイフ突きつけてやるとか、ちゃんと止めないと。吉野があいつらの息の根止める前にねつ」

あいつら、とは当然今日の話しあてに出る『機関』の連中のことだろう。確かに吉野はちょっとした挑発にすぐ乗る程度にけんかつ早い、まあいわゆる危ない人である。立花さんは冷静沈着でありながら、ここじやとつとうときに武器をぬつと出すので、危ない人でもちよつと種類が違う。

「はあ…わかりましたが…？」

俺は頭の中が疑問符だらけだったが、とりあえず同意しておいた。吉野は確かに話し合いにはさっぱり向かない地雷だし、けんか売られたと思ったら（勘違いでも）勇んで買い取る奴なので、気をつけ

ろつてのはわかる。

しかし、『機関』の連中が、わざわざ吉野や俺たちを煽るようなことを言い出すのか？

吉野だって、特に何も挑発されなきゃ普通の女の子だ。

俺はすこし後ろを歩いてついてくる吉野をちらと見た。身長は俺より少し低いくらいでスラッシュとしてる、金髪のウェーブヘアーガルトびに揺れる様は、明らかに日本になじまない西洋人形のような雰囲気をかもし出していた。気が強そうできりつとした表情。それこそ口元が不機嫌そうにゆがんでなくて、服装もなんとかライダースーツを着込んで真っ黒でなければ、雑誌のモデルといつても差し支えなさそうな容姿ではある。

すると、俺の視線に気が付いた吉野が不機嫌そうに一言。

「あによ。あたしの顔になにか愉快なもんでもついてんの？ ガンつけてんじやないわよ」

……ああ、今、中田がたまに使う「残念な美人」って言葉の意味がなんとなく分かつただけだから気にすんな。

そう思つたが、当然ダイナマイトの導火線で遊ぶ気なんてさつぱり無いので。何も言わず、肩をすくめて前に向き直つた。  
かわいい仕草の一つでもみせりやあ、まだましなんだらうけどな。  
そうして俺たちは、北口ロータリーへ確実に歩を進めていった。

はつきり言つと、この時の俺は認識があまかつた。

どう認識が甘かったかつて？

俺は思つてたんだ、互いの主張をぶつけ合つだけで、この話し合いはまあ平行線で終わる。問題は次回の機会を作れるか否かということだけにあるのだ、と。

そして俺は、立花さんと『機関』の連中との掛け合いを見て聞いて置けばいい話で。

いわばその俺と同列の傍聴席に、ちょっとあぶなつかしい奴が同

席しただけの事だと、そう思つていた。

だが実際は、同席したのはちょっとどこか完全に危険物、話し合いをぶち壊しかねないダイナマイトで、その導火線の短さについては俺はさっぱり認識していなかつた。

そしてもう一個認識が甘かつたことがある。

これは立花さんの方ですら予想外だつたようだ。

この話し合いを持ちかけてきたのは奴らのほう、ということは、奴らの方がこの話し合いを大事にするはず。と思つてたんだ俺たちは。

ところが奴らは案の定、俺たちの持ち込んだダイナマイトに興味津々だつたという訳。

分かりにくい？

ああ、じゃあ、もうちょっと分かりやすく言おう。

俺たちが認識甘かつたこと。それは、

『機関』の御連中が、予想以上に火遊びがお好きだつたって事。

はい、第四章はまだまだ続きます。

かたくなに一章四部の構成を続けて来ましたが。今回は五部くらい行つてしまいそうな勢いです。かと言つてなにか急展開があるかと言つとそんな事はありませんが

諸事情（主に受験的な）により、しばらく更新停滞するかもしれません。できれば月一更新は続けたいと思つてているんですが、現状どうなるかわかりません。

ひとまず、気長に続きを待つていただければ幸いです。というか月一更新自体がゆつたりしそぎな感もあるので、特に問題で無いかもしませんががががががが～～

兎にも角にも、ここまで読んで下さっている皆さん。ありがとうございます。

続きはこつになるやうですが、必ず書き出すのでお待ちあれ…

俺はなんだか不思議な気分だった。

日曜日の午後、北口ロータリー。

噂通りとしか言いようの無い、どっから出てきたんだという人だからりをかき分けて、進んでいく。

そこでふと気が付いた。

俺はロータリーの中央部を見、それから全体を見渡すようにぐるつと視界を一回転させた。

別に入ごみの量を確認しようってわけでもなく、ロータリーを囲む建物を確認しようだなんておもっちゃいない。ましてや、『機関』の連中がいかがどうか確認したわけでもなかつた。

一つの感覚が俺を取り巻いていた。

ロータリーに入った途端、俺だけが感じられる違和感。

それは、俺が初めて閉鎖空間が『ここにある。』と感じた時と同じ感覚だった。目で見ても何も無い、しかし第六感のようなもので、『何かがある』と確信している。そんな感じ。

だが、だが俺は同時にこれが『閉鎖空間』ではないと確信していた。なぜだかわからないが、した。

それがまた違和感となつて俺を襲つた。なんだ、これは。

そして、閉鎖空間とは違うところがもう一つ。

入り口が、さっぱり分からなかつた。

しかし、何かここにあるという感覚は、異常に俺の六感を刺激してやまなかつた。

「どーしたい？しづくんさ？スナイパーでも潜んでたのかい？」

俺の前で、人ごみをかき分ける役目をしていた立花さんが。俺の拳動に気が付いて声をかけてきた。

後ろの吉野も少し不審そうな顔で見ていた、俺は立花さんに向き直りながら。

「……え、なんでもないです……」

と心にも無いことを言った。

立花さんは、歩みを止めないながらもまっすぐ俺を見つめた。そして、数瞬の間があり。

「ふうん、そうかい」

と、なぜか意味深に微笑んだ。

思えば、この時から何かおかしかった。

そういえば俺はこの時、人ごみにまつたく流されることが無かつた。

立花さんが先導していたというのもあるのだろうが、それ以上に、なぜか人ごみの中を冷静に進めたということがあった。

何が原因でそうだったのか、それはさっぱりわからないのだが。そもそもその時はその理由を究明しようだなんて思う暇も無かつた。

「おや、お出迎えとは、気前がいいねえ

人だからがすこしまばらになつた時、立花さんの那一言で、俺は妙な空間の感じとか、人ごみをかき分けられた理由とか、そういうのをまとめて置いておかざるを得なくなつた。

立花さんが進もうとする先、見事に人が避けて行き。まるで海が割れたように出来た道の先、俺たちがその対岸へ進むのを待つているような、怪しいくらいに黒塗りな車の側に立つ男女の組を見つけたからだった。

何だろうな、超能力者でも超人でも、使う車は黒塗りなのな。

と、そんなどうでもいい事を考えながら。俺は待っている男女の片方が古泉であることを確認した。もう片方は、その辺のキャリアウーマンをひつつまえてきました、と言った感じの女性だった。

女性物ではあるが、やはり黒のスーツで決めており、しかしその顔は意外にも柔軟なように見えた。そして何より、結構な美人だ。

どうやらお互いの存在に気づいたのはこちらが若干早かつたらしい。柔軟に見えた女性の表情は、こちらに向かって視線を向けた途端、きりりと引き締まった。

つうむ、この人もきっと鶴屋さんと同じで、笑顔が魅力的な人だと思つんだけだな。残念。

とまた俺の思考はどうでもいい方向に飛んで行つた。おかしいな、さつきから考えがあっちこっちに飛んでく。

「……『立花さん』、ですか？」

「ほうよ、いかにもお

警戒したようなその女性の声に、だらけきつたとしか思えない声で肯定する立花さん。お互いの距離は3メートルくらい離れており、普通に話をするといつにはあまりに離れた距離からのやりとりであった。

つまりそれだけ俺たちを敵視してることだが、俺らはそんなに物騒に見えるのだろうかね？

まあ確かに、立花さんに關しては否定しないし、吉野にいたつては否定する要素も見当たらないが…。

「森さん、後ろの背の高い男性が、虎野さんです」

唐突に俺の名前が呼ばれる。普段苗字で呼ばれる機会が少ないの

で、気づくのに多少の時間を要したが。

俺の名前を呼んだのは古泉だった。俺が視線を向けると、どこか困ったように微笑んだ。おつ、今の演技はうまかつたぜ。

古泉の発言が正しければ、どうも黒スーツの女性は森さんとおつしゃるらしい。

ちなみに古泉はこれでもかといふくらいカジュアルな格好だった。ローカルなファッショングラフからそのまま出てきました見たいな格好で決めている。いや、様になつてはいるけど、その森さんとの服装の兼ね合いとか気にしなかつたのかおまえは。

「それで、後ろの方は……？」

古泉が、本来ここに来るはずの無かつた人影に視線を合わせ、見知らぬ人物だとわかつた途端、俺に紹介を求めるよつた視線を送ってきた。

俺はわずかに肩をすくめ、その視線に応じてやることにした。その視線すら芝居がかつていてるのが相変わらず気に食わなかつたのが。

「こつちの黒いのは、吉野、つて名前だ」

「ちょっと、黒いのって何よ」

「うるせーな、間違つてねえだろ」

「あーはいはい、二人とも、また始める氣かい？」

対古泉の芝居くささで既にいらいらしていた俺は、ましてや吉野の紹介を丁寧にやる気になるはずもなく、至極適当にした。当然それに吉野が噛み付いたところで、立花さんが諭しにかかつてくる。そうだ、ひとまず今はやり合つてる時じゃない。

「なるほど……『立花さん』に、吉野さん、ですか……」

森さん、といづららしい女性が、目を細めながらそうつぶやいた。確認するように復唱していただけかもしけなかつたが、なんだか俺は違和感を覚えた。

この間の鶴屋さんとの一件で俺も学習したのかもしない。

俺は違和感の正体にあつさりと気づいた。古泉の所作に気がついていたせいですぐにはわからなかつたが、そういうえば森さんは、吉野を見ても別に驚いた様子を見せていなかつたことに気が付いた。古泉から、（俺が前田うつかりしゃべつてしまつた、『話し合い』へ参加する顔ぶれの）話を聞いていれば、吉野は彼らにとつて、『訪れるはずの無かつた予想外の人物』のはずだ。

それなのに、少しも動じた様子も無い。

ハッタリの可能性もあつたが、俺はそうだと思わなかつた。直感だ、ああそまさ、所詮直感だとも。

だからこの世には、時として、直感ほど頼りになる感覚もない。と

いつ時があるのさ。

この時頭のうじりで軽く引つかかつたかのような違和感は、この後具体的な形を帶びて現れることになった。

だが、一ついえることがあつた。

どうやら、古泉も、俺も、大して変わらないらしい。ところ一つの安堵のようなもの。

俺が『機関』の連中をほとんど知らないのと同じように、古泉も吉野のことを知らなかつた。

結局のところ、俺もお前も下つ端なんだな。と、なんとなく同情的な視線を送つてやる、あいつの方は特に反応を見せなかつたが、その事実は俺の心を少しだけ軽くした。

まあ、それだけの事と言えば、それだけのことなのだが。

「自己紹介が遅れましたね、私、今回の会合で『機関』側の代表を務めさせていただきます。森 園生、と申します」

つづらとした、しかし形式的ともとれる笑みを浮かべながら森さんは頭を下げた。

「もう見知つているとは思いますが、これからは古泉、あなた方との面識があるのは古泉しかいませんので、今回の会合に同席させてく思いますが、どうか」

立花さんに確認をとるような田線を送り、森さんはそう言つた。

「うんにゃ、別に良いよ。こつちもよくわからんの一人連れてるし」

立花さんがしつと言つた。

つてちょっと待つて下さいや、それじゃ俺までよくわからんの扱いですか。別に俺は来たくなかつたのに。

そう思つて立花さんを見たが、当の立花さんは森さんを注視していて横にいた俺になど田もくれないし、ちらと後ろを見て吉野と田線がぶつかつたが、お互い無言で睨み合つただけで、何も言わなかつた。なんだかすごく生産性の無い行動をした気分だ。

「それでは、場所を移動しましようか? そちらでどこか用意があ

りますか？」

「いや、と立花さんは首を横に振った。

「でしたら、そこの喫茶店にでも入りましょうか。あまり、堅苦しいところはお嫌いでしょ？」「う？」

そう言って森さんは、駅前すぐそこにある喫茶店を指差した。  
何の事は無い、普通の喫茶店で、普通にお客が入っていて、普通に営業している店だった。

外から見る限り、どこまでも普通であった。

いや中に入つても普通だと思うけど。

しかし仮にも超能力者機関と超人集団との会合が、まったく普通のところでいいのかよ。もつとこづ、秘密の場所みたいな、誰にもわからんといでやるのが普通じゃないのか。とか思つて立花さんを見たが。

「おういいねえ、とりあえず腰を落ち着けようかね

とか言つて、「では」一行を扇動して喫茶店へ向かつた森さんへ、躊躇することなくついて行つた。

いや、いいのかよ！とつっこみたかったが、いろいろと他人の目があつたのですんでのところで思いとどまつた。

いや、しかし、なんというか。

俺は、いろいろ言いたい気分の口を一文字に縛り。立花さんに続いて喫茶店へ向かつた。

緊張感があるんだかないんだか、さっぱりわからない状態に、俺はもうどうすりやいいのか訳がわからなかつた。

「あんた何してんの、まぬけ面してるわよ

ふいに俺の隣へ来た吉野が、そんな事を言つた。

おまえさんは、人が苦悩してゐる姿をまぬけ面と言ひのたまうか。

俺は吉野に何も言い返さず。相変わらずミステリアスな雰囲気を漂わせる立花さんの後ろ姿を見つめて、ただとぼとぼ歩いていた。

まず最初にはつま先で言つておこう。喫茶店はこれでもかと言つほど普通だった。

頭に、チエーン店っぽくない感じで、別段客が入りまくっているところわけでもないが、潰れかけていると言つ感じでも無く。それなりに常連がいそうで、かつそこそこ良い雰囲気の喫茶店を思い浮かべて欲しい。

オーケー、それで大体俺達が今居る空間は大体あつてるはずだ。そここの四人用テーブルに、もうひとつ椅子をどつかから持つてきて、無理やり五人席にした感じ。それが今の俺達の状態。

本来二つ椅子の入る所に、森さんと古泉は悠々と腰かけ。反対側にいる俺たちは、二人席のところに無理矢理三つ席を入れ、森さんと相対する形で立花さん、間に俺、そして端に吉野。とつめつめでなんとか向き合っていた。

そしてスペースが狭いので、吉野と俺の体が時々ぶつかり、そのたび吉野が舌打ちした。いやお前、本当に何しに来た。

俺たちは適当に注文を伺いに来た店員に適当に注文した。『機関』側がなにを頼んだかよく聞いてなかつたが。立花さんがサングラス越しの無表情で、「オレンジジュース」と言つたのははつきり聞きとつた。それに森さんと古泉が不覚にもすこし驚いたような表情をしたのを俺は見逃さなかつた。まあ、それが普通の反応だ。ちなみに俺は適当に「紅茶、暖かいのストレートで」とか頼んだ。いや、こういうとこであんまり飲んだこと無いからさ。

そしてそれぞれが頼んだ飲み物が来てから、話は何のきっかけも見出すことなく唐突に始まった。

「それでは、始めましょうか」

森さんが、まず切り出した。

腕を組みながら、さっき来たオレンジジュースの明るい黄色を見つめていた立花さんは、わずかに顔を上げ。森さんへ視線を移した

よう」に見えた。

「まずは、こちらの考え方から。とりあえず言わせていただきます」  
誰も何も、遮らなかつた。

「第一に、我々『機関』はあなたがたと結託もしくは協力する意  
志は、一切ありません」

冷たく。俺たちの間に言葉が染みわたつた。

その考え方を改めて計る必要もない。言われるとは思つていた。  
しかし、最初に言うか。という意外性を俺は感じていた。

「我々の要求は、あなた方が即『彼女』　もとい、涼宮ハルヒ。  
より、一切の干渉をしないと約束し、同時に、我々『機関』に対する  
妨害行為の数々を、停止するように求めます」

滔々と、そうのたまつた。

カタリ、と俺の右手で音が鳴つた。

音の発信源は、吉野であつた。

鋭い視線を森さんへ向けながら、何か言いたそうに唇を震わせて  
いる。

俺はそんな吉野を見ながら、何か不吉な予感がするのを抑え。森  
さんが次に放つ言葉を待つた。

「現時点でのあなたがたの行為は無駄です、あなた方が『彼女』  
へ干渉することは事実上不可能であり。あなた方が『彼女』へ干渉  
する権利は無い」

森さんは、一気にそう述べた後。一息置いてから。

「端的に言えば、あなたがたは邪魔なんです。世界を、『彼女』  
を守ろうとする全ての組織にとつて、です」

しん、と沈黙が横たわつた。

誰もが、森さんの発した言葉を最後に何もしゃべろうとしなかつ  
た。

だが誰もがその言葉の意味を理解していた。  
理解していた。全員が、理解の仕方は違つた。

俺は、重い沈黙の中。素早く視線を走らせ、全体の様子を把握す

ることに努めた。

森さんは、言つべき事は言つたといつ表情で座つてゐる。古泉はいつも通りだ、むしろ変化などあっても気にするか。立花さんは、相変わらず腕を組んだ姿勢で固まつていた。その漆黒のサングラスの下がなにを見ているのか、想像することはできなかつたが。その口元がすこし動き、なにかしゃべらうとしているのを俺は認めた。立花さんが、言われっぱなしになることなく、何か言い返そうとしている。俺は多少の期待と、はたして何を言うのかという好奇心で、立花さんの口の動きに視線を注いでいた。注いでいたので。

俺はすぐ右隣にあつた、火のついた導火線に気が付く事ができなかつた。

「へい、へい、アバズレ。好き勝手言いやがつてこの野郎?ええ?」

吉野が、テーブルに体を乗り出し。最高に最悪なケンカ腰で森さんに噛みついた。

あつ、ばか。と俺は反射的に吉野を抑えようとした。しかし、それよりも吉野の口が開くのが当然早く、同時に、奴らが導火線に油を注ぐのも早かつた。

「邪魔だ?無駄だ?んなもんあんたらに言われる筋合いなんざないんだよ!てめえらなんざ、大した事してない癖にあたしらにあれこれ指図すんじゃねえや!-!」

「おい吉野、やめる」

吉野はまだ何か言い足りないようになにかをわなわなさせていたが、俺が腕を前に入れたおかげか、少し落ち着いたようだつた。どうも、自分たちのやつていることを『無駄』だの『邪魔』だの言われて否定されるのがそうとうに悔しいらしい。

「ここで言い争つても仕方がない。落ち着け、な?」

ここは話し合いの場だ、互いの主張がかみ合わないのは仕方が無いことと、まずは割り切らなければならない。割り切つた上で、解

かりあう点を見出さなくてはいけない。そこが、重要なのだ。

それをなんとか悟つてもらいたかつたが、意外なところから注がれた油で、それは叶わなかつた。

「はあ…」

心底あきれたようなため息が、吉野をとじめようとする俺の背後から聞こえた。

その発信源が、森さんだといふことに、俺が気が付かないはずがなかつた。

「『れだから、あなたがたは迷惑だと言つんですよ』

ぴくり、と吉野が動きを止めた。

それは、たいていの人間が見せる、一種のくせに似たものだつた。

「あんだい？アバズレ。そんなにあたしとケンカしたいのかい？」

いやに冷静な声で、吉野が言つた。誰でも、浴槽からあふれそうなお湯は止めようとする。あふれる寸前の、表面張力。

「『彼女』に関する権利も持たない癖に、実力行使の力は無駄に持つている。そんな暴力装置の様な、性質の悪い『集団』を邪魔だと思わない方が不思議と言つものですね」

ぶちつ

そんな音が、俺の目の前でした。ような気がした。

吉野のクセ毛が綺麗にウェーブしたのが見えた、まるでそれは、あの日の鶴屋さんのように、綺麗に。

ただ違うのは、鶴屋さんは振り上げてナイフを投げた。吉野は、腰に隠していたホルスターから、黒くて棒状の鉛玉射出機 いわゆる一つの、ピストル を取り出した。

あの日の俺は見ているだけだった光景が、今日の前でもう一度起きている気がした。

そう思つたのと同時に、俺の体は動いていた。

やはり俺は、あの日からいろいろ学んだようだ。

俺は古泉が、吉野の行動を阻止しようと動くのを見た。どうやら

吉野に一撃を加えて、ピストルを落とそうとしているらしいと俺の目は見切つた。吉野の右手を掴み、明後日の方に向けて銃口を向けてやり、古泉から吉野の腕を狙つて飛んで来たらしい拳も包んで止めてやつた。

「バシッ、という、どこか小気味のいい音が響き、「あいたたつ！」という吉野の声がそれに続いた。

俺は右手で、物騒な物を握る吉野の腕を掴んでひねり、左手で古泉の拳を受け止めていた。

吉野は「いたい！いたいっての！離しなさいよ！」とか騒ぐし、古泉の方は、意外と出した拳は全力パンチだったと見えて、少し眉をひそめたのを視界の端で捉えた。ヘイ、動きは早いが、腰が入つてないゼロメオ？

背後の森さんにまで視界は十分に行き渡らなかつたが、どうやら森さんも少し驚いている様子であつた。立花さんは、ひゅうっ、と本当に小さくだが、口笛を吹いた。

なんだなんだ、どいつもこいつも、俺がこんな手際良く動くくつてなかつた、と言いたげな反応だなおい？

まあいいさ、そこは。

ガタガタと吉野がわめいていたが、喫茶店の他の客は別段俺たちを気に掛けたりもしないようだつた。素早く周囲を見渡してみたが、特に吉野が黒っぽい物体を持っていることを気にした人もいなさそうで安堵する。しかしこれが無縁社会つてやつか、とかも思つたりしたが。

ともかく、導火線が爆弾に引火して大爆発。会合はめちゃくちゃ。という結果だけは、避けた。

「吉野、銃をそこに置け。置くまでこの手は離さん」

俺は掴んでひねつたままの吉野の腕に握られた銃を、吉野に手放すよう命令した。

「いいから早く離しなさ……」

「置け」

俺は一切の余談無しに話を進めた。

「じとり、と音がして、喫茶店のテーブルの上に、黒い棒状のそれが置かれた。

俺はそれを確認した後、古泉の手を離し、「悪かつたな」と一言添えた。

立花さんは、終始無言であつたし、首から上のみを動かしているようにしか見えなかつたが。一連の動作と話はしつかりと聞いていたようであつた。

その証拠に、慄然とした吉野と、いくらか苦笑いの古泉、そしてやれやれとつぶやいた俺が、ひとまず座り、話し合いとしての態を取り戻した途端。

立花さんは、ゆづくつとその口を動かした。

その口調には一切の迷いが無く。

吉野が危うく銃をぶっぱなしそうになつた事をまったく気にかけてないといふが、まったく問題ではなさそうに、といつより、最初からそれがあつてから話すつもりだつたみたいに話し始めた。

「わて、続けよつかね。」

一言やつ言い切ると、立花さんは組んでいた腕を解いて、机に乗り出した。

全員の視線が、立花さんに集まる。

立花さんは視線が集まるのを待つて、口を開いた。

「あたしたちの主張を語り前に、一つ面白い話をしようかねえ。

これはある組織の、偶然から生まれた、とある不始末な、そいつらひとつては笑えない。そんなお話をね」

ゆっくりとした、けだるそうな。しかし、反面その声はミステリアスな説得力に満ちていた。

その場にいる全員が、その声に魅入られているその時。  
立花さんが注文した大きなオレンジジュースのグラス。  
その中の氷が、カラッと一声。大きな音を出して、動いた。  
何かが変わる。  
そんな、音がした。

## ～桜色・第四章（4）～（後書き）

せつかく第二章まで4部構成だったのに、第四章は5部構成になります。ていうかもうなってます。キリ悪いですねw  
次回こそは第四章クライマックス…に、なればいいなと思つてします（え

ここまで読んで下さっている方、本当にありがとうございます。  
続きはまた来月末の話になりそうですが、気長に待つていただければ恐縮です。  
では、

～桜色・第四章（5）～（前書き）

その5にまでもつれた第四章も、いよいよクライマックスです。  
しかし例によつて、いつもの蛇足感漂つぬけた展開はかわりません  
のでご了承ください。  
では、どうぞ。

「むかしむかし、あるところに、一つの由緒正しき超能力者組織がありました。」

どうもしゃべるたびけだるさを加速させながら立花さんが話しか始めた。

氣取ったと言つよりは、嫌々子守役をさせられて、小さい子供に聞かせる気など毛頭無い昔話を読み上げているような、そんな感じの口調であった。あれ、これじゃそのまんまだな。

「その組織はすぐ立派な歴史を持ち、世界中から超能力を持った人間を集めていて、いろんなところに影響力を持つていてはそれは立派な組織でした。」

森さんの眉が、ぴくり、と動いた気がした。

が、話し手の立花さんは何も気にすること無く、淡々と話を続けた。

「ある日、その組織はどんでもないことに気が付いてしまいます。なんと、世界を滅ぼしてしまいかもしれない『少女』が、この世界に出現してしまったと言うのです。そして、その少女が世界を滅ぼすのを止めるためには、『そのための超能力者』を集めなければならぬ、そう彼らは『なぜか』気が付いてしまったのです。」

立花さんは、所々、それも妙な単語で語勢を強くした。

「彼らは慌てて『そのための超能力者』を集め始めました。彼らは、『そのための超能力者』が『少女』から力を与えられると『なぜか』わかつっていたので、あらゆる手を尽くして探し始めました。彼らは立派な組織ですから、幸いにも『完全な』超能力者は全員集

まりました。」

片方の眉を吊り上げた森さんに続いて、今度は古泉がすこし微笑を崩した。

吉野は相変わらずいらいらとした様子で、不機嫌そうにそっぽを向いていた。俺は、立花さんを注視しながらも、そうした周りの表情の変化を観察していた。

不思議なことに、すばらしくけだるい口調で話す立花さんを、誰も咎めようとはせず。また誰もさえぎろうとしなかった。

「彼らは『完全な』超能力者を全員集めたと『なぜか』わかつたので、それらの人々を使って『少女』の力の暴走を食い止めようと活動をはじめました。しかし彼らは、今度は『少女』の力が不完全であることを突き止めたのです。その上で、不完全であるが故にその『少女』が不安定であることも分かつてしましました。」

いつの間にか、立花さんの話し方からけだるさが消えた。

「『少女』が不完全である理由は、どうやら『少女』がもう一人いることが原因だったのだと彼らは気が付きました。なぜ気が付いたのかとすると、もう一人の『少女』の暴走を止めようとしている組織から、彼らにアプローチがあつたからです。」

俺はなんとなく、本当になんとなくだが、最高に頭のいい探偵が、自分の推理を展開しているような、そんなふうに立花さんがしゃべつてているような。そう演じているような、そんな感じがした。

そう思えるくらい、なんだか立花さんの口調は楽しそうだった。

「彼らはその別の組織とやりとりをする内に、彼らの知らなかつた様々なことを知ります。もう一人の『少女』の方は、力はむしろ安定していて、暴走する心配も無いのだということ。今彼らが躍起になつて暴走を抑えようとしている『少女』の力を、安定しているもう一人の『少女』に統合して、世界の崩壊を防ごうとする動きがあること。そして……力が不完全な『少女』がいるのだから、逆説的に『完全ではない』超能力者がいるはずであり、その存在が既に

確認されていたこと……」

立花さんは俺の方をちらと見た、見られた時は良く分からなかつたが、後でそれは俺のことについていたのだと気が付いた。が、それは後の話。

俺はその場で無意味につなづき、立花さんはそれを見て何を思ったのかは知らないが、にやりとして話を続けた。

「彼らはあわてました。ただでさえ不確定なことが多い中で、わからないことがさらに増えたからです。これでは、このまま『少女』の暴走を食い止めようと活動するのが正解なのかどうかさえわかりません。ですが彼らは『なぜか』、『なぜか』『少女』の暴走を食い止めようとする活動をやめず、『なぜか』もう一つの組織との話し合いを拒否し始めました。むしろ今まで自分たちがやつてきたことに固執し始めたのです。」

立花さんは、殊に『なぜか』を強調してしゃべった。

「彼らがなぜそうしたのかは、私にはさっぱりわかりません。」

立花さんは肩をすくめ、オーバーにわからない、というジェスチャーをした。

心なしか、それを見つめる森さんの表情がいくらか険しいような気がした。

「そうしてこう着状態になる『少女』をめぐる一連の出来事でしたが、ある日、彼らに再びやつかいな事が起こります。」

そういうなり、立花さんは森さんの方をじっと見つめ出した。森さんは、それに対し不快な表情を隠すつもりは無いらしい。厳しい目で立花さんを睨みつけていた。

立花さんはサングラス越しなので、睨んでいるかどうかさえわからないが、ふつと表情を緩め(たよつに見え)、親しげな口調でこう言い放つた。

「まあ、そこからの話は現在とそつ離れていない話になるので、ここはまた昔の話にもどります。」

楽しんでいる、立花さんは間違いないこの状況を楽しんでいる。

俺がそう思い、半ばあきれて立花さんを見上げたその時。

ぱりぱりぱりぱり。

と、どこからか拍手が聞こえた。

場違いなその音の正体を、誰もが突き止めようと辺りを見回すと。おおよそ、この場で拍手をするとは思えない人物が、微笑んで手を叩いていた。

森さんが、最初俺たちと遭遇する直前に見せていた柔らかい表情で、拍手をしていた。それも、非常に上品な拍手の仕方であつた。まるで、オペラを鑑賞した後にするような。

「……見事な昔話でしたわ、うつかり童心にかえったような心持ちです。」

ゆづくつと拍手をやめるなり、森さんはそう言った。

その口調に、一点の淀みも無かつた。

「まだ、終わっていないんだけどねえ。話

立花さんが不満をぶつける、とはいえ、その口元が緩んでいて、本気で不満には思つていないとよくわかつた。

「残念ながら、私たちはこの貴重な時間を昔話で消化している暇はありませんので。そのお話の続きをまたの機会とこい」といふがでしよう」

形式的な答弁しかしないお役人か政治家のように森さんは言った。

しかしその少し後、口調は一転して。

「……どうやら、内通者を洗い出して縛り出さなくてはいけないようですね……あまり、もたもたはしてられませんよ」

恐ろしく重みのある声でそうおっしゃった。

対して、立花さんはその威圧感をなんとも感じないようなカラカ

「うとした笑い声を上げ。

「ありやりや 一体何のお話だい？怖いねえ、くわばらくわばらつ  
なんでもないようこ、軽々とそつ言つた。

むしろその清々しさこ、うらやましかったほどだ。  
森さんはまたもや眉一つ動かさないかと思つたら、意外にも

柔らかい表情のまで、ゆっくりと口を開いた。

「それで、あなたがたの要求はなんなのでしょうか？それがまだ  
示されておりませんが？」

「おや、そうだったけねえ？」

この場面だけ切り取つてみれば、非常に好意的なムードの語らい  
に見えるのだが、前後の事情がある上に、話している内容が内容な  
ので、その場で話を聞いている身としては非常にいづらい雰囲気で  
ある。まあ、聞いている人間など、俺と古泉くらいいしかいないので  
が。吉野はぶつぶつ文句を言つてばかりで、いつちの話などわざつ  
ぱり聞いていないようだつた。

「そうだねえ…要求、かあ…」

その一方で、立花さんはなんだか本氣で腕を組んで考え始めた。  
まるで、要求？ないねつ。とか言い出しそうな気配に俺は多少心配  
になつたものの、話し合ひに来た時点でのくらいは考えてあるだ  
ろうから、問題なく答えるだらうと高をくへつていた。

そして腕を組んだ状態から、口を開き、齒んでいるような様子と  
は裏腹な軽い口調でこつ言い放つた。

「んー、ないねつ」

はい、どーも、くれでねーよ馬鹿。

「つてえええ？立花さん何言つてんですか！？」

俺はついに隣であつけからんとしている立花さんこダイレクトつ  
つこみを決めてしまつた。

ここまで重い空氣だつたり、つこみたくてもつこめない状況  
だつたので、ここへの衝撃はもろに俺の日じろの癖をあぶりだした。  
すぐさま結構な大声でつこんでしまつた事に後悔の念が先行し

そうになつたが、すぐ横の吉野から「つるさいわ」と小声が聞こえたのでむしろさつきはお前の方がうつむきをかつただろーがと内心反撃する方が優先されて、場の空気をぶちこわしたことに対して謝罪するタイミングを失つた上、非常に微妙な空気が場を支配し始めた。

「……」、笑うとこ? といつ疑問符が、一同の頭に見え隠れしていた。

「ごめんなさい、もう遅いけど。

「……なにって言われてもねえ……」

俺のせいで続ける言葉を出す機会を失つたらしい立花さんは、俺に対する返答の形をとつて、なんとか話をつなげようとしているようだつた。ほんと「ごめんなさい。

「ないもんは無い、からねつ」

だが結局言つていることは何も変わつていなかつた。

どうやら本氣で要求が無いと言つておさらしい、と把握した森さんら『機関』サイドの表情は、一気に困惑したものになつた。

まあそれもそうだ、かく言つ俺も困惑している。それじゃ、ここで話し合つている意味が無い事になつてしまつ。一体立花さんは何を考えてこるのか?

森さんと古泉がこちらを解しがたい表情で見つめているのをじつと見つめながら、立花さんはサングラスの位置を多少直し、前かがみの姿勢から椅子に寄りかかり、いぐらか偉そうな姿勢になつた上で。

「ただ、ね」

俺もあまり聞いたことの無い、珍しい声を出した。

それは立花さんの口のけだるさを、いやけだるさのみをカットしたような。

まるで、地獄からお呼びがかかるんだとしたひ、これぐらいの不気味さとミステリアスさと美しさをともなつてくるんだろうなあと、リアルに想像できてしまうような声。

要は、非常に形容しづらい上に成り立つてゐる絶妙に威圧感がブレンズされた声だと思つてくれれば、感覚的にはだいしたいあつてい  
る。

「いこひを一つ、教えてあげるよ」

聞き様によつては、男とも女ともつかない声である。

百人中百人が、この声の感想を「不思議な」と形容する。この世の常識を跳ね返し、全ての理を拒絶していふよつた。

「あたしたちはお前さんに何も求めない、何をして欲しいとも思  
わない」

聞いてこるものを感じな世界へこなつてしまつよつた。

どこまでも続く回廊を歩いていふよつた。

そこで音が反響していふよつた。

「ただ、あんたが本氣で世界を滅ぼしたくないと思つたな。あ  
たしたちを頼るがいい」

最初は錯覚だと思うのに。

次第にその感覚を失つていき、前後不覚に陥る。

田の前で音源だけが見えるそれだけ、あとは何も耳に入らなくな  
る。

「その時は、あたしたちは全力であんたを助ける。それ以外なら、  
あたしたちは何をする可能性だつてある。それだけのことだ」

ハツとなつた俺が目には、オレンジジュースをさもおいしそうにすする立花さんだった。

「ぞぞぞぞー、と丁寧にストローで飲んでる。

コップはテーブルにのせたまま、左手でコップをささえ、右手でストローをつまみ、順調にそのコップの中身を胃に流し込んでいた。どうも立花さんはかなりの肺活量をもつてゐるらしい。あれよあれよとオレンジ色がなくなつていつたコップは、その透明色が全体に染み渡つたところで、カラを示すひときわ大きい「ぞぞぞぞぞー」という音を響かせていた。

オレンジジュースストロー一気飲み、ううん、字面にすると同じ文字がならんで非常に不恰好だ。

「って、そうじやない。俺はうつかりそんな立花さんの様子をじっくり観察してしまつたことを反省し、周りはどういう表情をしているのか、あわててうかがつた。

が、どうやらその必要はなかつた。

森さんも、古泉も、吉野も、俺と類似した状態であつた。

四人が四人とも、びっくりするくらいの無表情で、立花さんがジュースを飲み干す様子を観察していたようだ。

そして四人とも、疑問符が頭を強制占領しているのは火を見るよりあきらかだつた。

疑問の言葉すら出てこない、何を疑問にすればいいのかさえ疑問な状態だからだ。

「……驚きました、あなたは魔法使いか何かですか？不思議な術をお使いになるのね…」

誰も何も言わない中、空になつたコップを眺めて立花さんこそ、

ようやく森さんがそんな問いを投げかけた。

いや、魔法使いつて。とつこみたくなるかも知れないが、ぶつちやけるとその時の俺たちの状態は、まさしく森さんと同じ気持ちなのだった。

一体、どんな魔法を使ったんだ？

まるで別の世界に飛ばされたような、しかし立花さんが何を言ったかだけははつきり覚えているというおかしな記憶をまさぐると、いやがおうにもそう思いたくなる。

俺だって、こんな感覚は初めてだった。

「んー。知り合いに魔法使いが居る？」

透明色の中に透明の氷を閉じ込めたコップを眺めながら、立花さんはそう問い合わせた。

元の、けだるい口調だった。

「私の知り合いに、ですか？」

森さんがそう言つと、立花さんは「うん。」と同じもなげに言つた。

「……残念ながら、魔法使いの方とは知り合つたことはありますわんわ」

少し悩んだ後、森さんはそう答えた。てかまあそりゃそうだ。

「うん、あたしもいない」

再び立花さんはこともなげに言つた。なんだこの問答。

透明のグラスを眺め飽きたのか、立花さんはゆっくりと俺に視線を移動させ、サングラス越しに俺を眺め出した。

なんだろう、なんかついてんのかな。と思つてあわてて自分を見回すが、特に何もないので立花さんの視線に射抜かれるままになつた。

「あたしゃね、ただ人よりもよく目が見えるだけだよ。魔法なんて使いやしない。ただ、見えちゃいけないもんまで見えてしまって、目に良いいだけなのさ」

俺の方を向いてそんな事いうので、俺になんか見えちゃいけない

もんでもついているのかと不安になつたが、そつ思つた矢先に立花さんは前に、森さんの方に向き直つていた。

「…それは、人の心も見える、ということ?」

「わあ? そいつはどうだらうねえ?」

なおも何かを探ろうとしているのか、問いを続ける森さんに、立花さんは意地悪く笑つて答えを濁した。

俺は一つ、明らかな変化に気がついた。

森さんが、うつむき加減で何かを考えているようなそぶりを見せていたのだ。いや、そういうと大げさかもしれないが、少なくとも、せつきよりも視線が下向きで、机の上を無目的に見つめているようになつた。これは何かの思考に集中しているわかりやすい傾向だ。これは、俺たちと会つてからはじめて見せた挙動だつた。すると俺の横から、ガタリ、と音がした。

音がしたほうを見ると、立花さんが立ち上がりつていのが見えた。その表情が、うつすらと微笑んでいるのを俺は確認した。

「ただね、見られているかどうかはわかるよ。どうやらここは、まだここにはのぞきはいなによつだけどね。生憎あたしは耳は良くないからそつちはわからんけどねえ」

立花さんはよくわからないことを淡々と言つた、今考へても、この言葉の意味はよくわからない。

「…なるほど、やうですか」

が、森さんの方はよくわかつたようだつた。古泉の方は、表情に変化が無いのでよくわからないが、まあわかつてないだらう。

「まあ、詰まらん話はここで置いておいてと!」

立花さんは伝票を取りながら、そんなことを言い出した。

「今日のところはこの辺でお開きにしたらどうだい? しょっぱなから生産性のある話なんて出来そうにもないからねえ。お互いの顔見せたつてことで、ここから先は次回につなげるつてのはどうかなつ?」

つまるとこり、立花さんは話し合ひの終了を提案した。

誰にとつても「え？ もう？」と言いたくなるようなタイミングだった。吉野（どうやら機嫌を直したらしい）で冗談、「え？」という顔をしていた。だつてまだ、何もしていないじゃないか。そんな空気が流れ始めたその時、やはりあの人人が動いた。

立花さんに続いて、森さんが立ち上がった。

「ええ、あなた方のほうにこれ以上話をするつもりがないのなら、すぐにも帰らせていただきますが？」

最初俺たちに会つたときのように、警戒しまくつといった感じの口調でそう言つた。

「うんうん、まあ最初から根を詰めるのもよくなっからね」  
にじやかな雰囲気を漂わせながら、立花さんは森さんに近づいていった。

森さんの前に立花さんは立つた。身長はどうやら回りくじこのようだ。これから見ると、にじみ合ひてこぬよつて見えるへりこ、田線の高さが同じだつた。

「ま、これからもよろしくついて」と

立花さんは右手を差し出した、どうやら握手を求めてくるへりこ。

「ええ、どうぞお手柔らかに」

森さんも、多少ためらいながらも握手をし返した。

「んー、ほいじゃあこれはどうしそうか？」

「ああ、お会計でしたら、こちらが持ちましょウ」

「ありややうか？」「いや悪じね。じゃあこの次はうちが持つ

よ

「ええ、ではやつこつ」と

森さんが、口調は固いままだつたが、表情はにじやかにやつぱつた。

そして俺は、森さんの右手に向かの紙切れが握られているような気がした。

あれ？と思つて一度見した俺だが、次に森さんの右手を見たときには紙切れの影さえもなかつた。普通に右手があるのみであつた。

た。

気のせいだった、と思つことにしたが。なんだか不気味な気がして、この記憶はしばらく俺の頭の中に残つた。

まあ、この記憶を残しておいてわかつたことなんて、立花さんがどうやらその辺のマジシャンよりもまくマジックをやるらしいといつことだけなのだつたが。

それもまた、後の話だ。

考えてみると、俺はどこままでいつても未熟者で、その上勉強不足もいいところだつた。

勉強不足というのは、何も学校の勉強が、じゃないぜ？  
人はそれを漠然とした言葉で「社会勉強」と呼ぶ、ある分野をかじる人は「インテリジェンス」とかも言つりしい。よく知らんけど、近藤が訳知り顔で言つてた。

まあそんな言葉のバリエーションだなんて正直どうでもいい。  
大事なことは、

とにかくあらゆることを俺は知らなすぎた、ということなのだ。

いや、知らうとしていなかつた。

俺はこの時立花さんの昔話を聞きても、なんとも感じじるところが無かつた。

あの話が俺に直接関係のある話とともに思えなかつた。

直接どころではなく、俺に関係した話だつたのだ。むしろ、あの中には俺の存在について丸いと言及しているといつても過言ではなかつた。

それを本当の本当に思い知るのはずつと先になる。

そしてそれは、俺がひどく後悔をした後に、ようやく思い知るの

だ。

この時は『機関』でさえも、俺の存在について大して気にかけていなかつた。  
気にしていないままだつたなら、どうなつたのだろうと考へる時がある。

それはそれで末恐ろしいことなのだ。

この会合を境に、少しずつ俺の周りが変化していった。今まで霧のように実態のつかめない変化だつたものが、目に見えて変わってきたのだ。降つてゐるかどうか分からぬ小雨も、雪になれば降つてゐるかどうかはすつとわかりやすくなる。

全ては立花さんがえたのである。そしてこれだけは言える、あの人は本当にすごい人だ。

俺が何であるのか、どうすべきなのか、あの人は最初からわかつていたんだ。

俺はたまに考へる事がある。

どうして立花さんはいつもサングラスをしていたのかと。  
あれは、その下の表情を隠していたんじゃないと俺は思つ。  
見えないものまで見えるから、会う人会う人の進む先にある苦しみや、喜びまで知つてしまふのではないのだろうか。

もつと言えば、運命のようなものが見えていたかもしれない。  
今考へても馬鹿馬鹿しい話だ。本人だつてそんなことが見えるだなんて言つたことはない。

でも。

なんとなく、あのグラスの下の目は、泣いていたような。

そんな気が、するのだった。

もちろん確証なんてものはないのだが。ただ、

俺は特別目が見えるわけじゃないが。

勘は意外と当たるんだ。

それだけは言つておいた。

第四章が終了しました。

非常に後味の悪い終わり方になつていますし、結局話し合いで何やつたの？って話になりそうなにおいがふんふんしますが、何も途中でアイデアが飞きたから話しあじの描写が中途半端なわけではありません（笑）

実は森さんは初登場時まで設定がよく決まっていなかつたので、なんだか途中、違和感があつたりするかもしませんが…「げふんげふん」。

何がなんだろ？と、この第四章は重要なターニングポイントです。どの辺が重要かは、読んでいただいて、なんだかここに重要そうだなあと思う所があつたらもうすでにそこが重要です。

要は、いろんな所が重要だと言つことです。

何の答にもなつてない上に、何意味不明なこと言つてんだつて話ですが、そこはもう、そつとしか言いよの無いという言い訳で語彙力などを露呈している作者をしかつてくださいとしか言いようがないです（笑）

次回から第五章。第四章の中盤から忘れ去つていたことに、いよいよ踏み込んでいくのがメインの内容になると思われます。

更新はまたもや来月末になりそうですが。ここまで読んでくださっている方々はどうか気長に待つていただければ幸いです…。では、また来月。

## ～桜色・第五章（1）～（前書き）

第五章突入です。実は四月中に原稿はできてたんですが、諸事情あって上げる事が出来ませんでした。

今月はさらに書けるかどうかわからないですが、とにかくにも新章突入。嵐の前の静けさな日常風景です。どうぞ。

## ～桜色・第五章（1）～

Coloring envelopes ～桜色・第五章～

おやつさんに言わせると、この日本って国は本当に安全らしい。どうこいつ意味で安全か、と云ふと、もちろん治安がいこという意味である。

まず、住民が普通に銃を持つて居るところがここではないそうだ。それどころか武器を携帯している人間のほうが多いの国では少ないつて書つのだから驚きだ。いやつて時どつするんだろう。だがここではそもそも云つて時が希少である。警察がそこひじゅうにいるわけでも無いのに、俺はこの国に来てから暴力沙汰の事件を見たことが無かつた（スリらしき窃盗は何件か見た）。

だからこの国の人々は、得物の所在よりもむしろ己が財布の安否を心配する。本当に命を守る必要の無い国である。まあ、ローマとかだと両方心配しなきゃなんだけど。

この国に来てもう一年半ちかく。本当にこの国だと思つ。

まあそれは、俺が財布の所在よりも得物の所在を気にする人間だから思うのかもしれないが。

そしてそれでも俺は、今日もベルトの裏にナイフを仕込んで何食わぬ顔で登校していた。

何食わぬ顔というのは別に意識してつくづくしているわけなく、俺はこの手の得物を仕込むのが普通なので、普通の顔をしているだけである。

何も、この国の治安の良さを信用できないから持つて居るわけで

はない、とあらかじめ言つておく。

俺が暮らしていた所では、これくらいの用意をしておくのが普通で、俺もそのスタイルになれているのだ。それだけのことだ、それ以上でも、以下でもない。

そんなことを考えながら、北高名物の長くてそこそこ急な坂を上っていた。

週明け、ブルーマンティーの登校となれば、この坂がまずネックになるのは北高生としては仕方のないことである。かくして俺も、数日ぶりのブレザーを汗で滲ませながら登校しているところであつた。春もそろそろ終わりかなと、ちらと思えてくるような太陽光線が降り注ぐ朝だつた。梅雨が来る前に夏がくるんじゃねーか、とか言つてた中田の言葉も、今なら納得できるような気がする。それくらいに、この日の太陽は結構な熱線を送つてきていた。坂登りで自然と体が温まるから、この日の太陽熱線は余剰熱にしかなりえない。結果、それは体外に汗という結果を伴つて出てくる、要は「太陽ちよつと自重しろ」と言いたいわけである。そういう日で、そういう朝だつたと言うことだ。

それだけの朝、だつたはず、であつた。

地道に坂を制覇していく俺の後ろから、ぽんぽんと背中を叩いた人物がいた。

俺が登校時に会つのはたいてい中田で、中田は首に手を回して暑苦しく寄りかかつてくるか、背中をバーンと結構強めに叩いてくるので、ぽんぽんと優しく背中を叩いてくる人物が今ひとつひつかからなかつた。

だから振り向いた俺は朝っぱらから驚愕した。

背後にいたのは、にこりと薄い笑みを浮かべた鶴屋さんだつた。

いつもの豪快な笑みとはまた一味違つた鶴屋さんの姿がそこにあつた。俺は久方ぶりに鶴屋さんが目の前にいる光景を目にし、一瞬

夢かとも思つたが、どうやら現実らしいと思つて直し、しかしこの鶴屋さんの様子でないことに一抹の不安を覚えながら、それも当然だと思つ気持ちも相まって、結局なんと言つていいかわからず、こつこつとさに便利な定型句を用いるしかなかつた。

「…おはよひらいます、鶴屋さん」「やつ、おはよー」

驚いたことに、定型句を発するタイミングは一人同時だつた。

路上に、無駄なあいさつの唱和がもたらされて、一瞬二人とも黙る。

直後、鶴屋さんは笑つた。俺も、笑つた。

鶴屋さんのそれはいつもの豪快な笑いには程遠かつたが、あの時からしてみれば一番の笑顔だつた。

「なはははは！何コレあたしたち息ぴつたりだねつ、漫才コンビでも組むにょろ？あつははは！」

鶴屋さんは自分のひざをばんばん叩きながら、そもそも愉快なものを見たと言つた感じで笑つていた。

俺もつられて笑いながら、言つた。

「コンビ組むとしたら、どうちがボケでツツコミなんですか？」

「えー、んー。あたし『なんでやねーん！』ってやりたいからツツコミかなつ」

「え、俺ボケなんですか？」

「いやはは、なんでやねーん！」

「いやなんでそこでつっこむんですか！別にボケて無いでしょー！」

鶴屋さんが俺の肩につつこみを入れた腕を払いのけながら、俺が逆につっこんだ。

その様子をにたにたと見ながら、鶴屋さんはなぜか騒らしそうに言つた。

「うん、そのつっこみのキレがあればいけるねつ」

なんかデジャヴ。

あはははは、と再び明るく笑つ鶴屋さんを見て、俺もまたつられて笑つた。

なんだ、普通じゃないか。と、本当にちらとそう思つた。

あの日あの時のことは、まるで忘れてしまったかのようだつた。しかし、この時の一人だけを見れば、本当に忘れてしまつたように見えるが。俺はこの時もあの時のことを見れたりなんてしなかつた。たぶんそれは鶴屋さんも同じだと思う。ただここで明るく話しているのは、普段から必要以上にいがみ合う必要が無いだけで、早い話が、普通の関係を取り繕つていると言つて過言でなかつた。

だからこの問答は、表面の好意的な印象に反比例して、悲しいものだつた。

そう思うと、どんなに楽しく話していても、敵同士なのだという意識が頭を離れない。ベルト裏の仕込みナイフがすられていないかを確認してしまう程度には、俺もあの時の記憶が刷り込まれている。改めて言おう、俺はどんな気持ちで鶴屋さんがあんなことをしたのか、これっぽっちもわからない。いや、わからなかつた。わかるうとしていなかつた。

だが俺は考えた、では、鶴屋さんは？

鶴屋さんは俺がどうこう気持ちでの行動を受け取つたと思ったのだろう？

俺が彼女の考え方を理解しようとしているのと同じように、彼女も起こした出来事のことばかりに目がいって、俺が何を考え何に衝撃を受けたのか。理解していいのではないか？

少なくとも、と俺は考えた。

それが人にどんな影響を与えるか、冷徹に人的損失を考えるだけで人に向かつてナイフを投げれる人間なんて、そんなもんただの殺人マシーンくらいだ。あのときには彼女なりの激情があり、葛藤があり、もしかすると情けがあつたかもしれないのだ。

なら俺にはそれを知る義務がある。

いや、俺は知らないくてはいけない。世界一彼女のことを探りたいと思うのは、俺だという自負があるから。

たとえ彼女が、あの時俺を殺すつもりだつたと言つたとしても、

俺はその事実を受け止めよう。それでも知りたい、と思つ。敵同士なんてそんなもん関係ない、もつと違うところで理解したい。

そこで俺は、ふと一年前のある記憶を掘り起こした。

自分ではどうに忘れたと思っていた、思い出してもセピア色を帯びたような、そんな色しか出ない記憶。でもそこには、俺が忘れた。いや彼女も忘れてしまったなにかがあった。

ああ、そうだ。

あれは一年の時だった。まだ桜の残る季節に、初めて誰かと話したあの日。

あの時見た豪快な笑いは、俺が人生で見た中でいまだナンバーワンの笑顔だ。

全ての不安を吹っ飛ばすようでいて、それでもその人が抱えているものをまとめて包容してしまったような、優しくて何よりも豪快な笑み。

敵味方なんて、関係ない。そんなもんはこれっぽっちも無い」ところで俺たちは会つたはずだつたんだ。

逆に問おう。

その時から、何が変わったんだ?

何が変わったと言うのだ。

今までと同じでいけない理由がどこにあるのだ。

『機関』？『世界を滅ぼしてしまうかもしれない少女』？『リスト』？それがどうした。

そんなもんは全て些細でこの場に限つてはどうでもいい。問題はそんなもんに搖るがされて、それを指くわえてみていいのかと言つことだ。

それに否と答えるのなら。俺は相手にもそれを求めなければいけない。

それで相手が嫌だと言つたら、お前は敵だよそれ以上でも以下でも無いんだ今までのことは忘れよう、と言い出したなら俺もあきら

めよう。

でもそりでないのに大事な人を捨てられる程、俺は薄情で馬鹿正直なつもりは無い。

なら、確かめるしか無いだろ？

今さら相互理解だなんて奇麗事を言つつもりは無い。  
そんな幻想もちらつと持っていたが、昨日『機関』と向き合つてほとほと確信した。

そんなもんほぼ不可能だ。

だから俺は今日はつきりとせる。

『機関』との話し合いの前に、鶴屋さんへかけた電話。まずはそれの答えを、確認しなくてはいけなかつた。

「鶴屋さん」

「ん、なんだい？」

「この間の電話のこと、覚えてますか？」

俺はごく自然に話を切り出した。自分でもびっくりするくらい普通の声だつた。

ひょっとすると、俺はずつと前から言葉を用意して、今が今かと言づのを心待ちにしていたのかも知れない。

「……覚えてるよ

途端に、少し低くなつた声で鶴屋さんが言つたのを俺は聞いた。

「答えは？」

「……いいよ」

「それじゃあ、放課後ですね」

「……ねえ、じすぐんさ」

「はい？」

いちいち発言が言ことどむよつな鶴屋さんと少しひつかかりながら、俺は鶴屋さんを見た。

その表情は、快活な笑みをどこかに追いやつた、不安そうな表情だつた。

「それは、ここではできないのかい？」

「できません」

即答した。

すると一瞬驚いた表情を見せた後、鶴屋さんは「まかすよ」とやがてひよりと答えた。

「そつか…大事な話なんだ?」

「ええ、すごく大事な話です」

「そりや、放課後だね」

「はい、放課後です」

意味の無い単語を繰り返しながら、鶴屋さんと俺は学校を目指して歩いていた。

会話はこの辺でおわりかな、と俺が思つたときだった。

「ねえ、しづくんわ」

不意に、鶴屋さんが切り出してきた。

「しづくんはまへ…」

何かを言ひ出さうとしているのだが、いえないような。そんな表情。

俺は鶴屋さんの言葉を待つた。しかし、鶴屋さんはいつもいたまま、とうとう次の言葉をひねり出さうとはせず。

「…やつぱいいや

彼女にしては珍しい、歯切れの悪い言い方だった。

「何ですか、気になりますよ」

「いや、いーの。しづくんは女心に疎いんだから、これくらい察しなさいなつ」

俺が苦笑いしていると、鶴屋さんはそうよくわからない言い訳をして、やはりやわらかく笑つた。その表情も十分かわいくて、ずっと見ていたくなる魅力的な表情なのだが、俺にはそれが本調子の、本当の鶴屋さんの笑みでは無いことを良く知っていた。

その柔軟な笑みは、見落としてしまいがちなくらい自然だが。俺にはわかるのだ、その中にあるわずかなぎこちなさを。

だから俺は、放課後を待ちきれずに言つてにした。

「鶴屋さん」

名を呼ばれ、怪訝そうにこちらを向いた彼女に。

「俺は、豪快に笑う鶴屋さんのほうが好きですよ」と。

「…………ほえ？」

ぽかんとした表情を鶴屋さんは浮かべた。  
やがてその言葉の意味を噛み砕いて理解して脳髄がそれを認識したらしく。

「…………なあーに言つちやつてんのー！」

途端に表情を笑顔に変えながら、俺の背中に強烈な一撃をお見舞いしてくれた。

それも、教科書を詰め込んだカバンで。

一瞬呼吸できなかつたぞ。

「いつたー！思ひ切りやらなくともいいじゃないですか！」

「だーめだめ！女の子をたぶらかそうとしたらそれ相応の危険が伴うつてことを体で理解しないとねつ！」

そういう鶴屋さんの表情は、どうも100%の笑顔とはいかなかつたが。

少し前よりは、ずっとといい笑顔だった。

ただ、その代償が俺の背中に深い一撃が突き刺さつたので。

あまり、手放しで喜べたものでもなかつたが。

それでも俺は、もつと鶴屋さんに笑つて欲しいと思つた。

それがどんな代償を払うものだとしても、見たいと思つた。

それが払えるものなら、俺が払いたいと思つた。

だから俺は、一縷の望みをかけてこう言つた。

「鶴屋さん、放課後、待つてます」

鶴屋さんは、笑顔のまま。さつきと同じ笑顔のままだがしかし、しつかりとうなずいた。

そしてその直後。

「おーっ！？わがクラスの才色兼備カッフルがケンカから和解か！？」  
「ビックニースだな！」

背中から、さつきのかばんとはまた違った衝撃が加わり、俺は前につんのめった。威力 자체は劣るが、恐らく体重をかけているのだ。

そして、気づくと首に腕がまわり、中田がまさしく暑苦しい振る舞いで俺に絡んできた。

「おっす、おっす、お二人さん！いいねえ、健全な高校生諸君は朝から朝の連続テレビ小説も顔負けの純愛劇を展開せずにはいられねえってか！くーっ、憎いなこんちくしょー！」

中田が俺に寄りかかるようにしながら、顔を寄せてそういうのたまつた。

「ばか、ちげーよ」

「おおおん？何が違うんだ閑歩君？このやうつ！こつだつて得をするのはイケメンだよなそудよな！あーあーお天道様は思いのほか非情！」

もう何が言いたいんだかわからない中田が言い立てるのを横目に見ながら、俺は首に巻かれた腕がめちゃくちゃ暑苦しいことこの上ないことを中田に伝えたが、当の中田はさっぱり聞いていないようだった。

ああもう、なんだってんだ。

いつもよりもかなり強めに首を締め上げてくる中田の腕の中から、ちらと鶴屋さんの様子をつかがえ。この笑い上戸の女神様は、俺と中田がじやれているのをほほえましいと言った表情で眺めていらっしゃる。

あー、まあ、助けてはくれなさそうだ。

仕方が無いので、実力行使で中田の腕をはらいのけ、反撃で腕をひつつかんでひねる。もちろん、友情補正で威力には修正をかけているので大丈夫だ。本気でやつたら関節」とは言はせるけどさ。

「あいてて！痛い！閑歩！悪かった！いてえええええ！！！」

腕を本来曲がらない方向に曲げているので、そりや痛がるつ、俺の首締め上げた罰と思え。けつこう苦しかつたんだぞ。

中田が少し洒落にならない痛みにもだえている姿を見て、そろそろいこか、あと少しくらいやつておくか、少し迷つたが、なんだか加虐精神のようなものが芽生えたのか。あと少しこのまままでいいか、と思つた時。

「こつん、と俺の頭を小突く人がいた。

「はーい、終了つ。そんくらいでいいんじやないのしづくん?」

鶴屋さんだつた。ええー、いいとこだつたのに。と少し不満を申し立てようとしたのだが、鶴屋さんの後ろにあるお方の影を認めたのでやめておいた。

「と、虎野くん、暴力はよくないと想います…」

何を隠そう、我らがミス北高、朝比奈さんだつた。

北高生のみならず、このお方の前では誰もが紳士的でなければならぬとはこの世の決めたルールだ。

俺は中田の腕をぱつと離した。

「すみません、もうしませんよ

「あんまみぐるに刺激の強いもの見せないよつこねつ、この子すぐきゅーつなつちやうからさつ」

「そんな鶴屋さん、私そんなにか弱くないですよう

「…で、俺の心配をしてくれる人は皆無なわけか?おー

「ああ中田、まだ生きてたのか

「おい閑歩、お前にへうなんでも本氣で仕返しする」たあねえだ

る

「…あー、悪い悪い。今度はもう少し弱めにやるよ

「もうやるなよ、骨が折れるかと思つたわ

「あと少しだつたんだけどな

「オイ、待て、何があと少しだつたんだ。折れるつことか?あ

と少しで俺の骨折れてたつてことかおい

「はいはい、仲直りしたによう?そろそろ行けりよつ

「今の仲直りだったんですね…？」

「ううん、みくる。男同士の友情つてのは、額縁通り受け取つちやいけないロマンがあるのね。拳を交えて一人の友情はさうに深まつたのさ…」

「そなんですか、未知の世界です…」

「いや、拳交えて無いっすから。変なこと教えちゃダメでしょ」

「こまけこたあいいんだよ、我が生涯の友中田よ」

「棒読みで言われても感慨もなにもねーぞ」

「あつはつはーまあ早く学校行こー若いのが四人固まつて道塞いでちやしうがないしさ」

「あーあ、あ、そうだ閑歩。いや我が生涯の友虎野」

「え、何この人ジャイアン?」

「なんでそんな反応なんだよーつづこめよーむしろスルーでもよかつたよー」

「にやはは、今日のじずくんはうつ氣に田覚めたのかなつ?」

「ええ、若干」

「軽く肯定しやがつたよ、何のためらにも無く肯定しやがつたよ

」「イツ」「で、何か聞きたいことあつたんじゃねえの?」

「ああそう、化学の宿題やつてきたかつて」「うーあー…、嫌なこと思い出させたなお前

「…やつてないのかよ、まあ俺もだけど」

「おやおやつ?宿題忘れとは関心しないなつ」

「で、そういう鶴屋さんは?」

「あははは、じうじうのは現場一発勝負つて相場が決まつててねー」

「要は、やつてないんじやないですか

「そもそも言つてにやまは

「もう、鶴屋さんまで…」

「おーつ、みくるはやつてきたの?」

ねー

「はい、ちやんとやつてきましたよ」

「えらいねーつ、あ、でもやるページ間違えてきてたりとかしてないかなあ」

「何ですかその微妙な願望」

「わからないつかなあ、みぐるせの容貌でも十分にかわいいけど、ここにデジック娘要素が加わることによつて完全体になるつてことがわづ」

「……いや、わかりませんけど」

「えーつ、今日のしづくんはわからずやー」

「あー、痴話げんかはじまつちやつたんで、先に行きましたか朝比奈さん」

「痴話げんか…つてなんですか？」

「ああいうカップルでやる、仲がいいほどケンカするあれです」「おやおや中田君つ？ あたしがいないのをここにみぐるをHスコートしようなんぞ、五年早いよつ…」

「おわあー、この間に背後につ！？」

「ふつふつふつ、中国二千年の歴史もなんのその、伝統と実績の鶴屋流古武術にかかればなんのこれしきつ！」

「わー、俺が鶴屋さんにかなつわけないじやないです。降参降参」

「うむ、潔くてよろしこつ」

「で、それはいいんですけど。しゃべりながらゆつくつ歩いてるせいで、そろそろ時間やばくないですか？」

「およ？ あれつ、ホントだ！」

「遅刻しちゃいます！」

「いや、まだ走れば間に合つますよ」

「うんにゅ、仕方が無いねつ。みんなで朝のランニングと行つつかつ！」

「あーもう、ただでさえ暑いのに…」

「お前が俺にからむからだろ中田」

「何言つてんだ、お前が朝から鶴屋さんといひやこひやしてゐるからー。」

「してねーよー折られたいかー？今から折つてやろうかーー！」

「あはははーおー一人さんあたしをめぐつてケンカなんてしないでおくれつ」

「み、みなさん待つてくださいーー」

「みくわーー、しつかりついてこないと遅刻だよー。がんばれー

つ

「は、はひーー」

鶴屋さんの笑い声、朝比奈さんのかわいらしい悲鳴、俺と中田の怒号。

北高名物の坂道は、それらを全て日常として包容しながら、今日もただそこにある。

やがて校庭の桜の木が、もう既に桜色を失つて久しいことに気が付く。

しかし俺は、葉桜も嫌いではないのでこれはこれで良いと思つた。  
どんな花だつて永遠に咲くことは無いし、それは葉だつて同じ事が言える。

でも、どうせなら、長い方が良い。

みんな一緒にいれるなら、長い方がいいだろつ。

ふと、遅刻しかけで駆ける足をひきすりながら、やう思つたのだつた。

たとえそれが、仮初めの葉だつたとしても。  
それが俺には大事だから。

今回は日常風景でした。対鶴屋さんへの嵐の前の静けさ。

時系列的には、原作で書つところの憂鬱編後半のあたりです。いま  
ごろキヨンは古泉から超能力者です云々と書いて聞かされてるところか  
も知れません。

もうわかりきつてることかとは思いますが、桜色編は原作の憂鬱  
編とリンクしてます。桜色編とわざわざ書つてこなことは、続編  
も考えてあると書つフラグをたててている訳ですが、ぶっちゃけそこ  
まで気力が続くかわからないので今のところホントにやるかどうか  
は不透明です（え

それはともかく、リンクしてることには、桜色編のラストは  
やはり憂鬱編のラストと同時進行だということです。

どのように原作の出来事がからんでくるのか、そのあたりも探りな  
がら楽しんで頂ければと思います。

で、第五章の続きですが、今月中の更新はおそらく難しいです。  
あらゆる用事が重なつてているため、よほど幸運が巡つてこない限り  
は、更新できません。待つて下さつててこの方については、ホントす  
みません。

しかし、少なくとも桜色編のラストまでは構成も定まつててるので、  
時間ができれば必ず続編を投下できます。  
どうかゆつたりとお待ちいただければ幸いです。  
では、またいつか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7307k/>

---

Coloring envelopes

2011年10月7日00時32分発行